
しらゆり

佐倉アヤキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しらゆり

【Zコード】

Z52870

【作者名】

佐倉アヤキ

【あらすじ】

下級貴族の次女として生まれたアルカナは、なぜだか突然王様の甥で、しかも絶世の美青年と名高いピアキイ閣下と結婚することに。普通ならば喜ばしいシンデレラストーリー。けれどアルカナは知っていた、かの閣下が、一日と待たずさまざま女性と「お付き合い」していることを。

ラブラブなようでいてそこはかとなくブラックな、一応宮廷恋愛小説。基本的にアンハッピー。

世界設定（前書き）

本作品は只今連載中の「アテナのリコリス」と同世界観の物語となります。もちろんそちらの作品を未読でも問題なくお読みいただけます。予めご了承ください。

世界設定

世界設定

【地名】

ファンテイライスト…この国の都。 ”神都”とも呼ばれる、 ”世界王”陛下のおわすところ。大層な名の土地だが治安は悪く、 貴族街の外には広大なスラムが広がっている。

ファンテイライスト神殿…世界創設の要にして、この国の政治機関も兼ねた、 国の王城。

【信仰】

双子神…この国で信仰されている神。男女の双子神で、互いを思うがゆえに両者とも命を落とした。今は人間に身をやつしていると言われている。

エル教…この国の双子神信仰を、双子神の名にちなんでこいつ呼ぶ。

【役職】

世界王…この国の王。この世界にはひとつしか国がないと言われているので、世界を束ねる王としてこのような名がついている。現王はショーロラスディ。エファイン家が代々世襲している。

高等祭司… ”世界王”直属の臣下で、実質国を動かす機関は彼らが切り盛りしている。

神の子…國の大都市のひとつであるアトメディアの権力者のこと。

【一族】

ハイネント家…ヒロインの生家。ファンタティライストの下級貴族で、超がつくお人よしが現当主。
エファイン家…世界王の一族。そのほかにも色々と秘密があるらしい。

登場人物紹介（前書き）

新しいキャラが登場するたびに増えていきます。連載最新話までの
ネタバレを含みますのでご注意ください。

登場人物紹介

【メインキャラ】

アルカナ…ヒロイン。下級貴族ハイネント家の次女。お相手いわく「単純で馬鹿」らしいが、本人は自身が頭の回る女だと思っている。刺繡と家事全般が得意。

ピアキイ…世界王の甥。絶世の美青年だが、お相手いわく「手癖も性格もついでに女の趣味も悪い最低野郎」。魔術のスペシャリスト。

【ハイネット家】

トロット…アルカナの父。お人よしで口が悪い。

ハノン…アルカナの姉。噂好きで上品、かつミーハー。政略結婚させられた夫が気に食わない。

トリノ…ハイネット家の使用人。アルカナに対しては遠慮がないが、ものすごくドジ。それが起因してアルカナに弱味を握られている。

【エファイン家】

シェーロラスティ…通称シェロ。現世界王。食えない男だが悪い奴ではない。

ケルト…ピアキイの父。ピアキイをアンノに預け、国を捨てる決心をする。

レイン…ピアキイの母。対外的には病氣で死亡したことになつている。

【シェルテミナ家】

リズセム…シェイルディアの王殿下。愛妻家。シェロとは旧知の仲。ナシャ…リズセムの妻。銀髪に瑠璃の瞳の美少女。

【アナティライスト神殿】

アンノ… フアナティライスト高等祭司のひとり。ピアキイの後見人。
気さくな親馬鹿。

ファレイア… アンノの娘。田下ピアキイに片思い中。わがまま。

リリマ… フアナティライスト宮殿の女官。

ミコウ… フアナティライスト宮殿の女官。いわゆるツンデレ風味。

act・1 次女の嫁入り

人生最大の幸運だと思つていた。今じゃ、かつての自分の類をこれでもかつてほど引つぱたきたいくらいに。
それでもやつぱり、私はあのひとが好きだといつのだから、全くもつて不毛この上ない。

”その話”が我がハイネント家に飛び込んだとき、家の者はまさに寝耳に水、上を下への大騒ぎだつた。じい、神都ファナティライストの貴族街、その端も端、平民街との境目くらいにからうじて建つてゐる館は普段、家そのものが肩身の狭い思いでもしてゐるかのようにこそこそしているくせに、今日ばかりはそれも例外だつた。

ああ、議席の末席しか与えられなくとも、当主が呆れるほどのトラブルメーカーでも、長男が平民の娘と駆け落ちしても、我らが双子神はまだこの家を見捨てていなかつたのねー涙ながらに叫ぶ母に、アルカナはやや白けた視線を向けた。

そりや、父母にとつてはいい。だが、アルカナにとつては、胡散臭いことこの上ない話だつた。もともと、いくら下級貴族といえど、”貴族”と名のつく家に生まれた時点で、自分に恋愛の自由はないのだと信じていたし、せめて優しい男のもとに嫁げればそれでよかつた。それが無理なら商家に行くのもいい。我が家の当主にして、アルカナの父のことだ、あのあんまりにもお人よしの男が、嫁ぎ先の家に理不尽に利用されることのなれば、それで十分なのだ。

だから、許されるものならば、この話は断つたほうがいい。そう、許されるものなら、「王族との結婚」なんて奇妙極まりない話、関わらないほうが身のためだらう。…王家直々からのこの話を、まし

てお人よしな父が断るはずもないことは重々承知しているが。

アルカナは次女だし、本来ならば長女である姉のハノンよりも高い家柄に嫁ぐことはない。なのに、何故かこの話はアルカナに入ってきた。別に、アルカナは傾国の美女でもなく、むしろ人並みの器量でも及ばないような小娘だったので、この嫁ぎ先はまさに寝耳に水。嬉しさよりも戸惑いのほうが先に立つた。

ピアキイ・ケルト・ファナティライスト。それがアルカナの夫となる男性の名だ。引きこもりで社交界に疎いアルカナでも名前くらいは耳に入ってくる。“世界王”シェーロラスディ陛下の甥だとかで、どこの馬の骨とも知らぬ平民の女との子供らしいが、その顔といい手腕といい、貴族のお嬢さん方が一度は憧れる「いい男」。アルカナとは永久に縁のない存在だ。ついでに、噂によれば非常に女性らせな性格らしい。どんな性格かは推して量るべし。

そんな男と、結婚。そりやあアルカナだつてまだ16歳。人生のなかで一度くらいは情熱的な恋愛を体験しておきたいが、それこそ、一生に一度きりになるかもしれない恋愛体験の相手としてはハードルが高すぎた。

「あら、そう？」

そうして泣きついた先の姉は気楽なものだった。

「ウブで女心のわからない男と比べたら、多少手癖は悪くても、女性慣れしていく形の殿方のほうがよろしくなくって？私が代わつてほしいくらいだわ」

「私だって代わるものなら代わりたいわ！お義兄様のほうがよっぽど私の理想だもの」

ハノンの言つところの「ウブで女心のわからない男」というのは、平たく言えば彼女の夫・ツヴァルクのことだ。のんびりとした柔軟な男性で、アルカナは、この何かにつけて甘い義兄が大好きだった。ハノンは上品に首を傾げた。

「まさか、あのピアキイ殿下…ああ、今は閣下かしら？彼からの求婚をここまで嫌がる女性がいるとは思わなかつたわね」

「”彼から”じゃないわ。”彼の後ろ盾から”よ”アルカナは修正した。

「そんなに邪険にするものではないわ」

ハノンは渋い顔だ。

「いくらピアキイ様が王族の位を返上されて、貴族階級に降格したからといって、彼が世界王の血筋であることに変わりないのだから」「でも、それだけ人気のあるひとなら、なにも私みたいな小娘を相手にする必要はないんじゃない？」

「ピアキイ閣下たつての願いらしいわよ。出来る限り政治から外れた家がいいのですって」

我が家は政治的価値も薄い弱小一族とか。否定できないあたりがまた悔しい。アルカナはギリギリと歯軋りして姉にたしなめられた。

「腹をくくりなさいな、アルカナ。どうせお断りはできないのだから

「……」

アルカナは不貞腐れて慄然とした表情を繕つた。一家としてはとてもいい話なのだ。分かつてている。王族とつながりを持つことで、父の地位は格段に上がるし、神殿でいい暮らしもできる。おまけに夫は目の保養になるらしいし、恋愛関係云々を置いておけば、アルカナにとつても悪い話ではないはずだった。それでも。

「……」

納得できない。その恋愛云々が、置いておける話ではないから。双子神は私が嫌いに違いない。

アルカナ・ハイネントは、ピアキイ・ケルト・ファナティライストに、恋をしていた。

先に断つておくが、アルカナとピアキイは知り合いでない。向こうはこちらのことなど知りもしないだろうし、アルカナだつて自分が好きな人物が王族だなんて最近まで知らなかつた。アルカナは、彼への恋慕は、そのうち薄れて消えてしまふの決まつていると思つていたのだ。

初めて彼の姿を見たのは、忘れもしない一年前。太陽に透ける金髪に、細められた綺麗なみかん色の瞳、すらつとした長い脚に腕に、大きな手。少し見ただけで火傷しそうな端正な顔立ち。彼はいつも女の子を待つっていた。

ハイネント家の向かいには、非常に目立つ赤い屋根の宿があつて、その入り口は一般的な待ち合わせ場所としても利用されている。アルカナの部屋の窓からは、あの宿がよく見えるのだ。午後のお茶の時間になると、窓際のテーブルに着いて、二階から人通りに高みの見物を決め込むのが、アルカナの日課だつた。

最初は、随分な美形もいたものね、そのくらいの感想だつた。数日置いてやつてくる青年のお相手が毎回違うものだから、ふと好奇心から、「今日の女性は栗毛の可愛らしいお嬢様」だとか「あれはもしかして平民の娘かしら」などと書き留めることもあつた。

決まつてお相手は、アルカナでは足元にも及ばない美しい女性ばかりで、そしてこと貴族の女性は、社交界では高飛車で、同性からの評判がすごぶる悪い者ばかりが揃つていた。あの絶世の美男子も、女の趣味は悪いらしい。

当初はそんな姉譲りのミーハーな根性がきっかけで、彼のことも、それこそ、目の保養くらいにしか考えちゃいなかつた。しかし、彼があの宿に通うようになつて半年ほどが経つたとき、唐突に転機はやってきた。

あの時、彼は珍しく、随分長い間待ちぼうけを食らっていた。外はひどい雨が降っていて、青年は傘も差さずにひとり立ち尽くしていた。時々宿の者が出でて中へ入るよう勧めていたようだが、彼はずっとそこにいた。ひどい天氣だから、きっと相手は家を出ることも叶わなかつたのだろう。あの日はアルカナも外出禁止令を出されていた。

あたたかい紅茶を飲みながらじつと彼の様子を観察していると、不意に彼が顔を上げた。太い雨が幾筋も落ちているものだから、彼の姿なんて、道を挟んだ屋敷の一階からはっきりと見えるはずもないのに、彼の無感情なみかん色の瞳にびりりとした。

確かに、目が合つたと思つた。

それなのに彼はすぐに顔を背け、女性を待つのをあきらめたのか、雨の中をふらりと去つていった。

あれからだ。あれから、アルカナはまともに青年の姿を見ることができなくなつた。相変わらず彼の隣には、アルカナでは到底太刀打ちできないような美しい女性が待つていたし、それ以前に、こうしてこそそと彼を盗み見ることも恥ずかしくて、立ち去る彼の金髪、後姿を眺めるくらいが精々だつた。もう一度、あのうつくしいみかん色の瞳をこちらに向けてはくれないかと密かに思つ。けれど、そんなものは叶わない恋だとあきらめていた。

なのに、あの青年と自分が、結婚。

信じがたい話だつた。できすぎている。胸の奥の奥に秘めて、誰にも打ち明けたことのなかつた恋心を、だれかに暴かれた気分だつた。アルカナがもう少し夢見がちな少女であれば、とんだ幸運だとか、もしやあの一瞬の視線の交わりで自分が見初められたのかとか、思うところは多くあつたのかもしれないが、アルカナはことにつけ

て懐疑的な性格だったので、そう上手くはいかないのだと構えていた。期待するだけ損だ。この人生16年間、アルカナの期待どおりに事が運んだことなど少数だった。

それでも多少、本当に多少だけれど…嬉しいと思ってしまう自分がいることに、アルカナは自らを嘆いた。

act・2 不本意な邂逅

アルカナとピアキイの顔合わせは午後に控えている。アルカナは気が重かつた。父に連れられて、わが国の王城・ファナティライスト神殿にやつてきたアルカナは、胃の痛みと格闘しながら、真白い建物を見上げた。

この建物は、世界創設以来、建設されてからもう何百年も経つているのに、床も壁も柱も天井も、まるで当時から時間を止めたかのように綻びひとつ見当たらない。建物を保護する呪文がかけられているのだと聞いたことがある。魔術は苦手なのでよくわからない。アルカナは、傷ひとつない白い柱がまぶしくて目を細めた。嫁入り後はこんなきらびやかな場所で生活するのかと思つて、気が遠くなるような心持ちだった。

娘の心境を知つてか知らずか、父は「満悦だつた。
「まさか、アルカナが王家に嫁入りとはなあ。結婚しちゃつたら、もつ僕ともまともに会えなくなるんだろうな」

「別に王様との結婚つてわけじゃないんだから、そんなに厳しくもないでしょよ。まして閣下は王族の位を返上してゐるんだから」「いやいや、きっとアルカナはすぐに僕のことなんて忘れて、神殿で楽しく暮らしてしまうのだと思うと……」

「お父様は私をなんだと思つてゐるよー私、そんなに薄情者じゃないわ！」

思わずいきり立つと、父はにんまりした。娘から期待通りの答えを引き出せて満足したらしい。うんうん頷きながら、「そうだよな、アルカナは優しい子だもんなあ」と一人ごちていふ。アルカナは嘆息した。

「ねえ、ピアキイ閣下つてこうのはどういう方なの？」

「いい人だよ」

父にかかれば、いかな人物でも「いい人」だろう、内心で突っ込みつつアルカナは次の言葉を待った。彼はお茶目にひとつウインクする。もう若くないのだから、そういう行動は慎んでほしいものだ。「社交界では色々言われるみたいだけね。少なくとも仕事では…ショーロースティ世界王陛下に、一番信頼されてるのは彼じゃないかな。まだ二十歳がそこらだけ、もう世界王の懐刀として名を馳せてるんだから凄いものだよ、まったく」

いい夫を持ったね、と言つてくる父になると返してやろうかと思案したところで、アルカナは首をひねった。

「…二十歳？」

「確かにそのくらいだったと思つよ。ん? 二十一だったかな?」

驚いた。そんなに年上だとは思つていなかつた。屋敷から見える彼の立ち姿は…そりゃあ、彼は背も高くて大人びていたけれど…自分とさせて変わらない年齢だと思つていたから。

きつと童顔なんだわ。アルカナはドキリとした自分の胸を押された。あの顔で、二十歳で、しかも世界王陛下の懐刀。ますます彼の相手として自分が選ばれたことが解せなかつた。しかし、父にその理由を聞くことは憚られる。父のことだから悪いことは言わないだろうが、悲しい現実までまざまざと見せ付けられたらと思うと口を開かない。

真つ白な廊下を黙して歩いていると、ふと父が足を止めた。彼は右手に広がる庭園を指して、アルカナを見下ろした。

「ほり、あそこにいらっしゃるのが閣下だよ。顔は、肖像画を見せたから知つてゐるだろ? うー..」

陽の光がやさしく降り注ぐ緑豊かな庭園に、彼はいた。白い噴水の枠に腰掛けて、細くて長い脚を組んで、水を魔術で弄びながら物

思いにふけっていた。噴水から糸を引くように伸びた水は、彼の指先まで続いていて、時折彼の緩慢な指の動きにあわせてひらりと舞う。ひらり、ひらり。なんと麗しい光景かと、アルカナは息をも止めて彼と水の動きに見入った。

ピアキイがくるくると、水の糸を指に巻きつけたところで、彼は不意に顔を上げてこちらを見た。アルカナは、焦がれていたみかん色の瞳にギクリとして、頭を下げる父にならつて、ごまかすように腰を低くした。

しばらく待つと、アルカナの頭上に影が落ちた。父が陽気に声をかけた。

「本日はお日柄もよろしく、閣下」

「ご足労いただきありがとうございます、ハイネント卿」

思つたよりも低い声だ、アルカナは意識の片隅でそんなことを思った。父はよくもまあ、こんなにキラキラと輝く男の前で口が回るものだ。つらつらと挨拶の口上を述べる父は上機嫌だった。

「それで」ピアキイは淡々と問うてきた。「こちらが？」

「はい、娘のアルカナと申します、アルカナ」「は、はい！」

声が上ずっているのを感じながら、アルカナは更に深々と礼をした。「お初にお目にかかります、閣下。アルカナ・ハイネントと申します」

「……顔を上げてくれるかな、アルカナ嬢」

こんな情けない面構え、見せられたものではないと思いつつ、アルカナは頭を上げた。彼のみかん色の瞳とかち合う。アルカナは瞬きをした。早くなにか言つてくれ！しばらく黙りこくる青年に、アルカナは何度もそう念じた。願いが届いたのか、ピアキイはやや首を傾げて、ニヒルな笑みを浮かべた口を開いた。

「……はじめてまして、だつたかな？ピアキイです。どうぞ、これか

らよろしく

意味深な言い方だ。アルカナはわずかに眉をひそめた。すると、彼は冷笑を保つたまま、クツと喉を鳴らした。

「確かに、俺の記憶が正しければ、結構顔をあわせていたような気がするけど」

アルカナは仰天して、それから、かあと赤面した。：気づかれていただのだ！あんまりな展開に、アルカナは物も言えずに口を開け閉めした。まるで魚だ。

「おや、そうでしたか！」

何も知らない父はますますニコニコ顔だ。

「アルカナ、なんで教えてくれなかつたんだい？」

言えるはずもない。一国の王族の恋愛遍歴を、屋敷の窓から出歯龜していたなんて、誰が言えるものか。アルカナは思わず目を泳がせた。ピアキイの冷たい笑みが殊更深くなる。軽蔑されているのは火を見るより明らかだつた。が、ピアキイもそこまで暴露する気はないらしく、父の言には誰も返さなかつた。

「応接間に、案内しましょう」「

ピアキイは話を逸らした。

「お手をどうぞ、アルカナ嬢」

差し出された腕にアルカナは戸惑つた。未だかつて、父と兄を除く男性にエスコートなどされた経験など皆無である。アルカナはしぶしぶ、ピアキイの細い腕に、なるだけ優雅に見えるように、しかし

その実きくしゃくとした動きで、自らの手を添えた。

微妙に空いた距離を保つたまま、応接間へと向かう道すがら、アルカナはガチガチに緊張していた。いつピアキイが、アルカナの秘密を口に出すかを考えただけで、気が気ではなかつた。頭上で、ピアキイと父は和やかに会話しているといふのに。

ピアキイに「のこと」を知られているといふことは、アルカナの望む平穏な結婚生活は露と消えたのだと理解した。アルカナは沈

んだ。どうせ自分がこんな雲の上の存在に好かれるはずもないとは思つていたけれど、それにしたつて、二人の関係がこんなに悪いところからスタートするなんて、さすがに予想していなかつた。

永遠に続くかに思われた応接間へと通じる廊下を抜けると、部屋の前に一人の男性が立つていた。黒い神官服に身を包んだ、褐色の髪の男だつた。父と同じか、それよりも少し上の年代だろう。あの衣装は、”世界王”直属の部下である、ファンティライスト高等祭司の制服だ。

男は茶色い目をこちらに向けて満面の笑みを浮かべた。どうやら自分たちを待つていたらしい。

「オオオ、来た来た！待つてましたよ閣下！」

ピアキイをちらと見上げると、彼は顔をわずかにしかめていた。こんな顔もするのね、アルカナはこちらの視線に彼が気づかないうちに目を逸らした。男はズカズカとこちらへやってくると、太陽のように二カリと笑つた。

「何の用だよ、アンノ」ピアキイの声は不機嫌だつた。

「嫌だなア閣下。閣下の父親代わりを務めていた者として、息子の婚約者の顔を拝むくらい許されたつていいでシヨ？これはまた可憐なお嬢さんでいらっしゃる！」

未だかつて一度もされたことのない贅辞に、アルカナは頬が熱くなつた。アルカナと父が挨拶を述べる間も許さず、ピアキイが低い声で言った。

「誰が息子だ」

「息子でしょう？俺は閣下の後見人なんだから。あなたの最低最悪な父親母親と比べれば、俺、随分父親らしいことをしたと思うんだけどなア」

最低最悪つてどういうことかしら。アルカナは疑問に思つたが、尋ねるのは憚られた。アンノと呼ばれた男は、アルカナと目線を合わせた。

「というわけでハイネント卿、それからお嬢さん。ワタクシ、ピアキイの後見を務めております、アンノ・アズラーノと申します。ロイツは女心もわきましてない最低男ではあります、根は悪い奴じやありませんので、どうぞ末永くお付き合いしてやってください」

「……」

よく存じております、と嫌味を言つ勇気はアルカナではなく、あいまいに愛想笑いを浮かべるに留めておいたが、父はアンノの刺激的な紹介にも動じることなくにこやかに返答した。こういうとき、父は大物だと思う。

「いえいえ、アズラーノ卿も、ピアキイ閣下も、私どもなどをお掛け下さり大変光榮至極に存じます、ええ。うちの娘はなんの取り得もない、精々繕いものや下働きの真似事をするくらいしか……」

「お父様！ お願いですから、その軽い口を閉じていただけないから……」

アルカナは慌てて口を挟んだが、すでに時は遅く、アンノは笑いをかみ殺すので精一杯のようだった。いくら下級とはいえ、貴族の端くれが召使と一緒に掃除洗濯や、厨房で料理を学んだり、庭師にくつづいて庭園を駆け回つて泥だらけになるなど、アルカナを置いて他にいないだろう。穴があつたら入りたいといつのは、こういう気分を言うのだろうか。

ふと頭上で噴出す声が聞こえて視線を上げると、まさか、今の今まで不機嫌の極みだつたピアキイが、くすくすと、笑つている……ではないか。アルカナは啞然とした。

ピアキイが、笑つている。

「お嬢さんは家庭的でいらっしゃるよつだ

アンノはどうにか笑いを押し込めたようだった。アルカナははつとして目を伏せた。

「い、いえ、そんな……子供の頃の話ですわ」

嘘だつた。嘆く母に、「淑女たるもの使用者の仕事を学ぶのも大事

でしょう」となだめすかし、厨房に入り浸つてシェフ秘伝のミートローフのレシピを習つたことは記憶に新しい。アルカナ自身、お作法も文楽も勉学も嫌いではなかつたけれど、家庭の仕事を淡々となすほうが性に合つていた。きっと生まれてくる身分を間違えたのね、とは、淑女の鑑のような姉の言い分である。

アンノは分かつてゐるのかいないのか、おおらかに笑いながらピアキイに語りかけた。

「ウン、ウン。いいお嫁さんが見つかってよかつたですねエ、閣下。正直、俺の娘はどうかナ一つて思つてたんですねが」

「俺は三歳児の夫になる気はない」

さらりとピアキイが返した。するとアンノは口を尖らせた。

「閣下なら十年や二十年待つことくらいどうつてことないでシヨ」どういう意味だろう。アルカナが伺うようにアンノを見ていると、アンノの背中越し、廊下の向こうから声がかかつた。

「おや、皆さんおそろいで。なんだい、応接間にも入らずに立ち話?」

その声を聞くなり、アンノも、ピアキイも、そして父も、突然電流が走つたかのように一斉に礼をした。アルカナも合わせて頭を下げるが、アンノが穏やかに言つた。

「これは、世界王陛下」

ドキリとした。世界王?そんな、一国の主と会うだなんて聞いていなかつた。ピアキイと会つて、少し話して、それで帰るだけの用事ではなかつたのか。

「顔を上げてくれ」

柔らかな声。隣のピアキイがすっかり頭を上げる気配がしてから、アルカナも体を起こすと、目の前に略式の司祭服に身を包んだ男性が微笑んでいた。ピアキイとは全く似ていない。奇異なモスグリー

ンの髪に瞳の、柔軟な顔をした若い男。アルカナは、にわかには彼がかの世界王陛下だとは信じられなかつた。若すぎる。二十代半ばくらいにしか見えない男は、ピアキイと並んでも、精々兄弟かと思う程度の年齢差にしか見えない。記憶をたどるに、昨年だつたか、世界王陛下の生誕五十年のパーティが開かれた気がするのだが。

驚くアルカナに、シェーロラスティ陛下はいたずらつ子のような顔をして、応接間の扉を指した。
「立ち話もなんだし、応接間へ入ろう。お嬢さんも落ち着けないようだ」

act・2 不本意な邂逅（後書き）

ちなみにこの話は現時点では、アテナーより数十年時代を遡つてあります。

act・3 サテイストな彼の遊戯（前書き）

一部侮蔑的な表現を含みます。苦手な方は「」注意ください。

act・3 サテイストな彼の遊戯

「アンノ、お前は仕事があるだろ？」「

当たり前のように入ってきたアンノをショーロラスディがたしなめた。その間にもピアキイは、ふかふかのソファにアルカナを座らせると、その隣にアルカナの父を促し、自分はアルカナの向かいに腰掛けた。陛下を差し置いて最初に席に着くなんて、アルカナは慌てて立ち上がるうとするが、ピアキイに視線で制される。アンノは陛下の言葉にもひとつ肩をすくめて、ひょうきんに笑つて見せた。

「ええ、イヤだなア ショロ様。俺がどれだけこの日を待ち望んでたか知ってるでショ？ 仕事なんて残業すればいいんですよ」世界王陛下をあらうことか渾名呼びなど！ アルカナは呆然とした。しかもショーロラスディは全く気にも留めていないらしい。入り口脇の小机に置かれた女官の呼び鈴をチリンとひとつ鳴らすと、「しようがないな」と一言添えてピアキイの隣に掛けた。アンノはそのまま脇に立つて控える。

ショーロラスディはのんびりと口火を切つた。

「まあ、そこのアンノが図らずも言つてくれたけれど、ショーロラスディ・T・ファナティライスト…今日は甥の血縁として来ているので、ショーロラスディ・エファンと名乗らせていただこうか」「いや、これは…トロット・ハイネットと申します。こちらは娘のアルカナでござります。このたびは世界王陛下をご拝顔でき…」「いや、その口上はいらぬ」

ショーロラスディは片手を挙げて父の口上をさえぎつた。父はピタリと口を閉じた。陛下は次に縮こまるアルカナに微笑んだ。「今日は若い二人が主役だしね。で、お二人は紹介は済んでいるのかな？」

アルカナは深々と礼をした。ピアキイは、ちょうど部屋に入ってきた、茶を持った女官をチラリと見てから言つた。

「もう済ませました」

「そうか。まあ、アルカナ。彼は女癖の悪い最低男だが根は…」

「それは俺が言った」

アンノが言ったところで、赤銅色のショートヘアが可愛らしい女官が、緊張のあまり食器を少し鳴らした。いくら女官といえども、世界王の前では緊張のひとつもするものよね、アルカナは心底彼女に同情した。

ピアキイは顔をしかめた。

「アンノも伯父上も、その紹介はなんとかならないのか

「事実だろう？」

「事実ですしねエ」

いくら事実だとしても、もしアルカナがピアキイの宿通いを知らなかつたら心底ショックだったろう。アルカナは口元を引きつらせた。隣の父は何を考えているのか、ひたすらニコニコしている。冗談か何かだと思っているに違いない…だとしたら勘違いもいいところだ。「とにかくも我が家の馬鹿息子に優しそうなお嬢さんが来てくださいって嬉しい限りだ」

しみじみとシェーロラスティイが言つた。アルカナはすっかり恐縮して情けない表情だった。ヒ、ピアキイがわずかばかり嘲笑して横槍を入れる。

「得意技は家事仕事だそうだ」

「あ、そ、それは…！」

思わず声を上げたが言葉にならず、アルカナは困り果てた。貴族の娘が家事に精を出すなんてはしたないことだと、世界王陛下は呆れただことだらう。ピアキイは相当アルカナが嫌いなようだ…涙をこらえてぶるぶる震えていると、シェーロラスティイは以外にも非難の色も見せることなく「へえ」と声を上げた。

「まるでフルマークの若い頃みたいだな」

「……え、え？」

「知ってるかな、ラトメの”神の子”。あいつは自分で部屋を片付けたり、勝手に料理するものだから、ファンティライストに来るたびに女官が困っていたよ。そうかあ、じゃあフェル付きの女官をアルカナに回そうかな」

「そ、そんな！ 女官なんて、恐れ多いです！」

身の回りのことはすべて自分でやつてきたアルカナにとって、何もかも世話をされることは慣れない。アルカナのような低い身分の人員を割くだなんて申し訳なかつたし、きっと迷惑をかける。なんと懐の大きな人なんだろう、世界王に心から感服するとともに困惑するアルカナに、アンノが助け舟を出した。

「神殿は暇ですからねエ。そんなに気を張らずとも、退屈しのぎの話し相手くらいに思つていればいいんですよ」

「でも、でも」

「アルカナ。いくら官籍に下つたとはい、ピアキイが王族の一員であることには変わりない。その花嫁に女官のひとりもつけないといふのは外面向にもあまりよろしくないんだ。まあ、未来の夫の面子を保つという意味で、ひとつ受け入れてくれないかな」

ショーロラスティはあくまで優しい口調で言った。世界王陛下を困らせてしまったのかと、アルカナは途端に真っ青になつた。チラリと見たピアキイは、そ知らぬ顔で茶を飲んでいる。別にアルカナごときの女に、女官などつけるまでもないと思われているのだろうか。アルカナはうつむいた。

「……わかりました」

「うん、ありがとう。では、私は執務に戻らうか」

ショーロラスティは腰を上げた。

「大人は退散して、あとは若い者たちに任せることにしよう。アンノ、行くぞ」

「ま、名残惜しいですが、お嬢さんとお話する機会は今後いくらでもありますからねエ。では、ご両人、アルカナ嬢と次に会うのは式典かな？また」

「なにか困ったことがあればいつでも時間を取らう、アルカナ嬢。双子神の加護があらんことを」

席を立とうとしたハイネント親子を制して、シェーロラスティとアンノは颯爽と立ち去つていった。まるで疾風のような人びとである。扉が閉まるなり、父も立ち上がってアルカナとピアキイに微笑みかけた。

「では、私も失礼します。閣下、どうぞうちの娘をお願いいたします」

「え、…お、お父様、帰るの？」

「何を不安がつているんだい？僕は神殿の入り口で待つているよ。アルカナ、ピアキイ閣下に失礼のないようにするんだよ」

そうして父も扉のむこうに消えてしまい、あつという間にアルカナとピアキイは一人きりだ。アルカナは父の出て行った扉から目を離せない。ピアキイがどんな顔をしてこちらを見ているのか、知るのが怖かった。

かちやり。ピアキイがカップを置くかすかな音が響く。アルカナは慎重に、ピアキイの顔を視界に入れないようにしながら、自分の膝まで視線を動かした。テーブルで、一口もつけていないカップが、アルカナの途方に暮れた表情を映している。

しばらくお互ひ黙り込んでいると、不意にピアキイがくすりと笑う声がした。

「どんな女が来るのかと思えば…まさか、いつも窓から俺のことを見てた奴だとは思わなかつた」

「そ、そんな、いつもつてわけじゃ」

「実際会つてみると、想像以上の根暗女だな」

冷たい言葉を甘つたるい声で投げつけられて、アルカナは真っ赤に

なつた。悲しくて怖くて悔しくて、言い返すこともできない。**ぎゅ**
つとスカートを握つて耐えるくらいしか。相手に妙なことを言つて、
自分の、引いては父の株を下げてはならない。きっと、アルカナが
何を言つたつて、ピアキイの不興を買つてしまつから。

ピアキイはフンと鼻を鳴らした。

「言い返してもこないのか。つまらないな」

「……」

「……あーあ。政治からでできるだけ離れてて、かつ婿にならなくて済
むような家の娘つてことで適当に選んだのがまずかったのかなア…
これなら、祭司たちの高飛車な女のほうがまだマシだつたかも」

「……」

じゃあ他の女性をお嫁に貰つてください。そつ言おうと思つた。
けれど、脳裏にいくつかの光景が浮かぶ。始終二口二口していた父、
大喜びした母、涙ながらに祝福してくれた使用人たち。彼らが失望
したような目で自分を見るのかと思うと何も言葉が出てこなかつた。
涙がもう目尻にたまつて、嗚咽をこらえるので、アルカナはうんと
もすんとも言えなかつたのだ。

ぱたり、溢れた涙が一滴こぼれて、アルカナのスカートに染みを
作った。それを皮切りに、幾多も、幾多も、ぽろぽろと、浮き足立
つた使用者と一緒に選んだ真新しい桃色のワンピースを濡らしてい
く。肩が震えた。

ピアキイが席を立て、アルカナのすぐ横に座る気配がした。手
の込んだ編み込みが入つた髪を、彼の長い指が弄る。ピアキイはく
すぐすと楽しげに笑つた。

「泣いちゃつた？」

何が楽しいのだろう。こんな男の何が良かつたのだろう。アルカナ
は唇を噛んだ。最低最悪だ。「彼が好きだからなんでも許せる」だ
なんて殊勝なことは言えやしない。こんな嫌な男、見たこともない。
きっとこの男は人の皮を被つた悪魔に違ひない。彼に恋なんてした

自分の浅はかさを恨んだ。

ピアキイはしばらくアルカナの髪を弄んでいたが、やがてそれも飽きたのか、ぱっと手を離して、興が削がれたとばかりにソファの背もたれに体重をかけた。

「ねえ、アルカナ。お前に覚悟はあるのか?」深みのある聲音だった。

「…なんの、覚悟、ですか?」

「我がエフAIN家の、同族になる覚悟だよ」

アルカナは目線だけピアキイに向けた。彼はこちらを見ていかつた。なにもない虚空をぼんやりと見上げて、すらとした頬には何の表情も浮かべていない。人形のような硬質さに、アルカナはぎくりとした。まったくわけがわからなかつた。エフAIN家とは、世界王の家系がもともと使っていた家名だったと思つ。

「王族の嫁になる覚悟、つてこと、ですか?」

「ま、知らされちゃいないだろうけどね。…俺たちは”ヒトならざるもの”なんだ」

アルカナは目を瞬いた。涙も引つ込んだ。一体全体、この男は何を言いたいのだろう。王は人間とは別の存在とでも説くつもりか。そんなもの、ファンティライストの教典にいくらでも載つているだろうに。

ピアキイは歌うように言つた。

「ねえ?泣き虫なアルカナ。そんな調子で、俺と一緒に永遠を生きる覚悟は、できるの?」

「永遠、つて?」

「でも、君に拒否権はない」

ピアキイにはアルカナの反応などどうでもいいようだつた。薄ら笑いを浮かべて豪奢なシャンデリアを眺めている。いや、今の彼に、この世界に存在するなにもかもが見えているのだろうか?彼の思考は、アルカナには考えも及ばない遠いどこかへ飛んでいるようだつ

た。

「お前も、いずれ狂ってしまうよ。だから今のうちに、泣けるだけ泣いておけばいい。傷つくだけ傷ついて…もう、何も感じられなくなる前に」

アルカナには、ピアキイの言いたいことのかけらもわからなかつたが、それでも、何を返すこともできなかつた。彼のほの暗い鈍い光が、すべてを反射して拒絕しているようだつた。

act・4 間合いの攻防

結婚が決まつても、ピアキイに、彼の習慣を変える気は毛頭ないようだつた。いつもどおり、あの宿でブロンドの女性と待ち合わせるかの閣下を、これまたいつもどおり窓から眺めてアルカナは嘆息した。なんと凶太い神経をお持ちのものだ。悲しみを通り越して、アルカナは心底呆れ返つた。きっとピアキイにとって、アルカナの存在など毛ほどの価値もないのだろう。今だつて、チラリと視線を上げて、アルカナが様子を伺つているのに気づくなり、見るも麗しき不敵な笑みを浮かべて去つていく。隣に、アルカナの知らない美女を伴つて。

あの後…顔合わせで閣下に泣かされた後だ…ピアキイは、不可解な言動などまるでなかつたように、ぶっきらぼうに「行くぞ」と言うが早いか、アルカナの手首を引っ張つて神殿の入り口まで送り届けた。父の前では、完璧な王子様の皮を被つて。

とんだ二重人格である。いや、アルカナが知らないだけで、ピアキイにはもつとたくさんの面が潜んでいるのだろう。複雑な生まれの方だから、一筋縄でいくようでは、何かと不都合が多いのかもしれない。好意的に捉えてはみるもの、それにしたつて、彼は人を傷つけるのが好きだ…特に、アルカナを。部屋に閉じ込められる婚約者を放つて他の女性と遊びまわるなんて、これは立派な浮氣ではなかろうか。

アナティライストの貴族社会では、婚約した女性は結婚までの三ヶ月ほどの期間、外に出ることを禁じられる。特に男性との面会などもつてのほかで、その間は婚約者とも会つてはならないのが決まりだ。

そういう意味では、私、毎日のように閣下と「お会い」しているわ

ね…浮氣現場を眺めながらアルカナは眉をひそめた。責められるいわれはないだろう。アルカナだつて好きで見ているわけじゃない。けれど、彼から目をそむけて見ないふりをするのは、ピアキイに敗北する気がしてアルカナには不服だった。あの美しい青年にできることなんて、せいぜいしてやつたりな笑みを浮かべる彼をにらみつけることくらいだから。

普通ならば、婚約者と会えないかわりに、互いに手紙を送りあうのがセオリーだが、その面でもピアキイは一般的でなかつた。本来美辞麗句を凝らした文章が綴られているはずの封筒の中身は、何故か半紙にぐるまれた小さな押し花が入つていた。

いつも、その辺の道端に咲いている野花だつた。淡い桃色の花もあれば、濃い青も、時には花弁のない薬草もあつた。

アルカナはこの贈り物に閉口した。よかれと思つての押し花なんか、何か裏があるのか…いいや、あのピアキイ閣下のことだから何があるには違ひないだろうが、いかんせんこういう花は嫌いではない。派手で鮮やかな花ももちろん好きだけれど。

まさかあの閣下が自分で押し花を作ることなど想像もできないが、無碍にするものでもない。毎日欠かさずに入れてくる花たちを、アルカナは栄にしたり、ポプリにしたりとするものの、ピアキイの意図はまるで読めなかつた。今朝送られてきたのは鮮やかな金色の花。香りが強いから、におい袋にでも入れようかしら。アルカナは冷めた茶を口にしたところで、はたと考え付いた。

：今日のお相手は、ブロンドの綺麗な女性だつたわね。
アルカナは自分の打ちたてた予想がきつと間違つていないと想い、
気が滅入つた。

アルカナは不機嫌だつた。婚礼の儀が近づくにつれて次第に苛々

していくアルカナに、使用人たちはどうしたものかと首をひねっていた。可愛らしい野花を送つてくる洒落た婚約者の何が気に入らないのかと訝る者さえ。洒落た？アルカナは憤った。むしろなんと悪趣味な男だろう。いわば、これは浮氣予告のようなものだ。手にした萌黄色の花を握りつぶしたい衝動に駆られながらアルカナは怒った。窓のむこうでは、花と同じ色のワンピースを身につけた少女が大変楽しそうにピアキイに腕を絡ませている。アルカナの目から見てもうつとりするほど可愛い娘だった。こんな状況でなければ、アルカナはすぐに顔を背けた。何が敗北だ、何が花だ。とにかくピアキイにとつて自分は邪魔者らしい。自分からも何かピアキイにしてやらねばと思い、自分で読んでも反吐が出そうなほど甘い文句を連ねたラブレターを送りつけてやつたところ、次の日彼が送ってきたのは大輪の真っ赤なエソルで、浮氣相手は花に違わず華やかな絶世の美女だった。

「うなつたらもう彼をまともに見るのも嫌だつた。アルカナは午後のお茶の時間を返上して、窓から背を向けて刺繡を始めた。この背中を見て、ピアキイも精々あざ笑つていればいいのだ。アルカナばかりが不快な思いをするなんて理不尽だ。

幸い、アルカナは刺繡が得意だつた。小さなものなら一刻と経たずに仕上げてしまう。そそくさとアルカナは萌黄色の花を縫い取つた。

アルカナは刺繡の入つた小さな巾着に今朝もらつた花を突つ込むと、入り口近くの陶器でできた椀を持ち、それに向けて声をかけた。

「トリノ、ちょっと来て頂戴」

トリノはすぐにやつてきた。十四歳の使用人の少年は、心底嫌そくな顔でアルカナを見上げる。小柄な彼は、まだアルカナより頭ひとつ分も背が低い。栗毛の少年は声変わり中の少ししゃがれた声でアルカナに抗議した。

「なんですか、お嬢様。というか僕を呼びつけないでください。嫁入り前なんだから」

「ピアキイ閣下のために私が尽力するのが馬鹿らしくなったのよ」
アルカナは憤然と鼻を鳴らし、におい袋をトリノに突き出した。彼は怪訝な顔でそれを受け取つた。

「それを閣下に届けてちょうだい」

「何で僕が。配達人がいるでしょ」

「その配達人つて女の子でしょ。私と同年代の男の子が運んでくれることに意義があるのよ」

「ハハーン…ヤキモチやいてほしいんだ」

アルカナは頭を抱えた。ヤキモチ？あのピアキイがそんな思いを抱くわけがない。これは戦いなのだ。あのピアキイに、自分は彼に振り回されてばかりではないのだと一泡噴かせてやるために。しかし、ここでトリノの機嫌を損ねたら意味がない。アルカナは「どう取つてもらつても構わないわ」と返した。

「ただ、絶対に送り届けてね。あなたつておっちょこちょいなんだから」

「そ、そこまでじゃありません」

「この間お母様のお気に入りの花瓶を割つたのがあなただつてこと、私が知つてゐるの、お忘れかしら」

トリノは閉口した。こう言えば彼はアルカナに従わざるを得ないと知つていた。アルカナはっこり笑つた。

「お願ひね、トリノ。あなただけが頼りなの」

「…奥様にばれたら殺される…」

トリノはうなだれて、「ワガママお嬢様め」と毒づくと、アルカナの部屋を後にした。

ピアキイは、突然の事情で代わったという婚約者の使者をまじまじと見た。アルカナよりも幾分年下だろうか。随分と小柄で、長身のピアキイは彼を見下ろす形になつた。顔の造形は可もなく不可もなく、といったところか。愛嬌のある顔は、ぽかんと間抜け面をさらしてピアキイを見上げている…ピアキイはさわやかに微笑んでやつた。

「いつもの子は来ないんだな。君は彼女の代理？」
「えつ、あ、ハ、ハイ！お、おお、お嬢様に無理を押し付けられまして…」

正直な男だ。ピアキイはわずか眉をひそめた。昨日自分に背を向けて一体なにをやっているのかと思えば、彼と直接面会したということか。まつたくもつて単純な女である。

先日この神殿へやつてきた彼女を思い出す。懸命に涙をこらえて、スカートを握り締める姿だ。何の力もないか弱い女かと思っていたが、ピアキイの想像よりも、なかなかどうして骨があるではないか。見事な刺繡に、ピアキイは思案した。彼女の考えを量りかねたこともまた面白い。そして、縮こまつてブルブル震える情けない使用人に顔を向けた。

「アルカナは、」

ちょっと口を開ざした。

「…アルカナ嬢は、どんな子だと思う？君の目から見て」「えつ！？え、えーと…？」

「俺はまだ、彼女のことをよく知らなくてね。花など贈つてはみたものの、彼女の好みも分からぬ状態だ。アルカナ嬢のことともつと知りたいと思うんだが、君、なにか教えてくれないかな」努めて婚約者を知ろうとする健気な男を演じると、案の定この使用者人はコロリと信じた。感銘を受けた様子で、顔を紅潮させて何度も頷く。

「えつと、お、お嬢様は、白が好きだつてよく言つてます、よ！」

「白?」

「はい! アヌザンの花なんかが好きだったと思います。あとレースとか、リボンとか、女の子らしい持ち物も好きだけど、自分より姉君のほうが似合うとか言って、ほとんど持つてなかつたと思います」「……白、か」

そういうえば、先日着ていた桃色のワンピースも新品同様で、どこかちぐはぐな印象を受けた。脳内で、あの少女に白くて可愛らしい衣装を宛がつてみる。

……悪くない。

ピアキイは机に用意した封筒を取り上げた。少し考えてから、窓際に置いた花瓶を見た。一輪の白いエソルが差さっている。長い指を伸ばして、花を抜き取ろうとして…少し迷つてから、花弁を一枚だけ取つて、半紙にくるんだ。

「頼んだよ」

封をして使用人に渡すと、少年はキラキラと目を輝かせて頷いた。素直な少年である。ピアキイは自分の胸のうちに冷たいものが流れるのを感じた。まったくもって、自分とは違つ少年である。その少年がペーぺーこと頭を下げて去つていいくのを見下ろして、ピアキイはにおい袋を握り締めた。くしゃり、なにか巾着の中に硬さを感じて、ピアキイは袋を開けた。花の脇に、小さなメモが折りたたまれて奥に押し込まれている。取り出すと、達筆ではないが丁寧な女の字で、大層な嫌味が書かれていた。

『Iのこおり袋を萌黄色のお嬢さんに差し上げたらいかがでしょ』

ピアキイは冷笑を浮かべた。本来彼女に渡すはずだつた封筒をゴミ箱に投げると、宙に浮いた間に封筒が燃え上がつた。一瞬小さな

爆発があつたかと思うと、ゴミ箱に入つたとき、手紙は灰になつて
いた。

act・4 間合いの攻防（後書き）

エソル・バラのこと。（rose esor）

アヌザン・ナズナのこと。（nazuna anuzan）

act・5 奥入れ（前書き）

ちょっと倫理上よりしくなぞうなブラックな表現が登場します。
苦手な方はご注意ください。

「お綺麗です、アルカナお嬢様！」

アルカナは啞然として鏡の中の自分を見つけた。映った自分の姿は間抜けな表情をさらしている。だがどうしても思つてしまつたのだ：我ながら、なかなかいける。特注のドレスに身を包み、化粧を施した自分の姿は、普段とはまるで別人のように深窓の令嬢だつた。いや、もともと引きこもりなのだからあながち間違つた表現ではないが。

結婚式は、神の御前に誓いを立てる場だから、華やかな衣装はご法度とされている。男性は黒の神官服、女性は黒を基調としたドレスが定番だ。黒などという大人びた色のまるで似合わないアルカナは、当然服に着られた恥さらしな花嫁になるだろうと気落ちしていた。

しかし、これは…アルカナは自分の衣装をとつくりと見下ろした。厚手の布で作られた黒のローブはすそが大きなレース型にくりぬかれ、白い糸で細々と花の刺繡が入っていた。その下に薄手のドレープが幾重にも重ねられたふんわりとしたスカートが広がり、腰は胸下から通る太い帯でぐつと留められ、うしろで大きなリボン型に結ばれている。頭には白いエソルの飾りがついた細いカチューシャから、透かし模様の入つたレース仕立てのヴェールが伸び、床まで垂れてい。普段ひつづめにしている髪は下ろされ、毛先を緩く巻かれて、耳のうしろに細い三つ編みを作られた。化粧もまた秀逸だ。決して華美ではなく、むしろ薄く地味なくらいだったが、桃色を基調とした淡い化粧は乙女じみて、清純な印象を与えた。キラリと光る桜色のくちびるを見て、アルカナは自分が十六歳のうら若き乙女であることをようやつと自覚した。

ハイネント家から今日のために出張してくれた使用人は涙ながらに喜んでいる。アルカナは気恥ずかしくなつてうつむいた。ファンティライスト神殿の年配の女官も、自分たちの作品を満足そうに頷いて見ている。

「あのピアキイ閣下に、こんなに可愛らしい花嫁ができるて嬉しく思いますわ」

「そのご衣装も、ピアキイ様御自らお決めになられたのですよ」

「え…閣下が、ですか？」

ぎょっとしてアルカナは女官を見た。母ほどの年齢だろうか、目尻に少ししわの寄つた、優しそうな小太りの女性は深く頷いた。この三ヶ月、ハイネント家に通つて、神殿の作法などを教えてくれたりリマという女官だ。

「仕立て屋の用意した衣装が気に入らないと仰つて…ああ、ピアキイ様に、私が言つたとは内緒にしておいて下さいませね。本当は口止めされていたのですけれど」

一体どういうつもりだろ？。ここ数週間、相変わらず花はアルカナの元へ届いていたが、いつも白い花、それも生花の花弁ばかりで、以前のような押し花は全く贈られてこなかつた。しかも、何か意味があるのかと窓に張り付いてみても、ピアキイは何故か、一向に姿を現さない。

まさかとは思うけど、ひょっとして、何かがあつて結婚に前向きになつてくれたのかしら…そんな淡い期待もしていた。それが、まさか、本当だつたとか。アルカナはここ最近めつきり幻滅していた自分の恋心が、むくむくと湧きあがつて来るのを感じた…だとすれば、自分は、こんなに幸福なことはないかもしれない。

嬉しそうににっこり笑つたアルカナに女官たちも微笑んだところで、部屋の扉が開いた。見ると姉ハノンが光沢のある黒のドレスに

身を包んで立つてゐる。豊かな茶髪を緩やかなショーンに結い上げて、すらりとした長い首から首筋までのラインをさらしてゐる。地味なドレスなのに、我が姉ながらまこと扇情的でうつとうつするほどの色氣だつた。

「お姉さま」

「まあ、アルカナ。見違えるよつね」

やんわりと微笑むハノンはゆつたりとアルカナの元へ歩み寄つた。この毒舌がなければ、彼女こそとんでもない玉の輿に乗つただろうに。アルカナは姉に魅了されつゝも思つた。

「あなたが服に着られて恥ずかしい思いをしていやしないかと思つていたけれど、可愛いわ。いい仕立てね」

「ひどいわ！そりや、私に黒は似合わないけど」

アルカナがむつとすると、ハノンはくすりと笑つたあとで、ちょっとぴり眉尻を下げる。

「あなたがお嫁にしてしまうのがこんなに早いだなんて思わなかつたわ。いつまでも、小さな私の妹だと思っていたのに」

「やだ、なに言つてるの。今生の別れでもあるまいし」

からりと笑つてみせたアルカナに、ハノンは少し首をかしげて、それからいつもどおりに優雅な微笑みを浮かべた。

「そうよね。あなたはいつまでも、私の可愛い妹よ」

貴族同士の結婚はパーティじみた華やかな席であるが、神官の長たるフアナティライスト王家の式典はもっと厳かさを求められる。

近親者や神殿の重役たちがずらりと礼を取る中で、最奥の壇上にいる世界王の下へ行き誓いを立てる。そして王の祝福を受け、式は終わる。

神殿へ続く大扉の前で、アルカナはそわそわした。心臓が飛び出

してしまった。この扉のむこうで、世界のお偉いさんが顔を揃えているのだと思うと緊張で足が震えた。まして、作法だつてリリマに口頭で説明してもらつただけだ。覚えの悪いアルカナのことだから、なにか失敗でも仕出かしそうで恐ろしい。なにせ、花婿がアルカナよりもよほど美しいのだ。こんな貴族の末席にも入るつかとう小娘、鼻で笑われてしまうのではないか。

不安で胸が押しつぶされそうになつていると、扉の両脇を固めていた甲冑に身を包む兵士一人が、扉のノブに手をかけて低い声で言った。そわそわしながら、神殿の警護役つて美声じやなきやなれないのかしら、と下らないことを思つた。

「お時間です」

アルカナは唇を引き結んだ。とにかく、腹を括れ。できることをしなければ。妻の恥は夫の恥、ピアキイの顔に泥を塗るようなことをしてみる、ハイネント家に明日はない。開き直つて、アルカナは神圣な地へと足を踏み入れた。

扉のむこうはぐだり階段になつていて、向かいにはじめとシンメトリーになるように、もうひとつ階段と扉がある。アルカナとは反対側の扉から、ピアキイが出てくる手はずになつていた。アルカナは階段を下りて、踊り場でピアキイを待たなければならない。

引きずるヴェールを踏まないようになると、細心の注意を払つて階段を下る。突き刺さる視線が恐ろしくて、観客たちのほうはちらとも見られなかつた。長い階段を下りて、アルカナはスカートをちょんとつまみ、深々と頭を垂れた。さらりと、肩をヴェールが撫で、アルカナはぞわりとした。

もし…、あんまり静かなものだから、アルカナは思わず嫌な想像をしてしまつた。もし、ピアキイ様が現れなかつたら、どうしよう。やはりアルカナなどと結婚するのは嫌だと突っぱねられて、式をボイコットされたら？あの男ならばやりかねない。アルカナは赤い絨毯を見下ろしながらじぎまきした。来なかつたら、アルカナはどう

なるのだろう。永久に開かない扉に頭を下げて、それで…

そこまで考えたところで、頭上に影が落ちた。黒い神官服のすぐが目に入る。心底ほっとした。アルカナは細心の注意を払つて頭を上げ…真正面から、今日から夫となる男の姿を見ることになり、すこぶる後悔した。

ピアキイははつと/orするほど美しかつた。横にあるステンドグラスから差し込む陽光がそうさせるのかもしない。金髪がきらきらと輝いている。式典用の祭司服につけられた、赤い宝石がきらめいている。彼の頬はうつすらと白く染まり、間違いなく、花嫁など田ではないほど、周囲の視線をかき集めていた。

啞然とするアルカナに彼はくつと笑つて、白い手袋に包まれた大きくも纖細な手でするりとアルカナのそれを手に取ると、中指の第二関節のあたりに、掠めるようなキスを送つてきた。そしてそのまま一人の肘の高さまで繋いだ手を捧げ上げ、客たちのずらりと並んだその奥、世界王のいる祭壇に向いた。アルカナもどうにかこうにかそれに倣つたが、視線がピアキイから外れない。

するとピアキイがくすりと笑つた。馬鹿にした口調で、アルカナにだけ聽こえる声音でつぶやく。

「間抜け面」

「…………！」

アルカナは途端に頭に血が上つて、無理矢理ピアキイから視線をひつぺがし前を向いた。きゅつとつかまれた手が気になつて、両側に立ち並ぶ偉い人々の顔も目に入らない。今度はあつという間に目的地にたどり着いてしまつた。

祭壇の奥で、ショーロラスディ陛下が微笑んでいる。アルカナと

ピアキイが祭壇の前に並ぶと、一拍置いて彼が朗々と語り始めた。

「我らが双子神のたましいの御許にて、今、新たなつがいが来られ

し時に感謝します。花嫁よ、誓いのことばを捧げなさい」

「我が名はピアキイ・ケルト・エファイン」

ピアキイは声も美しい。アルカナは夢見心地で思つた。触れ合ひそうな肩が扱つた。

「私は、アルカナ・ハイメントを妻とし、愛し、いつくしむことを誓います」

どきどきした。ただの口上だ。ただの口上。アルカナは気を落ち着かせた。すると、シヒーロラスティがゆるやかにこちらに視線を移した。

「花嫁よ。あなたは我らが双子神のたましいのかけらたる、エファインの者となることを誓いますか」

「誓います」

言葉尻が震えていた。けれど、この台詞を言えばアルカナの出番は終わりだ。この後は、リリマの話では、陛下に聖水を振りまかれ、誓いの受諾をもらつて退場のはず。そつ、そのはず、だつた。

だから、シヒーロラスティ陛下が祭壇に、ひとつワイングラスを置いたとき、アルカナは怪訝な表情を隠せなかつた。

赤い液体で満たされている。ワインよりも濁つた色だ。アルカナはどうしても、グラスの中に入っているのが血にしか見えなかつた。そして、どうにも胸騒ぎがする。背後のひそやかなざわめき。どう考えたつておかしい。

しかし、シヒーロラスティの声は至つて穏やかそのものだつた。「誓いをまこととするならば、花嫁。この聖なる液体を飲み干しなさい。さすれば双子神は、あなたを迎えることでしょう」

聖なる液体？これが？背後のざわめきが大きくなる。アルカナは戸惑つた。思わず隣のピアキイを見上げると、彼は笑つていた。

笑つっていたのだ。実につづくしく、精巧に作られた人形のような顔をして。その怪しさに、アルカナの背筋が粟立つた。逃げ出した

くなつた。なんだ、このつめたいいきものは。

しかしその冷ややかないきものは、アルカナを決して逃がさないとばかりに、握った手に力を込めた。薄っすらと引き上げたくちびる。彼はついと、細めたみかん色の瞳をこちらに向けて、ささやいた。麻薬みたいな甘さだ。

「飲むんだ、さあ」

ひどく優しい口調だつた。これなら、以前の顔合わせのときのように、アルカナを楽しそうに糾弾した時のほうがよほどマシだとアルカナは思った。ひそやかに、ひそやかにアルカナを絡めとるように、そう、魔術にも似ていた。これはなに？ひとりでに、空いた片手がグラスへと伸びていく。ピアキイの目がきらりと光つた。にいと口端が引きあがつた。

「そう」

掠れた声で、ピアキイはアルカナを追い立てる。アルカナの頭の芯がもやもやとふやけて、何も考えられなくなる。指先がグラスに届く。つめたい。アルカナはぼんやりと思った。グラスを持ち上げる。少しだけ重かつた。手首に力がこもつた。ふわりと、グラスから甘い香りが立ち上つた。いや、それともこの香りは、隣にいるピアキイの香水だろうか。わからない、わからない、わからない。

「そうだ、アルカナ。すべて飲み干せ。残してはいけないよ」

はい。心中でそう答えた。分かりました、すべて飲み干して残しません。ことばにするよりもはやく、アルカナは思い切り、グラスを口元に持つていき、中身をいつぺんにあおつた。

直後、アルカナの呪縛が、解けた。

「…つ！…」ほつ、か、はつ…」

中身を飲み干してから、瞬く間に、すべての感覚が戻ってきた。苦

いのか辛いのか、間違つて鉄鎧でも飲み込んでしまったのかと思う
ぴりぴりとした刺激に、ねつとりと舌から離れない感触。これは、
なんだ。血だ。アルカナは混乱した。なんの血？なぜこんなものを
飲ませたのか。飲んだのか。

背後の参列者から怒号が上がつた。聞き覚えのある声だ。アンノ
だ、アルカナはすぐにぴんときた。

「閣下！ なんてことを！」

咳き込みながら、怒りの矛先たるピアキイを見上げた。どういう状
況だろう？ 今、アルカナはなにか間違つたことをやらかしたのだろ
うか。ピアキイが何かやつたのだろうか。

当のピアキイは薄ら笑いを浮かべたまま、ゆるゆると振り返つた。
呆然とするアルカナが持つたままのグラスを取り上げて、しかしそ
ちらには見向きもせずに、グラスを祭壇に戻す。

「誓いは成つた」

静かな声だった。何を、そんなに嬉しそうなのだろう。アルカナは
思つたが、口に出す気力もなかつた。参列者を見ると、手前にいる
…おそらく、重役の中でも、上層の人々だ…彼らは何事かささやき
ながら、鬼気迫る表情だ。

「あんな小娘に…」

「ピアキイ様はなにをお考へで…」

「不老不死の…」

とにかく、アルカナが血を飲んだのは、なにやら間違いだつたらし
い。アルカナはさつと青ざめた。すると、ピアキイの長い指がアル
カナの唇を、ピンクに光る可憐な唇だ、それをついと撫ぜて、こび
りついた血液をペロリと舐めた。赤い舌だつた。アルカナは身体の
芯が冷えた。

「か、閣下、わたし、なにを…」

「これでお前も、我らがエファイン一門の一員だ」

ピアキイは実に嬉しそうにやりと笑つた。

「もう一度と逃げられないよ、俺のかわいいアルカナ。永久に、ね

式が終わり、あてがわれた部屋に通されるやいなや、アルカナはぶつ倒れた。頭がぐらぐらした。血液が沸騰しているみたいだ。めまいがした。立っていられない。アルカナは床にうつぶせになつた。ついてきていたリリマが悲鳴を上げた。

「アルカナ様！」

息が荒く、声が出なかつた。リリマと、他数名の女官に囲まれ、抱え起こされてやつと、アルカナは薄つすらを口を開いた。女官の誰かが言つた。

「ひどい熱ですわ！」

「さきほどまあんなにお元氣でいらしたのに」

「式でなにがあつたのでしょうか、重役の方々も様子が

「…まさか」

背後でリリマが息を呑んだ。すぐに鋭く叫ぶ声がする。

「誰か、ピアキイ閣下をお呼びしてきなさいー残りの者はアルカナ様のお世話を！」

ピアキイ閣下？ アルカナは朦朧とする意識の中で反芻した。閣下が出てくるということは、やはり、あの血を飲んだことが関係するのだろうか。あの血はなんだつたのだろう。あれを飲んだ時のピアキイの暗い目が怖かった。そもそも、なぜあんな異様なものを、深く考えることなくあっさりと飲んでしまつたのか。

リリマ達にベッドに運ばれ、アルカナはふかふかの布団に一息ついた。視界が定まつてくる。視線を移すと、青ざめる女官たちの姿が目に入る。

「り、リリマさん…私、どうじちやつたんでしょう…」

「お気を確かに、アルカナ様」

こんなに熱いのに、がたがた震えていた。そのくせ指一本動かせやしない。気を確かにと言わたつて、こんな不安な状況、どうしろ

「…」

「わ、私…し、しぬ、のかな…」

「まさか！そんなことありませんわ、アルカナ様！」

「…アルカナが倒れたって？」

その時、どこからともなくピアキイが現れた。女官たちがいっせいに脇によけて礼をするのも見向きせず、彼はまっすぐにアルカナの枕元までやつてきて身をかがめた。彼は新妻が倒れたことも予想の範囲内だとばかりに平然としている。ピアキイは手の甲をアルカナの額に当てた。その心地よい冷たさに無意識に擦り寄ると、彼はくすと笑つて甘い聲音で尋ねた。

「吐き気は？」

アルカナはもどかしいほどゆつくりと、かすかに首を横に振つた。ピアキイはアルカナの頬に手を滑らせた。

「一晩もたてば熱も引くだろ？。死にやしない。その為の妙薬だつたんだから」

「あ、あの、血…」

「古い儀式だ。お前のよつな成り上がりの小娘が、要らぬ圧力をかけられないための…お前たち席をはずせ。あとは俺が看る」

「で、ですがピアキイ様…」

リリマが反論したが、彼が女官たちを一瞥するとふいと顔を背け、すぐすごと出て行つた。

ふたりきりだ。けれどそんなことにも気が回らず、アルカナは目を閉じた。心なしか、ピアキイの側にいると熱が引いたような心地がしてくる。思考がはつきりしてきた。少し冷たいピアキイの指先は頬に置かれたままだ。

「…あの花、なんだつたんですか？」

「なについて？」ピアキイの声は存外穏やかだった。少しショーロラスディに似ている。

「白い花。…意味がわかりませんでした。あなたは、あの店にも来

なかつたし。それとも、密会場所をお変えになつたのですか？」「いくら二人きりとはいえ、平静な時ならばこんなにはつきりと尋ねることはなかつただろう。アルカナの問いに、ピアキイは少しばかり驚いていた。

「お前つて、馬鹿だなあ」

本当に馬鹿にした口調だった。アルカナは目を開いて彼を見た。ぼんやりとした視界の中で、彼がにやりと笑っている。

「お前に見せるためにやつてるのに、密会場所を変えるなんて意味ないだろ。あの花を贈つてる間はどうくも行かない。」白は“お前”だからね

「……どういひ、こと？」

ピアキイはぐいと顔を寄せてきた。頬にあつた手がまたもするする動いて、アルカナの髪を通つて、頭のうしろに回る。何も考えられないうちに頭を持ち上げられて、唇を食むようにキスされた。

「白い花を贈つてゐる間は、お前のことだけ考えてゐること

act・5 輿入れ（後書き）

かなり今更な気もしますが、現時点、アルカナ嬢の閣下への信頼度は藁半紙よりも薄いです。

act・6 道は険しいとこづかれど（前書き）

今回暴力表現があります。苦手な方はご注意ください。

act・6 道は険しいといつけれど

ピアキイが言つたとおり、一晩で熱は引いた。あれからすぐにはルカナは寝入つてしまつたが、おきた時には彼は既にいなくなつていた。すっかり靄の晴れた頭で昨日の出来事を思い返してみる。

(…キスされた)

とたんに真つ赤になつた。いくら結婚したからといって、自分とピアキイにそんな甘い雰囲気が漂うことなど、予想だにしていなかつた。アルカナは頭が痛くなつた。自分の夫になつた男は大層思わせぶりらしい。昨日の結婚式でも、なんだかものすごく恥ずかしいことを言われた気がする。

アルカナはベッドから身を起こして部屋を見回した。これから長いこと住むことになる場所なのに、昨日はそれどころではなく、ゆっくり見る暇もなかつた。

広い部屋だ。夫婦の部屋なのだから、質素なハイメント家のアルカナの部屋よりも大きいのは当たり前だが。ベッドはひとつしかないが、三人くらいなら悠々と眠れる広さがあるからしぶしぶ許容しよう。寝室とリビングで大きく部屋が区切られているらしく、シャワールームやお手洗いに通じる扉のほかに、家具はベッドとクローゼットなどしか置かれていない。

ベッドから降りると、自分の服がいつの間にか変わつていて、に気がついた。白いネグリジェだ

シルクの上にレースがふんわりとかぶせられていて、寝巻きとは思えないほど上品で可愛らしいデザインだつた。膝上までしかないスカートから、外にあまり出ないせいで青白い脚が伸びている。こんなデザイン、私には似合わないわ… アルカナはうんざりしてリビングに向かつた。

リビングも広く美しい。中央に鎮座したテーブルも椅子も、絨毯

も、棚ひとつとっても高級品なのは見るも明らかだ。女官はどこにもいない。窓の外を見ると、もうすっかり日は昇っている。朝寝坊をするような女には女官も仕える気はないということだろうか。アルカナは寝室に戻って、大きなクローゼットを開けた。どれも白を基調とした服ばかりだ。仕切りによつて分けられているものの、ピアキイとクローゼットは兼用らしい。アルカナ側の衣装のまぶしさに目を細めた。白は好きだが、流石にこれはやりすぎだ…しかし反論の権利を持たないアルカナはひとつため息をついて、一番地味なワンピースを選び取ると自分でさっと着付け、化粧台の前でできぱきと髪をまとめてしまった。このくらいのこと、実家ではいつもやっていた。そこらの女官よりもよほどうまく仕上げられると、姉からのお墨付きも貰つている。

元の服はどこに置けばいいのかしら、丁寧にネグリジェを畳んだところで、ようやく部屋に女官がやってきた。かなり渋々この部屋にやってきたようで、むつりと寝室に入ってきた彼女は、起き上がりつて一人で身なりまで整えていた主を見るなりぎょっとひるんだ。アルカナは嬉々として尋ねた。

「あ、あの、あなたがお世話になる女官の方ですか？」
女官は奇妙な顔をした。何も答えない。アルカナは慌てた。

「すみません、この寝巻き…どうしたらいいのかしらって思つて…あつ、もしかして、一人で着替えちゃいけなかつたんでしょうか？つい、実家にいたときの癖で…」

ファナティライスト神殿はこの国の王城だ。当然、そこに仕える女官たちも、高い位を持つ貴族の娘たち。アルカナよりも間違いなく目上の人間だ。アルカナにしてみれば、そんな人びとに命令するなど恐れ多い故のこの口調だつたが、哀れな女官はこの小心者の主に心底戸惑つていた。何のかしらこの子、そんな視線を隠し切れなまま腕を伸ばす。

「…」ちらへ

「あ、はいーど、ビリーヴー。」

「……」

女官は絶句してネグリジェを受け取った。それに気づかない鈍感なアルカナはなおも馬鹿丁寧な口調で尋ねた。
「すみません、私、今起きたばかりでよく事情も呑み込めてなくつて…ここが、私の部屋でいいんですよね？あの、私、なにをしたらいいんでしょう？」

ミユウはあきれ返っていた。この小娘、愚鈍すぎる。内心で悪態をつくくらいしかできない。この女よりもよほど格式高い中級貴族に生まれ、無理矢理、嫌がる先輩女官からこの娘の世話を押し付けられ、さてどういたぶつてやろうかと思つていた矢先、出鼻をくじかれた気分だった。我らがアナティライストきつての美男子、ピアキイの新妻。その座を射止めたのが、どことも知らぬ下級貴族の女と言われ、神殿の女官たちはいまや阿鼻叫喚の図、少しでも彼に近づいて取り入ろうとしていた者たちは、この女狐、もとい、アルカナ・ハイメントとやらを引っ裂いてやれと息巻いていた。ミユウはかの美青年を麗しいと思うものの、そういう男を追いかけると苦労するだろうと見越して興味もなかつたので何もいえないが、流石に自分よりも下級の女の世話などごめんだった。なんたる屈辱。きっとその女は鼻高々で、喜び勇んでミユウに無理難題を押し付けてくる、鼻持ちならない奴に違いない。そんな悪女の世話など誰が見るものか…そう思つて来てみれば、「これ」である。

ネグリジェはすっかり完璧に畳まれて、白いワンピースを可憐に着こなし、さらにはこれ以上ないくらい絶妙の緩さで髪を結い上げている。女官顔負けの仕事だった。挙句の果てにはこの敬語。主が召使に恐縮してどうする。顔も身体も自分より貧相だが、この小娘

のインパクトにかけてはミュウは脱帽した。どんな居丈高な物言いをしても、彼女、へ口く口と頭など下げきそうである。

その彼女があんまりにも肩身が狭そうに縮こまっているものだから、思わずミュウは口に出していた。

「…アンタって、ピアキイ様に取り入つてその座についたんじゃないの？」

「え？」

しまった、すっかり肩の力が抜けて、おまけに敬語も忘れていた。はつとするミュウに対し、アルカナはそんなことは当たり前だと言わんばかりに首をかしげた。ちょっと困った表情だった。

「…そんな噂に、なつてるんですか？」

「噂もなにも、そうでなきや、なんでアンタみたいな下級も下級の小娘がこんなところにいるのよ」

アルカナは眉尻を下げた。途方に暮れている。自分でもよく分からぬとでも言いたげな表情だ。

「私にもわかりません」アルカナは本当にそう言った。

「このお輿入れの話だつて急な話で…あの、閣下は私のことをお嫌いのようだし…適当に選んだつて、仰つてましたけど

そうして、アルカナは自分の台詞に傷ついてうつむいた。そりやそうだ。アルカナの話が本当なら…あくまで本当ならば、だが…「適当に嫁にされる」なんて、女にとつてはたまたもんじやない。アルカナはぎゅっとワンピースのスカートをつかんでいる。これが演技ならたいしたものだ。だが、演技のはずなのだ。

ミュウには信じがたい話なのだ。彼女の着ているワンピースをはじめとして、クローゼットに仕舞われた彼女の衣装はすべてピアキイの采配によるものだし、なにせ彼女が寝込んでいた昨晩、女官も寄せ付けずにこの娘の面倒をかいがいしく見ていたのは他ならぬ彼女の夫なのだ。女官たちは、間違いなくこの小娘が、麗しのピアキイ閣下をたぶらかしたのだと思っている。ミュウも同意見だった。

あの女癖の悪いピアキイ相手に結婚までこぎつけた女だ。そう思うと、彼女の挙動も白々しく見えた。ミコウは鼻を鳴らした。

「ま、いいけど」

こんな女に敬語を使ってやるのもばかばかい。

「精々覚悟しておきなさいよ。オバサン連中はアンタを気に入つてるようだけど、私たち、みんなアンタの味方にはならないから」

アルカナは早速こんな場所に嫁いだことを後悔した。王宮なんて大嫌いだ。実家では使用人たちと目立ったトラブルも起こしたことはないし（トリノとは小さい頃殴り合いの喧嘩もしたものだが）、それどころか一緒になって仕事に精を出すくらいだったから、まさかこんなところでつまづく羽目になるとは思つてもいなかつた。恐ろしいのは、ピアキイだけだと勘違いしていた。

さてどうしよう。神殿に親しい人物がいるわけでもなし、女官に仕事をボイコットされては非常に不便だろう。アルカナの日々のスケジュールを握っているのは女官たちなのだから。かといってこの調子では、女官のご機嫌を取ろうとしたところで逆効果だ。

アルカナは深くため息をついた。胸を張る自分よりも美人の女官に弁明した。

「あの…すみません。私、本当に、の方とは、今までお話ししたこともないんです。本当なんです。信じてもらえないかもしないけど」

女官は何も言わずにアルカナを見下している。

「今日、しなければならないことがないのでしたら、申し訳ないのですが…神殿を案内していただいても、よろしいですか？この先、迷子になつてあなたのお手を煩わせたくないのです」

女官はついぞなにも言わなかつたが、アルカナの願いを無碍にはしなかつた。上から下までアルカナを眺め回したあと、無言のまま、

視線についてこと促され、アルカナはほっとして彼女のあとに続いた。

白亜の富殿を歩く。まだ、こんなきらびやかな神殿に住むことなど実感も湧かなかつた。部屋の位置を覚えられないんじゃないから。部屋の周辺をしつかりと頭に刻み込んでいると、女官がそつくなぐ言つた。

「どこに行きたいのよ

「え、えーと…」

アルカナはしばし考えて、目を輝かせた。

「あ、厨房！ 厨房に行ってみたいですね。神殿の厨房つていうくらいですし、きっと大きいですよね。それから、洗濯場と、お庭と、図書館と… ああ、神殿なんだから礼拝堂にも行きたいです。それと… そうそう、立ち入り禁止の場所も教えてくださいと嬉しいです。

間違つて入つてしまふと困りますし」

実家でよく行つた場所を片つ端から挙げていくと、女官はまじまじとアルカナを見てから、怪訝そうな顔をした。アルカナはなにかまづいことを言つただろうかと困り果てた。

「……アンタ、執務室はいいの？」

「え？ 執務室に行く機会なんてあるんですか？」

目を瞬くと、女官は目を細めた。アルカナの言葉を疑つているようだ。母には、仕事をする場所は男のテリトリーだから行つてはならぬといわれている。どんな用事があつても、父の執務室に事前の許可なく顔を出すことはなかつた。神殿では違うのだろうか。

女官は頭が痛いらしい。こめかみを押さえてぎゅっと目をつぶつ

た。
「……まあいいわ。厨房はいっちよ

探検は非常に楽しかつた。女官はなんだかんだ言つて仕事は完遂してくれたし、大きな厨房に案内されたときは思わず歓声を上げて

ゴック達を驚かせ、洗濯場では女官たちが躍起になつて落とそうとしていたテーブルクロスの染みを瞬く間に落としてやり、庭では庭師と植物の世話について討論し、人の少ない廊下に出た頃には、女官の視線はかなり呆れたものとなつていた。

最初の謙虚などなんのその、すっかりしきつきと調子を取り戻したアルカナは、やつてきた静かな通路を見回して問うた。

「ここは？」

「神官の方々の執務室よ。こちらは高等祭司の方々とかの仕事場。アンタの取り入つてるピアキイ閣下の仕事場もここ」

「じゃあ、ここは立ち入り禁止ですね」

あつさりと身を翻した。女官は絶句した。

「……アンタに、執務室に押しかけて閣下にお目通り願おつゝて発想はないの？」

まるで妻ならば執務室に入る当然の権限を有するとでも言いたげだ。「閣下のお仕事姿に興味があるといえばありますけど、男の仕事場には入らぬよ」と母から教わっています。

より正確に言うなら、自分が淡い恋をする男性の仕事姿を、もちろん見てみたい。見たいに決まつている。あのうつくしいみかん色の瞳が、真剣な光を宿して書類に注がれるのかと思つと鳥肌さえ立つた。しかし彼から受けた数々の嫌がらせを思つと、どうせまたネチネチとアルカナを追い詰めて泣かせてくるに違ひないのだ。足も遠のく。

そんなことを露知らぬ女官はまだ納得がいかない様子だったが、詮索はしてこなかつた。アルカナが行きましょうと追い立てたところで、背後からお呼びがかかつた。

「おや、アルカナ嬢？」

振り返ると、書類をひと束抱えたアンノが目を丸くして立つていた。アルカナは慌てて深々と礼をする。

「アズラーノ様、すみません。お邪魔しております」

「アルカナ嬢、身体の具合はいいのかい？顔色がまだよろしくないようだ」

「いえ、もうすっかり。今この方に神殿内を案内していただいたのです」

アンノはまだ渋い顔だった。アルカナはその深刻な表情に眉をひそめた。それから、あつと気がついて頭を下げる。

「申し訳ありません、女がこんな場所に入り込むのは無礼でしたよね」

「イヤ、それはいいんだけど……」

アンノは思案顔だ。何か気にかかることがあるらしく、しきりに目を泳がせている。問おうと口を開くと、その前に彼にさえぎられた。肩を押される。

「とにかく、早く部屋に戻ンなさい。閣下に勘付かれる前に……」

「もう勘付いた」

よく通る穏やかな声に、アルカナが礼をする前に、金髪の彼はすでにアンノの隣に立っていた。彼の無機質な瞳に背筋が粟立つた。ピアキイの周囲で空気が凍つていた。

「その手を離せ、アンノ。殺してやろうつか」

瞬く間にアンノはアルカナから一步下がった。ピアキイがなぜ怒っているのかまるで見当もつかず、アルカナは戸惑つた。何か、何か言わなければ。アルカナが口を開く前に、しかしピアキイは動いていた。アルカナの手首をひとつかんで脇に立つと足を振り上げた。あんまりにも素早い動きだった。背後からの女性のうめき声で、アルカナはようやく事情を呑み込んだ…ピアキイが女官を蹴ったのだ。

「ピアキイ！」

アンノが鋭い声を上げたが、ピアキイは止まらない。倒れこんで咳き込む女官。腹を押さえ込んだところを、彼が女官の頭を思い切り踏みつけた。鈍い音が響いた。アルカナは立ち尽くした。

「三日部屋から出すなと言つたはずだ」

冷え切つた声だ。顔合わせのときは違う。冷酷で情のかけらもない、無慈悲な声音だった。女官は震える声でつぶやいた。

「も、もうしわけ…」

「見せしめにその首落としてやるうか?」

ピアキイが首を傾けた。前髪がさらりと落ちて、その美しさがまた恐ろしい。彼はニヒルに口端を上げた。我ながら名案だといわんばかりの顔だ。怖い、怖い、怖い！

「ああ、それがいい。無能な奴にアルカナの世話をさせるわけにはいかないからな。この娘は”使い捨て”じゃないんだから」最後は独り言のようにボソボソと喋っていたが、その間もずっと彼の足は女官に矛先を向けている。彼女の額から血が垂れ落ちるのを見て、アルカナは喉がひゅっと鳴った。

なにを言いたいんだ。ブルブル震える中で、アンノがピアキイを制す声がする。彼は止まらない。目の前が真っ暗になつて、アルカナは、気がついたら思い切り叫んでいた。

「わ…、わたしが無理を言つたんです！」

ピタリと、ピアキイの足が止まつた。ついと冷えた目がアルカナに向いた。アルカナは力の緩んだ手から自分の手首をはずすなり、かばうように女官に飛びついていた。ピアキイがアルカナを傷つける気はない、何故か妙な確信があつた。

「この方はちゃんとといいました！部屋を出るなつて言つていらつしやいました！私が、もう体調も元通りだし、大丈夫だからと無理を言つたんです！この方は悪くありません、け…蹴るなら私を蹴つてください！」

矢継ぎ早にそう言つて、蹲る女官の背中をぎゅっと抱くと、ピアキイはしばしその姿を見下ろして、やがてつまらなそうに視線をはずし、ため息をついた。

「それが本当だとしても、そりぢやないにしても、お前は単純で底なしの大馬鹿者だね」

「……え？」

「お前が俺の不興を買うことの意味が、まだわからない？ねえ、おろかなアルカナ。お前の家族を生かすも殺すも、俺には簡単にできるんだよ？」

「…！」

アルカナはさつと責ざめた。ピアキイは温い笑みを浮かべると、アルカナの腕を引っ張り上げて立たせ、その唇にねつとりとしたキスを落としてきた。彼のつめたいくちびるに、アルカナの身体の奥がどんどん冷えていくのを感じた。満足したらしいピアキイは、突然するりとアルカナから身を離すと、何もなかつたかのような顔をしてすたすたと歩き出す。啞然として何も言えないアルカナに、彼は実際に楽しそうに言い残した。

「精々俺を楽しませろよ。せっかく手に入れた、大事な人形なんだから」

最低最悪だ。なんなんだあの男は！百年の恋も冷める思いでアルカナは憤った。背中には傷ついてぐつたりとした女官を負ぶつている。アルカナよりも背の高い彼女を運ぶのは難しいものの、横を行くアンノに任せせるのも癪だつた。なにせこの男はあのピアキイの後見人である。一体アンノはピアキイにどんな教育をしたというのだ。そのアンノは、アルカナと女官に平謝りを繰り返していた。

「本当にすまない。ウチの馬鹿息子、いや閣下が…」

「アズラーノ様がお謝りになることはありません」

言えるものならば、後見人の責任としてそこに土下座してみせるとでも言ってやりたかったが、流石に高等祭司相手にそんなことを言えるわけもなく、アルカナはかたくなに首を横に振つた。元来、あのピアキイ本人が謝るべきことなのは事実だ。

女官を自分の部屋に運ぶなり、アルカナは低い声でアンノに言った。

「アズラーノ様、大変恐縮ですが、治癒術師を一人、お呼びいただいてもよろしいですか。あの方の話では、私は部屋から出でてはならないそうですので」

「ああ、すぐに手配しよう。あとは代えの女官を…」

「いえ、必要ありません。話を大きくしたくないので、口の堅い医者だけお願ひします」

「しかし…」

「私は一人でも身の回りのことはできますので」心配はいりません。それに、話が広まればピアキイ閣下の名に傷がつきますし、ひいては彼のご親族でいらっしゃる世界王陛下への不信にもつながりかねません。くれぐれも、このことは内密に」

アルカナだつて貴族としてのプライドは多少なりとあるし、その

上で、いかな男であろうと、夫に恥をかかせるわけにはいかなかつた。夫を守り、家を守り、使用人を守れ。幼少の頃から母に口うるさく言われた言葉だ。貴族の女としての使命だ。

不機嫌ながらもその教えを遵守するアルカナに、アンノは心底感銘を受けたようだつた。しばしじつとアルカナを見据えてから、きりりとした仕事人の顔をして「待つてろ」と言つなり、彼は駆け出していくつた。彼の後姿が見えなくなつてから、アルカナは部屋に入り、枕を高く盛つて女官を寝かせ、棚からきれいな手ぬぐいを見つけて出して彼女の切れたこめかみを圧迫した。どこかに薬がないかと棚をひっくり返しているところで、嫁入り道具にまぎれて入つていた薬草が見つかつた。ピアキイが以前送つてきた野草のひとつだ：アルカナは舌打ちしたい気分で草を手でもみこむと、彼女の傷口に当てた。女官がうめいた。

「少し我慢してください」

アルカナは新しい手ぬぐいに水差しの水をひたして腫れに当てた。手早く応急処置を進めていく主の姿を、女官は薄つすらと目を開けてみていた。

「う……なんで、あんたが私を…」

「痛むでしょう、喋らないでください」

アルカナはびしゃりと言つた。

「母が言つていました。貴族の女の仕事は、夫を立てて、家を切り盛りして、使用人を守ることだつて。もしピアキイ閣下がまかり間違つてあなたを殺してしまつたら大問題になります。の方は職を失うかもしれない。それだけです。私自身と、ピアキイ様のためにやつただけです」

さらりと言い放つて、引き続き手当てるアルカナに、女官はふてくされたように口をつぐんだ。

結論から言えば、女官は無事治療されて傷跡ひとつ残ることはなかった。女官はアルカナに借りを作ったと思っているらしく、不承不承ではあるが、きちんと職務をまつとうしてくれるようになった。彼女の名前はミュウというらしい。あくまで借りを返すだけだとう彼女は、人前以外ではアルカナに敬語のひとつも使わなかつたが、アルカナはこれで随分すゞしやすくなるだろうと踏んでいた。

アルカナはおとなしく一日間を部屋で過ごした。ピアキイと顔をあわせることだけが恐怖だつたが、仕事が忙しいのか、はたまた彼のライフワークを崩すことなく浮氣でもしているのかは定かではないが、アルカナの知る限り、ピアキイが夫婦の部屋に来ることはなかつた。アルカナは先日の出来事が引っかかりつつもミュウに相談した。ミュウにとつて、ピアキイの株は目下大暴落中らしい。当然の結果だ。

「ねえミュウさん、ピアキイ様にとつて、私との結婚つて一体どういう意図があるのかしら」

「ハア？」

ミュウは怪訝な顔を隠すことなくアルカナに向けた。

「私への暴力事件をもう忘れちゃつたの？あれじゃどう考えたつて、アンタに惚れて誰の目にも触れさせたくない嫉妬心丸出しの男の図でしょ。アズラーノ様のこと、殺しそうな目で見てたわよ」

「…ピアキイ様が、私なんかにそんなこと。そもそも、私…顔合わせのときの印象は最悪だつたし

「最悪？」

アルカナはしばし悩んでから、「誰にも言わないでくださいね」と前置きして、心持ち声を低めて語つた。

「私、顔合わせの前に、ピアキイ様とは一応、面識があるんです。2、3日に一度、お顔を拝見するくらいに」「なんですか？」

「直接お会いしたわけではないんです。ハイネント家がどこに建つてゐるかご存知……じゃないですよね。平民街の大きな宿の向かいで、私の部屋からはその宿がよく見えるんです。ピアキイ様はよく宿の前で待ち合わせをしていらっしゃって……その、いつも違う女性の方と」

ミコウは呆れ返った様子で目を細めた。アルカナはますます縮こまつた。

「ピアキイ様は、いつも私が覗き見しているのをご存知でした。顔合わせの時にそれを言われて……私のこと、すごく軽蔑したみたいでした」

「軽蔑？」「ミコウは不満顔だ。

「見目麗しい男つてだけでそりや目立つのに、見るたびに女をとかえひつかえしてれば、気にするなってほうが無理な話でしょ。閣下のこと眺めてる女なんてあんた以外にも大量にいたんじゃない？　というか、アンタがいつも閣下を見てたことを知ってるつてことは、閣下の方こそアンタをいつも見てたってことじゃない」

「…え？」

アルカナは目を瞬いた。そういうふうだ。ピアキイに自分のことが気づかれたのは、あの雨の日だとばかり思っていたが、あの日、ピアキイへの思慕を自覚して以来、むしろ自分は彼の後姿しか見られなくなっていた。とすれば、ピアキイがアルカナの視線に気づいたのは、もつと前の話ということになる。いつの間に、いつから、アルカナの視線に気づいていたのだろう。

ミコウは嘆息した。

「少なくとも、閣下がアンタに『執心だ』というのは確かね。ホラ見なさいこの花。毎日届けられちゃ手入れも大変だわ」

「え？…この部屋の花って、閣下が用意されているんですか？」

ミコウが花瓶に差している金色の花に、アルカナは嫌な予感がした。そして、その考えはあながち間違いないだろうと推測する。アルカナの口元が引きつった。

「…」執心なんて、そんなこと、あるわけないです

最低最悪。これでチクリと痛んでしまう自分の胸が。あんな男への恋なんてさつさと冷めてしまえばいいのに。嫌いになりきれない自分がこんなにも悔しい。

「ピアキイ様は今日もお越しになりますん」

「なんで？」

「だつて、花が田くないから」

ミコウは憤っていた。いつもウジウジとうつむいている自分の主も大概嫌いだが、それにしたってピアキイ閣下の横暴に関しては同情を禁じえない。結婚してから三日、自分からはまるで妻に会いに行かないばかりか、部屋から出しもしないで、花の色で浮気予告までする始末。これで女官達にまで嫌われるなんて散々だ。アルカナの様子から、彼女が望んでこの神殿にやってきたわけではないのはミコウにも薄々分かつていた。なにせあの娘は富も名譽も興味はないし、豪華なドレスにも見向きもしない。聞くところによると趣味は家事と裁縫らしい。世界王の甥の妻というにはあまりに庶民派すぎる。

アルカナがすっかり諦めきった表情で大きなベッドにもぐりこむのを見送つて、ミコウは部屋を出た。アルカナがピアキイに憧れているのは見るも明らかだ。いくらなんでも、好きでもない相手の言うことを逐一聞いてやるほどあの主は小心でもないだろう。一方でピアキイが、アルカナに並々ならぬ執着を抱いているのは身もつて理解した。それが恋愛か否かは定かではないが、病み上がりの妻が外に出たくらいで、付き人の頭を踏み潰そうとするくらいには、彼はアルカナを側においておきたいのだ。お陰で、「アルカナを外に出すな」なんて命令は聞いていないと、言い訳する間もなかつた。

否、それで正解だろ？おそれく口に出したら女官たち全員が血だるまになっていた。

「面倒な夫婦だ…」ミユウはため息をつきかけて、ふと手にした荷物が足りないことに気づいた。包みをひとつ、アルカナの部屋においてきたらしい。ミユウはきびすを返した。忘れ物を主の部屋においてきたと言えば、女官長にこいつてり絞られてしまう。女官長をはじめとする年配の女官達はみな、誰に対しても礼儀正しく遠慮がちなアルカナがお気に入りのようだった。それが若い娘達の反感をさらにお買つているなど、本人はまるで予想だにしていないとは思うが。慌てて、アルカナの部屋への道を辿ろうとしたところで、しかしミユウは足を止めた。当分は姿を見るのも恐ろしい男が、彼の後見人とともに歩いているのを見つけてしまったからだ。とっさにミユウは、近くにある柱に身を潜めた。

アンノのほうは、涼しい顔のピアキイを相手に没面だった。
「ピアキイ、いくらなんでもアレはやりすぎだ」

「アレって？」

「女官に怪我をさせただろ？」

ミユウはドキリとした。先口の一件を、アンノが言及しているらしい。しかしピアキイは夜闇の中でもかすまないその美貌をさりし、綺麗なみかん色の瞳を細めてすっとぼけた。

「ああ…そういえばそんなこともあつたかな」

「何を言つんだ！いいかピアキイ。お前は怪我や死にに対する無頓着すぎる。一体全体、おまえは俺の家でなにを学んできたつていうんだ？俺はおまえをそんな風に育てた覚えはないぞ」

「ふるつくさい言い方」ピアキイが嘲笑した。

「茶化すな！アルカナ嬢に愛想を尽かされても知らないぞ」「それは困るな」

まったく困つていらない調子でピアキイは返した。その白々しさに、ミユウはいつそ感服すらした。あはなりたくない。するとピアキ

イは、麗しい造形の顔をつゝとりと緩めて、夢見る口調で言つた。

「今日で三日だ。」血も定着しだろう。ふふつ…アルカナは何年で気づくかな。反応が今から楽しみだ

「…何の説明もなしに血を飲ませるなんて。シェロ様は一体何を考えているんだ」

アンノが頭を抱えた。血？ミコウは情報を整理した。そういえば、アルカナが聞いてきた。昨日だつただろうか。王族の結婚式では、花嫁に血を飲ませるのは当たり前なのかと。そんな話を聞いたこともなかつたし、そもそも何の血を飲むというんだ。血に似たワインでも飲まされたのだろうと一笑してやつてものの、アルカナは釈然としない様子だつた。…まさか、その話と何か関係が？探偵にでもなつた気分で、ミコウはますます身を縮こまらせた。その時、ピアキイとアンノがミコウの潜む柱の前を通り過ぎた。

「伯父上が何か言つはずがない。の方は放任主義だしな。…ああ、そうだ。おいアンノ、ファレイアをアルカナのところへ呼べよ。子供の世話でもすれば、嫌でもアイツも自分のこと気にづくだらう？」

「……お前は歪んでる」
アンノのつぶやきに、ピアキイはくすりと笑つた。月よりも眩しく怪しく儂ぐ、悪魔のように恐ろしく、彼は甘く言つてみせた。

「歪んでる？ そんなの当たり前だ」

蠱惑的にわらう天使のような悪魔は不敵に言い放つた。

「我ら不老不死一派、俺達は、人間どもとは格が違うんだよ」

act・8 ライバルは三歳児

翌日、蒼白な評定で部屋にやつてきたミュウに、アルカナは首をかしげた。昨日彼女が忘れていた包みを持って、「ミュウさん、忘れ物ですよ」と差し出すと、彼女はひつたくるように包みを抱えた。

アルカナは眉尻を下げた。

「ミュウさん、どこかお具合が悪いのですか？顔色がよくありません」

「大丈夫よ」

「お医者様をお呼びしたほうが…」

「大丈夫だつてば！」

少々きつい口調で言い、ミュウは青い花を生ける作業に戻った。アルカナはそれ以上追及することもできず、何か気がまぎれる話題を提供しようと頭をひねった。

「…あ、そうだ。今日から私は部屋から出てもいいんですね。私、何をすればいいんでしょう？」

「アンタにもうちょっと頭が足りてたら夫の執務の手伝いもできたでしようけど？」

ミュウの痛烈な嫌味に、アルカナはたじろいだ。唇を尖らせて、「でも、政治のむずかしいお話に女が口を出すなんて…」と口ごもるアルカナに、ようやつとミュウも口端を上げた。緊張もほぐれたらしい、彼女の口調が幾分かやさしくなった。

「昼になつたらアズラーノ卿がご息女をお連れになるそうよ。アズラーノ卿の奥様はお体が弱くていらっしゃるから、お子様の世話もままならないのですって」

「それで、私がご息女のお世話を？」

「そういうことになるわね」

そうしてミュウはまた憂鬱そうにため息をついた。一方でアルカナ

は少し心が浮き足立つた。

「それなら任せてください！私、子供って大好きなんです」

「…ねえアンタ、”不老不死”って信じる？」

「その子はどういう…え？不老不死？」

いきなり話題がすりかわって、アルカナは話をしながらてきぱきと髪を結う手を止めた。きょとんとして振り返ると、ミユウは相変わらず心ここにあらずだ。アルカナは目を瞬いた。

「不老不死って、御伽噺にあるやつですか？双子神が死ぬとき、ふたりの魂がよつと引き裂かれて、それぞれよつつの不老不死の一族を作つたっていう」

「…御伽噺… そう、よね。御伽噺」

「あ、そういうえば、世界王陛下の家系、エファイン家、でしたっけ？その一族のひとつと同じ名前ですね。エファイン、ソリティエ、シエルテミナ、ノルツセルって名前だったと思いますけど。このお話が由来にでもなってるんでしょうか？」

ミユウは答えなかつた。一体どうしたのだろう。アルカナはかんざしを髪にはめ込んで彼女に向き直つた。

「ミユウさん、本当に大丈夫ですか？その不老不死がどうかしたんですか？」

「……なんでもないわ」

あくまで頑ななミユウにアルカナは口をつぐんだ。それから、この世界に伝わるいくつかの御伽噺を思い出す。

この国では、御伽噺のキーワードには「不老不死」というのが定石だつた。例えば、先の双子神の話もそう。それと、世界の危機に現れるという「赤の巫子」とかいう救世主の物語も、確かその救世主が不老不死という設定だつた。…要するに、幽霊だとか死神だとか天使とかいう存在と一緒に。信じている人は信じている。そんな不確かであいまいな存在。

ひょっとしてミュウも不老不死を信じていたのだろうか。ともすれば悪いことをした。不用意に「御伽噺」だなんて言つたから傷つけたかもしれない。謝つたほうがいいかと口を開いたところで、

「ファレイア！ ちょっと待ちなさい！ フィーちゃん、駄目だよ！」

今までに聞いたなかでもワントーン高いアンノの声が聞こえたと思った直後、けたたましい音を立てて部屋の扉が開いた。気まずい空氣も吹き飛ばし、目を丸くしてアルカナとミュウが注目した先には、ほんの小さな女の子がずんと「王立ちしていた。

「アルカナっていうののへやは、ここかしら！」

ふんぞり返った女の子はキンキン声で言つた。アルカナはぽかんとした。

「は、はい……」「ですが」

「ふーん」

女の子はズンズンとアルカナの足元まで来ると、大仰に腕組みをして、じろじろアルカナを舐めるように見た。3、4歳くらいだろうか。かわいらしいお洋服に身を包んでいるのを見るに、どこかいといところの息女なのは確かだ。アルカナはピンときた。彼女がアンノの娘に違いない。昼と言いつつ今はまだ朝だが、予定が早まつたのだろうか。アルカナはにっこりして女の子と目線を合わせた。

「あなたがアズラーノ様の娘さん？」

「そーよー！ アンタがピアさまのおよめさんねー！」

「ええ」

ピア様？ 可愛い渾名だ。あの最低男からは想像もつかない。内心でほくそ笑んでいると、女の子はハツと鼻で笑つた。明らかな嘲り笑い。アルカナは目を見開いた。

「なーんだ！ たいしたことないじゃない！」

「……うん？」

女の子は居丈高に胸を張ると、ピアキイそっくりの不敵な笑みでアルカナを見た。一体この子は何を言つたのだろう？ 自分の聞き間違

いだろうか。アルカナが気を取り直して口を開くと、女の子は実に偉そうに続けた。

「アンタみたいなブサイクなんかより、フイーのほうがずっと、ずっと、ピアさまにふさわしいの！フイー、おつきくなつたらピアさまのおよめさんになるんだもの！」

「……ええ？」

開口一番がライバル宣言、いやそればかりか、かなり失礼なことを並べ立てられた。アルカナは一の句も継げない。怒るどころか呆れることも笑うこともできず、ただただこの小さな女の子に口をあんぐり開けていると、開け放した扉のむこうから、アンノがひょっこり顔を出した。

「アアア…駄目だよフイー、アルカナ嬢にご迷惑をかけては」
「パパ！」

女の子がくるりと振り返った。やはり、彼女はアンノの娘ということで間違いないらしい。よく見ると、田元のあたりがアンノそつくりだった。彼女は父親に飛びつくなり、アルカナを遠慮なく指差した。

「パパア、パパア、フイーをピアさまのおよめさんにしてくれるんでしょ？なんであんなのがおよめさんなの？ねえパパ、フイーも、フイーもピアさまのおよめさんになりたいー！」

「ごめんなフイーちゃん。フイーはピア様のお嫁さんにはなれないんだよー…すいませんねエ、アルカナ嬢。うちの娘がご迷惑をかけ

て

「い、いえ…では、そちらが？」

「ハイ。娘のファレイアです。もうすぐ四歳になるんですけど、まあちょっとばかし失礼なコト言つても大目に見てやってくださいね」
「はあ」

それにしたつて、いくら二歳児と言えども初対面の女性に「ブサイク」はないだろうと思いつつ、アルカナはポーカーフェイスを気取つて笑みを崩さなかつた。ミュウは何も言わずにじつとファレイア

を見つめている。苦々しい顔なのは、ピアキイと似たような表情を浮かべるこの女の子が気に食わないからだろうか。

「取り直して、アルカナはファレイアに言った。

「はじまして、アルカナといいます。えっと… フィーでいいかしら」

「だめよ！」

ファレイアは勝ち誇ったように言った。

「フィーのことフィーって呼んでいいのはね、パパとママとピアさまだけなんだから！」

「そう、じゃあ」

「アルカナはフィーのこと、”ファレイアさま”って呼びなさい！ とんだ女王様だ。アンノはさすがに見咎めて声を荒げようとしたが、アルカナは別段気にしなかつた。自分が小さい頃も、トリノに似たようなわがままを言ったものだ。懐かしくなつてアルカナは目を細めた。

「そうですか。じゃあファレイア様とお呼びしますね」「そーよー！」

「ああ…すいませんねエ、アルカナ嬢」

「いえ、お気になさらないでください。アズラーノ様がお帰りになるまでお世話をさせていただけばいいのですか？」

「はい。本当は昼食つてからの出勤だったんですが、この子がはやく閣下の嫁に会わせると聞かないモンで」

「へえ」

このお嬢様は、ピアキイに首つ丈のようだ。あの最悪が人の姿をして歩いているような男も、案外子供には優しいのだろうか。だとすれば随分と笑える話である。アルカナは愛想良く返した。

「どうせすることもないですし、大丈夫です。ファレイア様、お預かりいたしますね」

「よろしくお願ひします。定時には迎えにくるんで。フィーちゃん、いい子でいるんだよ？」

「はーい！」

元気のいい返事だ。アンノも満足したのか、ひとつ大きく頷くと部屋を出て行つた。残されたアルカナは、じつとじゅぢゅを見上げるファレイアを見下ろした。どうにも視線が痛い。

アルカナは努めて笑顔を取り繕つた。

「さあ、ファレイア様。何をして遊びましょつか？」

「えーっと、えーっと、おままごと！」

アルカナはおやと目を瞬いた。アルカナに對して敵意満々だから、ひょっとして何かにつけて文句のひとつでも言われるかと思つていたが、存外素直な返事である。しかも、随分と可愛らしい遊びだ。アルカナは小さい頃は大概トリノを馬にして遊んだものだった。なんだかんだ言つても三歳児よね、ほほえましい。アルカナは頷いた。

「いいですね。ファレイア様はなにをやりたいの？」

「おひめさま！アンタはフイーの”げぼく”ね！」

「……」

下僕なんて難しいことば、よく知つてゐるわね。全く関係のない台詞が飛び出しそうになつて、アルカナは口を閉ざした。思わずミュウを見ると、笑いを必死になつてかみ殺しながら悶えている。よほど三歳児にしてやられるアルカナが痛快らしい。盛大にため息をついた。

アルカナの思いなど知つてか知らずか…おそらく知る由もないだろう…ファレイアは楽しそうに続けた。

「でね、でね、そこのオバサンはフイーをいじめるわるい魔女ね！」
「おば…つー？」

ファレイアの中ではミュウも配役に名を連ねているらしい。アルカナは苦笑した。ミュウは笑みもいじこかへ吹き飛ばして怒り狂つている。

「それでー、ピアさまがフリーをたすけてくれる王予さまー！」

「え？」

アルカナは慌てた。

「だ、駄目ですよファレイア様。ピアキイ様はお仕事でお忙しいの
ですから、おままでできません」

「なんで?」

ファレイアの顔は至極無邪氣だった。

「ピアさまはいつも、おじごとよりフイーのことだいじにしてく
れたもん!」

「で、でも…」

これがせめて、相手がアンノあたりならアルカナでも対処のしよ
うがあつたが、ピアキイではまずい。アルカナもミユウも、先日の
一件のショックからだつてまだ立ち直りきつてはいないのだ。仕事
のこともそうだが、まずこんな子供の戯言を聞いて、あのピアキイ
がどんな暴挙に出るか。

煮え切らない返事のアルカナに痺れを切らしたのか、ファレイア
の表情の雲行きが怪しくなってきた。口元がしわしわになって、涙
をこらえ始める。アルカナははつとした。

「ファレイア様、」

「うわああああん!…やだ、やだやだやだああ!…フイー、ピア
さまとあそぶー!…」

堰を切つたようにファレイアが泣き出した。よほどピアキイは彼女
に気に入られているらしい。どうしたものかとオロオロしていると、
扉がキイと音を立てて開いた。ファレイアは泣き止まない。ミユウ
がぎくりと肩をこわばらせた。アルカナは息を呑んで、反射的にフ
アレイアを抱き寄せていた。

金髪の暴君は、みかん色の瞳を眠たげにこすれながら、ふらりと
部屋に入ってきた。随分とお疲れらしい。ファレイアがピアキイの
姿に気づいて、ピタリと涙を止めた。

「ピアさま…」

「あ?」

ピアキイはそこでようやくファレイアの姿に気づいたようだ。ぽんやりしたまま問いかけてくる。

「……アー…なんでもういるんだよ」

「ピアさま、ピアさま、フィーに会いにきててくれたの?」

「めんどくせ…」

アルカナは責めた。彼のこの調子では、明らかにファレイアを疎んじている。子供好きとは思えない!とつさに立ち上がり、アルカナはファレイアを庇うように立つた。

「お疲れ様です、閣下」

「ん…」

「お休みになられますか?申し訳ありません、騒がしくて…」

ピアキイはアルカナと、自分の足元に纏わりつくファレイアを見比べた。そして薄つすらと微笑む。この笑顔に騙されではない、アルカナは気張った。

「なに?心配しなくともこのガキを蹴り飛ばしたりはしないから安心しろよ」

「え?」アルカナは拍子抜けした。

「アンノの娘に手出しそしたら、俺の後ろ盾がなくなるだろ」

アルカナは絶句した。やはり最低男は最低だつた。要するにアンノの娘でさえなれば手出しあいとわないということが。

ものも言えないアルカナにはお構いなしに、彼は嫌悪感むき出しでファレイアを見下ろしている。ピアキイのこういう表情も珍しい。ミコウを蹴りつけた時ですら、底知れぬ微笑みをたたえていたこの男が。

「あーあ、昼までアルカナを枕に寝倒す予定だつたのに」

「な!」アルカナが真っ赤になつて狼狽した。ピアキイは氣にも留めない。

「ま、いいか。コイツは女官に押し付ければ。さ、おいでアルカナ」

「ちょ、ちょ、ちょ、ちょっと待つてください!」

無理だ。いや、夫婦になつたら、寝所を共にするのは当然かもしれない。だが、結婚してから同じベッドで眠つたためしなど無いし（そもそも彼がこの部屋にいるのを見ることさえ結婚式の後に倒れて以来だ）、この平凡もいとこころのアルカナが、絶世の美青年であるピアキイと夫婦になつたところからしてすでにおかしいのだ。アルカナは赤面したままぶんぶんと首を横に振つた。

「だつ、大体、今日の花は白くないじゃですか」

苦し紛れに言つてやると、ピアキイはちらりと花瓶の中身を見て口端を上げた。アルカナの腕をぐいと引いて囁くように甘く言つ。

「嫉妬した？ 安心しろよ、今日の恋人は女じやなくて仕事だから

「し、し、嫉妬なんて！」

「ピアさま！」

悲鳴を上げんばかりに抗議の声を漏らすアルカナは、しかし容赦なく足を踏んづけられて悶絶した。アルカナへの敵対心をメラメラ燃やして、ファレイアがピアキイの脚に抱きついた。この三歳児ときたら、この暴力王子に対して怖いもの知らずな、きっと将来は大物になるだろう。

「ねえねえピアさま、フリーといつしょにおままでしょ？ あのね、フリーがおひめさまでね、ピアさまがおつじさまー！ アルカナはフリーのげぼくー！」

「へえ？」

いつファレイアがピアキイに蹴られるかとひやひやしていると、意外にも彼は興味を示した。器用に片眉を上げてファレイアを見下ろした。

「そりゃいいな」

「でしょ？ でしょ？ ねえピアさま、でね……」

「だけど残念なことに、俺にはもう心に決めたお姫様がいるんだ」

これにはファレイアだけでなく、アルカナもミコウも目を丸くした。ピアキイはにやりと笑うと、ファレイアを引っ張りながらしてアルカ

ナを抱き上げた。突然視界がぐるりと回って、アルカナは思わずピアキイの首にしがみつく。端正な顔が眼前に広がって、アルカナはぎくりとした。

ピアキイは白々しくも満面の笑みを浮かべた。

「フイー、俺はこの下僕と一緒にベッドに行くから、その女官とおとなしく遊んでろよ。寝室の扉を開けたらオシオキするからな」

「ちょ、ちょ、ピアキイ様！？」

問答無用でアルカナを連れて寝室へ去つていいくピアキイと、呆然としてその場に立ち竦むファレイアの図を一步下がつたところで見守っていたミュウは、ひとつため息をついた。

「…とんだ三角関係もあつたものね」

とにかくも、一拍あとにまた泣き出すであるつファレイアをびりしだものか。貧乏くじを引かされたミュウは心の中で号泣した。

act・8 ライバルは三歳児（後書き）

三歳児がどの程度の言語能力を持つのか調査していないので、ファレイアの語彙が達者すぎるかもしません。あくまで物語としてお楽しみくださいれば幸いです。

act・9 気まぐれなかの人

アルカナとファレイアの関係は最悪だつた。

日常は流れていった。あつという間にアルカナが輿入れしてから二ヶ月ほどが経ち、ようやくとアルカナはアナティライスト神殿での生活に慣れつつあった。ミュウと年配の女官以外からは相変わらず嫌われているようだが、不便の無いようにミュウが随分と気を使ってくれているのか、アルカナはさしたる不満もなく暮らしていた。時折ふらりと現れるピアキイに対応することを除けば、アルカナの仕事はもっぱらファレイアの子守くらいで、あとは至極平和な日々だ。

しかし、困ったことに、肝心のファレイアとは険悪な仲なのが、アルカナの目下の悩みだつた。初対面が「アレ」だったことも原因のひとつであるうが、ファレイアはいかにピアキイに冷たくされようとも嫌いになる気は毛頭ないようだつた。まったく健気な話である。

しかもファレイアは、三歳児にして随分と策士であつた。時折意図的に迷子になつたり、人前でかんしゃくを起こしたりと、外でアルカナを困らせることで、女官ばかりでなく神官たちの間でも、アルカナの評判は底辺だつた。子供の世話ひとつできないのね、先日声高な陰口を聞いてしまつてから、アルカナの気分は落ち込んでいた。アルカナの味方の前では下手に動かないのも、ファレイアの理知たる所以である。

活けられた青い花を見てアルカナはまたひとつ溜息を漏らす。今日もかの人は仕事だ。もともと自分が愛されているはずもないが、最近は夜になれば部屋に戻つてきたし、そのほかにもなにかにかけてピアキイはアルカナを構つていた。妻というよりも、それは新しいおもちゃを使つたがるような態度だつたけれど、それでも、婚前

に彼が毎日別の女性と逢瀬を交わしていたことを思えば、アルカナは随分と長いことピアキイの興味をひいている。ちなみに、アルカナは自分からピアキイに擦り寄ることなど一度もないことは明言しておく。

「アルカナあ

今日も高飛車なファレイアの声に、アルカナは寂しげな瞳を隠して笑顔で振り返った。どんなにこの子供が姑息でも、自分の仕事は彼女の世話である。きちんと職務をまつとうしなければ、それこそ「子供の世話ひとつできない」女になってしまつから。

「なんですか、ファレイア様？」

「フリー、ケーキたべたい！」

「ケーキ？」

少なくとも部屋にいるときは、ファレイアは比較的おとなしかった。時々こうしてわがままを言つもの、遊具を与えれば一人でも遊んでいられるし、物語を読んでやれば昼寝もする。別段彼女は聞き分けの悪い子供というわけでもないのだ。

時計を見ると、もうすぐお茶の時間だつた。アルカナはミユウに目配せしてお茶の準備を頼むと、ファレイアに笑いかけた。

「厨房にケーキがあるかは分かりませんが、いい頃合ですから、お茶にしましようか。さあ、手を洗つて席につきましょうね」

優しく言つてやれば、ファレイアは素直に手を洗うために洗面台へと向かつていつた。アルカナがファレイアが遊具で散らかしたテーブルの上を片付けていると、壁際から声が聞こえてきた。

『アルカナ？』

「ピアキイ様ですか？」

棚に置いた伝達用の椀を取り上げてアルカナは返した。彼が部屋に連絡を入れてくるとは珍しい。

最近薄々と分かつてきたのだが、ピアキイは誠実でもないしむしろ非道な男ではあるけれど、妙なところで常識的だった。残業も用

事（おそらく女性との逢瀬も含まれる）もなければ必ず帰つてくるし、仕事はまじめにこなしているらしいし。同じアナティライスト出身なのに、大幅に価値観の違う男を相手にしているような気分だった。王族というものは誰もこんなものなのだろうか。

彼の好き嫌いも大体わかつてきた。ピアキイは野菜が嫌いらしく、人の目を盗んでよくアルカナの皿に勝手に移してきた。寝相が少し悪くて、布団を蹴つては寒がつてあるかなに抱きついてくる。そう、寒がりで、よく袖のすそを指先まで引っ張り上げて、何枚も服を重ねて着込んでいることも知つた。その姿だけを取り上げれば、ちょっと子供っぽいけれど、普通の青年である。女遊びが激しくて、あの暴力的で冷酷な一面さえなれば。

だからだろうか。この一ヶ月、ピアキイへの恐ろしさはすっかりなりを潜めていた。彼のミュウへの仕打ちを忘れたわけではない。愛されているだなんてうぬぼれてもいいない。けれど、思つていたよりも幸福な結婚生活を送れるんじやないかと思ひはじめていた。だからここ最近、破天荒な彼の挙動に驚くことはあるものの、ピアキイと話すときもそつ緊張せずに済んでいたし、彼の美しい顔もまともに見られるようになつた。今も、彼からの突然の連絡におやと思ひはしたもの、それほど動じることもなかつたのだ。

「珍しいですね。何かありましたか？」

『書類、ない？ベッドの脇に置き忘れた気がするんだけど』

「書類？」

椀を片手に寝室に入ると、本當だ、ベッド脇の小机の上に、ひと束の書類とペンがおきっぱなしになつっていた。そういえば昨夜、ベッドに寝そべつてひたすら書類作りに励んでいたつけ。アルカナは丁寧な字で仕上げられた書類を取り上げて、椀に向かつて言った。

「ありましたよ。ペンもお忘れのようですけど

『ああ、それ、執務室まで届けに来て』

「はい。あ、でも、ファレイア様をお昼寝させるまでは、お待ちい

ただきたいんですが

『 フィーなんて放つておけばいいのに』
平気でそんなことを口にするピアキイは、言つが早いか一方的に連絡を切つた。通信の途切れるブツツという音が無機質に響く。ちょうどその時、ミコウが部屋に戻ってきた。手にしたトレイには、ティーセットと、綺麗にデコレーションがなされたケーキが載つている。アルカナはほつと安堵の息をついた。

「ミコウさん、私ちょっと出なければならんんですけど、ファレニア様をお任せしてもよろしいでしょうか？」

ミコウは渋い顔をした。この一ヶ月、これでいて過保護なミコウは、アルカナが部屋を出るときには必ずお供についていた。この神殿はアルカナの家でもあるのだし、神殿の警備は万全なのだから、本来アルカナは自由にその辺りをぶらついてもいいはずだった。しかし、お忘れなきよう、アルカナは若い女官たちから嫌われている。ミコウが目を光らせていなければ、どこで陰湿な女性たちの苛めに遭うか分かつたものではない。

明らかに不服そうなミコウの顔を見て、アルカナは苦笑する。

「大丈夫ですよ。閣下の執務室にお邪魔して、書類をお届けしてくるだけですから。すぐに戻ってきます」

「それなら私が」

「ミコウさんはここにいてください」

アルカナはきつぱりと言つた。ピアキイの過去の暴挙を思い出し、もう完璧に癒えた傷が痛むのかミコウは咄嗟にこめかみの辺りをさすつた。

「でも……」

「女官の方々だつて、いくらなんでも私なんかに何かするほどお暇でもないでしよう？ 何かあつたらすぐに帰つてきます。ね？ ファレニア様にはうまく言つておいてください。私がピアキイ様のところに行つたなんて知れたら、また拗ねてしまわれますから」

ミコウが何も反論できなくなつたところで、アルカナは書類とペンを抱えて部屋を飛び出した。なんだかんだ言つても、一人で神殿を歩くというのも楽しみだつたのだ。アルカナは少しわくわくした。うまくいけば、見れないだろうと期待もしていなかつた。ピアキイの仕事風景もちらりと見えるかもしない。随分有能だという噂は聞くけれど、あのピアキイが、まじめな顔をしてみかん色の視線を書類に滑らせるところなんて、さぞかし格好いいに違いない。

すっかり浮かれていたおかげで、アルカナはしばらく、これ見よがしにチラチラとアルカナをうかがつている二人組の女官に気づいていなかつた。彼女らのすぐそばまで来たところで、二人が底知れぬ笑みを浮かべているのが目に入つた。なんだか嫌な感じだ。アルカナはせっかく浮き立つた気持ちが、みるみるうちにしほんでいくのを感じた。

「…ホラ、あれよ。ピアキイ閣下のところに来た恥知らず」

「アンノ様のご息女のお世話をしてるんですつて。保護者気取りだつて。ファレイア様もおかわいそつ」

アルカナは表情を曇らせた。恥知らず。じゃあどうすればよかつたのだろう。親の出世をふいにしても、結婚を断ればよかつたとでもいうのか? ファレイアはかわいそうなのか? 私は、彼女を不幸にしているのか? ただお世話しているだけだし、最近ようやつと打ち解けてきたところだというのに… 完全に立ち止まつていたアルカナの腕から書類が滑り落ちそうになつて、はつと我に返つた。

いけない。こうしてピアキイの元に嫁入りしてきた以上、自分は毅然としていなければ。身分が低いのは仕方が無い。そういう家に生まれてしまつて、なぜだかピアキイの目に我が家が留まつてしまつて。けれどいいじやないか。これまでそれなりに幸せな人生だつたし、ミコウという味方もいる。アンノもなにかにつけて気遣つてくれる。ピアキイは我慢だが、悪いばかりの人でもないと思えてきた。いいことだつてある。大丈夫、大丈夫、大丈夫…

けれど、彼女らの脇を通り過ぎると、アルカナにもはつきりと聞こえる声音で言われたことばは、何度もアルカナの中で反響して止まらなかつた。

「でもほら、ピアキイ様つてウチの…あの子が本命だつて話じゃない？あの人なんてどうせ、本命を守るための隠れ蓑でしかないわよ」「え…？」

思わず振り返つたところで、頭になにか吊きつけられた。一瞬あとでバシャリという音と、冷たい感触が頭のてっぺんから足元まで広がつた。ぽたり、前髪から水滴が滴つて、ようやくどこか上階から水をぶつかけられたのだと理解した。

アルカナはぽかんとしたが、くすくすと笑う女官たちの笑い声を聞いて、すぐにはつと我に返つて胸元に手をやつた。抱き込んだ書類が、ぐっしょりと水を吸つて濡れている。アルカナは真つ青になつた。

「しょ、書類が…」

夜遅くまでピアキイが頑張つて仕上げた書類なのに…アルカナは絶望的な気持ちで書類を見た。インクがじんわりと滲んで、ところどころ文字が読めなくなつていて。どうしよう…自分が濡れ鼠だとうことも忘れてアルカナは狼狽した。ピアキイになんと言つたらいいのだ。

女官達が嫌な笑いを浮かべているのを見たが、アルカナと目が合つた瞬間、とんでもなく汚いものを見るような顔をして彼女らは笑みを引っ込めた。吹き抜けになつている上階の窓を見上げると、あるひとつ窓が開いているものの、そこに誰かがいるかは確認できなかつた。犯人はもう逃げているだろう。けれどそれを誰かに告げ口したからといって何になる。とにかくすぐにピアキイに伝えなければ…

目頭が熱くなるのをこらえながら上げていた頭を下げるとき、目の

前に影が落ちた。あつと思う間もなく腕を取られた。水浸しの書類が廊下の床に落ちた。高級そうな万年筆がかしゃりと音を立てた。

「お前つてばかだね」

なんだか面白がるような口調で、彼は笑った。

「つぐづく、見ていて飽きない」

「ぴ、ピアキイ様！」

ピアキイはいつも嘲るような笑みではなく、ただただ微笑んで、彼はアルカナの頬に空いた手を滑らせた。ふわりと暖かい風が吹いたかと思うと、アルカナの服はすでに乾いていた。目を瞬いているアルカナから視線を外した彼は、足元の水溜りに沈んだ書類を拾い上げる。アルカナは血の気が引いた。

「もつ、申し訳ございません！」

「なにが」

「書類を…」

「ああ、これ。こんなのすぐに直るよ」

言つが早いが、ピアキイが何事か唱えると、書類はぱらりと乾いて、文字もはつきりと元の通りに綴られていた。アルカナが目を丸くしていることを意に介しもしないで、ピアキイはアルカナの腕を引っ張つて歩き出した。

「ああ、そうだ」

不意に立ち止まつたピアキイが振り返つたが、彼の視線はアルカナではなくその背後の女官達に向けられていた。

「俺のアルカナに手を出したヤツに伝えておけよ。誰か分かり次第殺してやるから楽しみに待つてろつてさ」

女官達が息を呑むのが聞こえた。アルカナはぞつとした。

「な、何を仰つてるんですか！」

「何つて言葉の通り」

「やめてください！またそんなことを言つたら誤解されるじゃないですか」

「誤解つて？」

「そりゃあ

『俺の』だなんて言つたら、まるでピアキイがアルカナを愛しているようではないか。それだけは違うとアルカナは断言できた。僻みでも卑屈でもなく、ピアキイは確かにアルカナになぜだか執着しているようだが、それは間違つても恋愛感情ではない。どうせ彼にとつてアルカナなど、しばらく遊べそうな玩具に過ぎないのだろう。いつぞやか「使い捨てじやないんだから」とか言つていた。それで彼が飽きてしまえば、アルカナの存在など簡単に切り捨てられてしまうのだろう。一回きりじやない、ただそれだけなのに。

けれどそれを自分の口から出すのはひどく恥ずかしくて、アルカナは唇を引き結んで黙りこくつた。彼は何を思つたか、ふと息を漏らすと、アルカナを自分の執務室まで引っ張つていった。初めて入るピアキイの仕事場。けれど部屋を出たときの高揚した気持ちはもはや鳴りを潜めていた。部屋まできてようやくアルカナから手を離して、テーブルに書類を投げたピアキイは、上質の絨毯をじっと見つめているアルカナをちらりと見て、平坦に言つた。

「座れば

「いえ、帰ります。部屋にファレイア様やミコウさんを置いてきているので」

びりりと空気が尖つた。部屋から出ようと開けた扉を、大股でやつてきたピアキイに塞がれた。何故かむつとした表情の彼は、素早く部屋の鍵をかけてしまつと、アルカナを無理矢理ソファに座らせた。

「…お前のそれ、癖？」

ピアキイが小机に置かれたティーセットを取り出しながら言つた。呆れたような声だ。着々とお茶の準備をしていくピアキイの手元を眺めながら、アルカナは答えた。

「それ、つて？」

「敬語とか、その無駄に遠慮深い性格とか」

「無駄つてほびじやないと思ひます」

アルカナは顔をしかめた。

「ただ、この神殿には、私よりも高い位の方が多いから」

「ハア？ 何言つてんのお前」

アルカナの前に茶を出して、隣に腰掛けながら彼は自分用のマグカップで茶を飲み始めた。猫舌な彼はすぐに「熱ツ」「とつぶやいて、すぐにテーブルにカップを戻す。

「お前、どこの家に嫁いできたと思つてんの？」この神殿でお前より偉いヤツなんて、俺と伯父上くらいしかいないよ」

「それは… そうかもしれないけど、でも私は、貴族の中でも最下級で」

「ふうん？」

ピアキイは納得がいかないようだつた。アルカナがうかがうよつて彼を見ると、ピアキイはお茶に息を吹きかけて冷ましているところだった。

「うちの母親はそんなこと言つたことなかつたな」

「閣下の、お母様？」

「そ。自分は王弟に見初められたんだから、この神殿で相応の扱いをうけてしかるべきだつてね。さんざ我慢放題したから、しまいにはエフアインに潰されたけど」

アルカナは背筋がぞわりとした。ピアキイは母に対してなんの感慨も抱いていないようである。それから、彼はやんわりと笑つた。先ほどと同じ、毒氣のない笑みだ。

「まあ、そういうとこがアルカナの美德つてやつなのかもな」

アルカナはいつの間にか、ふわふわした心地でそれを聞いていた。ただ分かつたのは、自分の体は存外冷え切つていて、彼の淹れるあたたかなお茶はとてもおいしいということだけだつた。

act・10 「わざなし

ピアキイ・ケルト・エファインはいかなる人物か。

まず彼は絶世の美青年である。本人がどれだけそれを自覚しているかはさておき、彼が歩くだけで老若男女問わず皆が振り返るような美貌を持っている。一方でその性格は冷淡。一緒に過ごすうちに、彼が案外気の長い性格らしいとは思い始めたが、いかんせん彼には「常識」というやつが欠如していた。：主に、暴力の方面で。

彼は「むやみに暴力をふるってはならぬ」という教えを受けたことがないらしい。以前アルカナが病み上がりで外に出たときの怒りようといったら、否、そもそもあれは怒っていたのだろうか？ ミュウを何べんも踏みつけた様子は非常に涼やかだった。

さらに、彼は平氣で人を傷つけるような物言いをする。アルカナは薄々気づいてきた。彼が人を蔑むとき、そこに深い意味はない。彼の辞書に「遠慮」や「気遣い」といった言葉はないらしく、彼にとっては世間話をするのと同等の調子で侮蔑のことばを吐くのだ。要するに彼に「デリカシー」というやつはかけらもない。

そんなわけで、彼の妻であるアルカナ・ハイネントはかく語る。ピアキイはどうしようもない子供だと。

だから最近はアルカナも肩の力を抜いて、ピアキイに言いたいことを言うようになっていた。婚前に姉から「アルカナ。夫に何もかも委ねては駄目よ。夫婦というものは常に女が上位に立っているほうがうまくいくの」と助言をもらい、あの閣下相手になんと恐れ多いと思っていたが、案外ピアキイはアルカナが何を言ったところで怒り狂つたりはしなかった。

「ピアキイ様、野菜もちゃんと食べなきやダメですよ」

「…野菜嫌い」

口を尖らせてピアキイが反論した。彼の偏食にも困ったものだ。また勝手にピアキイはアルカナの皿に朱色の野菜を移してくる。アルカナは溜息をついてそれに手をつけようとすると、我が夫はにやりと口端を上げた。

「アルカナが手ずから食べさせてくれるっていうならありがたくないただくけど」

アルカナは真っ赤になつて絶句した。給仕をするミコウが「夫婦漫才はよそでやつてくれ」とつぶやいた氣がする。すかさず彼女を見るが、ミコウはしひつとしたまま脇に立つて、ピアキイがくすりと笑う。

最近彼の笑みが柔らかくなつたのは気のせいだろうか。せめて嵐の前の静けさでなければいいのだが。アルカナは自分の横で黙々と料理を頬張るファレイアの口をナップキンで拭いてやりながら一人ごちた。最近はファレイアもアルカナに懐いてきて、何かにつけてアルカナの後をひつついでくる。時々ピアキイが絡むと、アルカナを出し抜いてやろうと息巻いているが、それも子供と思えばかわいいものだ。彼女にとつてアルカナは、ライバルのようなものらしい。皆この関係に慣れてきたということかしら、ピアキイを盗み見る。さすが王族というべきか、彼の食事の手は洗練されていた。物音一つたてずに料理を口に放り込んでいく。いつの間にかまじまじと見てしまつたらしい。アルカナの視線に気づいて、口をモゴモゴさせながら「何?」と尋ねてきた。アルカナは慌てて自分の皿を見下ろした。

「い、いえ」

「ふうん?」

きつと女性に見つめられるなんて、彼にとつては日常のことなのだろう。さして深く問うてくることもなく、ふわりと皿を泳がせただけでピアキイは食事に戻つた。アルカナは恥ずかしくなつた。

ピアキイは食事を済ませるとすぐに席を立つてコートを取った。

「お出かけですか？」アルカナはコートを着る手助けをしながら声をかけた。

「仕事が残つてゐる

「まあ…お気をつけ

忙しい身だというのに、わざわざ夕食のために部屋まで戻つてきてくれる、その優しさが嬉しい。思わず勘違いしてしまいそうになる。別に、彼はアルカナのことなんてなんとも思っていないのだろうけれど。

自分で考えておきながらチクリと胸を痛めていると、部屋から出て行こうとしたピアキイが不意にアルカナの後頭部に手を回してきた。何事かと顔を上げたところで、アルカナは硬直した。

触れるだけのキスは一瞬だけで離れていった。目を丸くして、ぽかんと呆けるアルカナに、ピアキイはにっこり笑つて出て行った。いたずらが成功した少年のような顔だ。

扉が完全に閉まつてから、アルカナは立ち尽くしたままつぶやいた。

「…やだ、どうしましょウニユウさん。私、今『愛されてる』なんて思っちゃいました

「惚氣はいいから残さず食べなさい」

アンノはいつも終業の時刻になるとアルカナの部屋にやってくる。娘にべろべろに甘いアンノは、とてとてと父の腕めがけて駆けてくる娘にうつとり笑つていて。アルカナは苦笑して、ピアキイ様も子供ができたらああなるものかしらと考えた。想像するだけで寒気がする。そもそも、彼のファレイアへの対応を見ている限り、彼は子供が嫌いなようだ。

「いやア、いつもすいませんねエ、アルカナ嬢」

頬の筋肉を極限まで緩ませたアンノが言う。アルカナはにつこり笑つた。

「お気になさらないでください。私こそたいしたお構いも出来ませんで」

「いやいや！ 随分助かつてますよ。今度是非ウチにも遊びに来てください。女房が閣下の嫁を見たいってうるさくつて」

「奥様のお加減は、その後いかがですか？」

「最近は随分よくなつたモンですよ。相変わらず寝たきりですけどね。ここ最近、フィーがアルカナ嬢のことばっかり話すもんだから、神殿まで会いに行きたいと言い出す始末で」

「まあ」

アルカナはくすくす笑つた。アンノの話し振りからいつて、具合がいいのは本当だろ。

アンノの奥方は、以前はそれはそれは鬼のように強いファナティライスト兵の一人だつたそうだが、一年前に大病を患つて、屋敷で絶対安静の生活が続いているらしい。ファレイアはあまり母の話題を出してこないが、アンノの話を聞く限りでは、家では母にべつたりだそうだ。

「あの閣下も、小さい頃は女房に懐いていたんですよ」

「そういえばピアキイ様は、アズラーノ様の家でお育ちになつていただんですね」

どんな方だったんですか？ 世間話のつもりで話を振ると、なぜだかアンノはふらりと視線をさまよわせた。突然まじめな顔をして、腕に抱いたファレイアをおろして、アルカナを手招きした。

「アルカナ嬢、ちょっと」

「…？」

ファレイアを頼むとミコウに目配せして、廊下に出たアルカナは、ついてきたアンノを見上げた。彼は少しバツが悪そうな表情だ。

「アルカナ嬢にはもつと早くに言うべきだと思つていたんだが…」

「なんですか？」どうにも不穏な予感がした。

「アルカナ嬢、閣下の家…エフAIN家について、どのくらいござ存知ですか？」

「ピアキイ様の家？」

そういえば聞いたことがない。そもそもピアキイは自分のことをあまり話したがらない。結婚生活の間に、彼の好みや性格については大体把握してきたが、それだけ彼の行動を見てアルカナが勝手に判断していることだ。

怪訝そうなアルカナに、答えを聞くまでもなくわかつたらしいアンノは、一旦人通りのないことを確認してから口火を切つた。

「本来は、閣下があなたに言つべきことだが…多分あいつは言わないだろうから、俺から言わせてもらいたい」

「一体なんなのですか？」

「彼の家は、アーチー少し特殊でね。俺達とは…そう、人種が違うとでもいうのか」

「それは、単純に彼がファナティライストの王族に連なる生まれだ、というのとは、また、違うお話しのようですけど」

「完全に無関係とは言いづらいですけどね」

アンノは肩をすくめた。それから身を乗り出して、声を潜めて言つ。

「落ち着いて聞いてくださいよ？閣下は、不老不死なんです」

はあ？思わず間の抜けた声が出た。アンノの表情があまりにも真剣だったから、アルカナもじつと身構えていたが、まさかそんな下らない話が飛び出すとは思わなかつた。そういえばアンノは、高等祭司の大貴族という身分にしては気さくで冗談好きな男だし、あんまりアルカナが不安そうな顔をしているから、気遣ってくれたのかもしれない。アルカナは噴出した。

「うふふ、いやですわ、アズラーノ様。何を言い出すかと思えば。

まあ確かに、ピアキイ様は人間離れして美しいお方ですけど

「おや、信じては下さらないのでですか」

「少し前までだつたら、信じたかもしませんわ。でも今は、ピアキイ様の人となりも大体分かってきましたもの。ニンジン嫌いで寝相が悪くてわがままで。ふふつ、あの人、が不老不死なんて、そんな、まさか…」

アルカナはだんだん不安になってきた。アンノは黙りこくつたまま、その場に立ち尽くしたまま。其の目はじつとアルカナの一挙一動を見逃すまいとしている。彼は何も言わない。アルカナは頬の筋肉が奇妙に引きつるのを感じた。

「…え、そんな、まさか、ですよね」

「ところが、アルカナ嬢。残念ながら嘘でも冗談でもないんですよ、これが」

そういうわれても。アルカナは戸惑つて、アンノから視線を逸らした。不老不死。そういえば先日、ミュウが突然その話を出してきた。彼女が、ピアキイの家名が、不老不死の神話にあるものと同じだと氣にしていたように思う。不老不死？まさか。そんなの御伽噺だ。仮にそんなものがいたとして、アルカナのイメージでは仙人のような姿だと思っていた。間違つたつて、ピアキイののような暴君など想像できない。アルカナは乾いた笑いを浮かべた。

「ハ、ハ…アズラーノ様、だつて、そんなおどぎばなしめたいなこと…」

「御伽噺なら、よかつたんですけどねエ」

アンノは憂えるように頭をかいた。それから、不意に夜になつても美しい庭園を見て、アンノは尋ねた。

「アルカナ嬢、シェーロラスディ陛下つて、何歳に見えます？」

よりもよつてこのタイミングで、あまり追究したくなかった話を出されるとは思つても見なかつた。この話を出されれば、納得せざるをえないのは目に見えていた。しかし、アンノの厳しい声音か

ら逃げることもかなわず、アルカナは観念した。

「……多く見積もつても、せいぜい三十に満たない、といつあたりですね」

「ということは、アルカナ嬢も勘付いたところはあった、といつわけだ」

アルカナの記憶違いでなければ、ショーロラスティ陛下は今年で御年51歳である。しかし、あの男はどう考へても三十代にすら見えない。ピアキイだつて、二十歳を超えているにしては童顔だが、世界王陛下に関しては若作りにしても次元が違う。彼の若々しさは異常だ。それでも、不老不死といわれるよりは、まだ劇的な若作りなのだと言われたほうが納得できる。アルカナは頬に手を当てため息をついた。

「私、てっきり陛下は魔術でお姿をとつておられるのかと… アズラーノ様のお話でなければ、笑い飛ばすしかありませんけど」

「対外的にはそういうことになつてます。不老不死なんて言られて妙な輩に襲われちゃあ大変だ。といつても、そつやすやすとは死ねないんですけど」

「…不老不死ということは、やっぱり…不老不死なんです、よね」上手い言葉が見つからずにアルカナは途方に暮れた。老いない、死なない。意味がよくわからなかつた。本当に、そんなことがありえるのか？彼の言葉を信じたいと思うものの、あまりに突拍子すぎて頷くしかできなかつた。実際に田の当たりにしなければ、きっと一生理解できないだろう。

アルカナの戸惑いを悟つたのだろう。アンノは無理することはないとばかりに微笑んだ。

「まあ、信じられなくても無理はありません。とりあえずそういうことにして、話を進めてもいいですか？」

「はあ」

まだ妙な話が続くのか、アルカナの目がチカチカした。

「不老不死一族というのはね、どこかオカシイ。人間の常識が通用しないといいますか、妙に『人を傷つける』ということに躊躇がない。なまじ自分達が死なないだけに、痛みや死に対する恐怖が薄いというわけで」

「ああ、それは」

確かに、ピアキイにはそんなところがある。ミュウに対する仕打ちもそうだし、すぐに「殺す」だと物騒な台詞を吐く。アルカナは合点がいって頷いた。「不老不死」云々に関してはまだとても信じがたいが。

「本来は、閣下のような片親がフツーの人間のときは、ある程度まともな神経が備わるモンなんんですけどねエ。あの母親…レイン様は、そこそこ全く興味がないというか」

「レイン様というのは、ピアキイ様のお母様、ですよね」

王弟殿下と結婚した平民の女。確か王弟と仲違いして離縁し、奥方のほうはじきに病死したという話だ。王弟殿下は外交などで世界中飛び回り、ファナティライストにはほとんど帰つてこないとか。そして、ピアキイはアズラーノ家に引き取られたと聞いている。先日のピアキイの話では、母になんら感慨もない様子だったから、ひょつとすると親子関係のほうも芳しくなかつたのかもしれない。

「最初はね、レイン様も、王弟殿下…ケルト殿下もよかつたんですよ。見るも仲睦まじいご夫婦で、エファイン本家は平民の女だとこそつて反対したそうですが、ケルト殿下の溺愛ようときたらそりやあ直視しがたいほどで。…ピアキイ閣下が生まれるまではね」

「どういうことですか？」

「エファイン家に限らず、不老不死一族は容姿もまた珍しくてね。エファインは緑の髪と瞳つて特徴があるんですよ。レイン様もずいぶんご期待されてました。不老不死の子供を産めるだなんて栄誉なことだつて」

アルカナは眉をひそめた。ピアキイはまばゆい金髪にみかん色の瞳。ショーロラスティ陛下のような縁はかけらも混ざっていない。それに、アンノの言い方にはどこか違和感を覚えた。

「ま、結果はご存知の通りです。ピアキイ閣下がケルト殿下にまるで似てないことで、レイン様の本性が出でやつたんですねエ」

「本性、というと？」

「レイン様は確かにケルト殿下を愛していらっしゃったんですが、あの人があ愛したのはどちらかというと殿下の身分だった。不老不死で王弟である殿下を手に入れて悦に入つてたんですよ。エファインの御子を産めば、自分もエファイン家の者として認められると思つたんでしよう」

「…ピアキイ様は、お母君が、神殿で我慢放題だつたと」

「息子にそう言われちやあ世話ありませんねエ！エエ、エエ。の方は美人だつたし、そこらの貴族なんかよりずっと気位が高かつた。思い返してみれば、私も随分こき使われたものだ」

アルカナはアンノの口調に瞠目した。彼がこんな風に、誰かを軽蔑するさまを見るのは初めてだ。そもそも、彼の険しい表情 자체が見慣れない。

「しかもあの女は、どうにかして自分も不老不死にしてくれないかとケルト殿下にねだつたのですよ。フン、まったくばかばかしい！ケルト殿下がレイン様と種族が違うことに心底悩んでいたというのに、面の皮の厚い女だ」

「そ、それで、王弟殿下はどうなさつたのですか？」

「もちろんレイン様に見切りをつけましたよ。当然の話だ。けれどその後がまずかった。ピアキイ閣下は母親似で、ケルト殿下はどうしたつて閣下も愛すことができなかつた

「そんなん！」

アルカナは愕然とした。

「だつて、ピアキイ様は何も悪くないじゃないですか！」

「まあね。でも、気持ちはどうにもならない。だから私が閣下を引

き取つたんですよ。あの方が八歳の頃かな。あの横暴な性格は矯正できませんでしたが

アルカナは黙り込んだ。自分は両親に愛されて育つたし、姉とも仲が良かつたから、当時のピアキイの思いを推し量ることはできない。でもきっと、あの閣下は堂々と生きていたのだろう。彼の縮こまつた様子など、アルカナには想像が付かなかつた。母にも父にも愛されない中で、しゃんと背筋をのばして神殿の廊下を歩いているさまが浮かんで、アルカナの胸が軋んだ。

「ますますわからなくなりました」

「なにが？」

「どうして、ピアキイ様は私なんかを妻にしたんでしょうか」

アルカナだつて半分平民のよくなものだ。アルカナも彼の母のようになる可能性を、ピアキイは考えなかつたのだろうか。

するとアンノは視線を泳がせた。

「アーチ…多分聞かないほうがいいとおもいますよ？」

「ピアキイ様が私に恋愛感情を抱いて結婚したわけじゃないことくらいは分かつてます」

むつり返したアルカナに、アンノは目を見開いた。

「いや、そういう意味ではなく。私もどうしてアルカナ嬢なのかは知りませんがね。体外的な理由では、不老不死について何も知らず、権力に興味がなく、閣下のほうが婿入りする必要のない女がいいとか」

「そういえば、似たような話は顔合わせのときに聞きましたけど」

「閣下はシェロ様の腹心の部下ですし、あの顔ですから、お嬢さん方からも良家からも憧れの的です。一方で閣下は、母親のこともあって自分に媚売る女はとにかく嫌い。というわけで、下級貴族っていうのは最初から候補にあつたんですよ。そこでアルカナ嬢を選んだのは閣下の裁量なので私に理由はわかりませんが」

アンノはなにやらニヤニヤしている。アルカナは、ピアキイが不死老だといわれた時以上に、彼の言葉が信用ならなかつた。ピアキイが「自分に媚売る女は嫌い」だつて？そんな馬鹿な。最近はすつかりなりを潜めているが、アルカナはピアキイが女遊びの激しい人間だということを忘れたわけではなかつた。今だつて、仕事と言つておいて他の女とよろしくやつているのかも。今日の花も白くなかつた。ピアキイは嘘をつく男ではないが、かといって誠実な男だとはこれっぽつとも信じていなかつた。

まるで愉快な反応もないアルカナに、打てば響くと期待していたらしいアンノは興が殺がれたようだ。ひとつ溜息をつく。

「とにかくも、アルカナ嬢には閣下のことを知つておいてほしかつたんでね。女官たちにあることないこと吹き込まれちゃ閣下がかわいそそうだ」

「ピアキイ様がそんな瑣末を気にするとも思えませんけど」「いやいや

アンノがにっこりして言つた台詞に、アルカナはこれから先、アンノの言はあまり真に受けないようじようと心に決めた。

「だつて、アルカナ嬢は閣下の愛する奥様ですから」

act・10　「わがまなし」（後書き）

もともと不老不死の血は強いので、順当にいけば閣下は緑の髪に瞳になるはずなんですが、ピア様は突然変異で母親の色を受け継いでいます。そのうちレイン嬢の話もどっかで書きたい。

act・11　かみさまの死んだ日

リビングの花瓶に白い花が差されるたびに、アルカナは少しばかりおしゃれをするのが常だつた。なんだかんだ言つてもアルカナはピアキイに恋していだし、好きな人が自分を見てくれるとわかれば着飾りたくなるのが当然というもの。それが彼の気まぐれでしかないのには、アルカナも落ち込むしかないが。

白いレース地のワンピースに、厚手の黒いカーディガンを合わせて、髪には細いリボンを通す。いつもながら女官顔負けの手さばきを、ミユウは手伝いながらまじまじと見つめていた。

「アンタ、どうして神殿にお仕えしようとか思わなかつたの？」

「私もいいかなつて思つたんですけど、姉に止められたんです。神殿なんて、女達が少しでもいい男に見初められようと互いを化かしあつてる悪の巣窟よつて」

「……まあ、否定はしないわ」

アルカナはよく知らないが、きっと女官達のアルカナに対する態度を見ている限りでは、その「いい男」とやらはまさにアルカナの夫であるピアキイ・ケルト・エファインその人なのだろう。アルカナはぼんやりと考えた。

今日は「鎮魂日」。双子神が死んだとされる日だ。この日はファンティライスト神殿でも休日となり、国民はみな双子神の死を悼む。当然アンノも休みなのでファレイアは部屋に来ない。ここ最近おてんばなファレイアは、すぐにアルカナを庭へと引っ張り出して服を汚すので、せつかくピアキイが用意してくれた白い衣装たちも着る機会を失つていたのだが、今日ばかりはいいだろう。黒いショートブーツに足を通したところで、前触れもなく部屋の扉が開いた。

「アルカナ」

「きやあ！お、驚かさないで下さい！」

アルカナが片足を上げたままよろめくと、ピアキイがその腰をキヤツチした。深緑の「コートから伸びる、彼の大きくて纖細な手のひらに今更じぎまきしながら、アルカナは」こまかすように「女性の着替え中にはノックもなしに入るなんて非常識よ」とモゴモゴ言つた。ピアキイは気にせずアルカナから離れて言つた。

「今日はエファインの本家に行くから」

「え？ ご本家って」

思わず振り返つて、アルカナはドキリとした。ピアキイはいつもの神官服ではなく、私服に身を包んでいたのだ。真っ白なカツターシヤツには細い深緑のリボンがかかり、黒いベストには整然と小さな金ボタンが並んでいる。細いスラックスはすらりと長いピアキイの脚を魅せており、深緑のロングコートも彼にはよく似合つていた。麗しのピアキイ閣下はアルカナの衣装を上から下まで見下ろすと、リボンの結び目に取り出した淡い黄緑色の花を差した。それからミユウに、「深緑のカーディガン出して」と命令する。

「どうこうことですか？」

「エファインの色は縁だから、それにふさわしい色を身につけなきゃいけない」

「いえ、そういうことではなく」

「靴も縁がいいかな」

全く人の話を聞かないピアキイに、頭がくらくらした。一体何事だ。結婚のときですら音沙汰のなかつたエファイン家とやらに、今になつて行かなければならぬだなんて。大体、先日のアンノの言が正しければ、エファインというのは不老不死の一族で、アルカナにとつてはまるで未知の領域だつた。アルカナは靴を履き替えながら問うた。

「どうして突然？ 昨日はなにも仰つてなかつたのに」

「俺だつて好き好んで本家に行きたいわけじゃない」

ピアキイがカーディガンを着せながら言つた。苦々しい表情。どう

も彼は自分にまつわる話をするときにこいつした顔をする。

「毎年鎮魂日には集会があるんだ。俺はもうエフAINとは関わらないって言つてゐるのに、伯父上が無理矢理」

「でも、私もお招きいただいていいんですか?」

「ふてくされるピアキイ。出来れば行きたくない。アルカナは黒いコートを着せられながら尋ねた。すると、彼は出し抜けにいつもの笑みでたいそう甘く返してきた。

「俺が嫌々実家に行くのに、お前はそんな夫を見捨てるの?」

「私は巻き添えつてことですか?」

アルカナも苦い顔をした。何が悲しくて、わざわざ行く必要もない不老不死の居城に行かねばならないのか。しかし夫の命令である。母の教えでは、こういうとき、妻はおとなしく夫の言つことを聞く必要があった。アルカナはまじまじとピアキイを見た。

しかし、このピアキイの実家というのに興味はある。なにせ、彼の母君が狂氣的に求めた存在だ。そのエフAIN家とやらに、一人息子を不幸にしてまで求める価値があるのか見極めたかつたし、この歩く非常識がこんなに嫌つている。自己満足ではあるが、アルカナが状況を整理するいい機会かもしれない。アンノの話はまだ半信半疑だったが、不老不死だなんて一生お目にかかるない存在だ。観光気分で行けばいいだろう。開き直つて、アルカナは向かうピアキイの曲がつたリボンを結びなおした。

大体、この一族は「不老不死」という存在をどれだけ隠す氣があるのだろう。アルカナは揺れる馬車の中で身を縮こまらせながら思つた。向かいに座つて優雅に脚を組んだ我らが世界王陛下、ショーロラスティ・T・ファナティライストは、やはり縁を基調とした衣装に身を包んでいる。彼はアルカナの視線に気づくなりにっこり笑つた。

「私の顔に何がついているかい？」

「い、いえ！申し訳ございません」

すっかり恐縮してうつむくと、シェーロラスティ陛下はくすりと笑つた。隣のピアキイはアルカナの肩に頭を預けてすやすや眠りこけている。気まずい空気をなんとか打破しようと、アルカナは努めて明るい声を上げた。

「シェーロラスティ陛下は、『本家にはよくお戻りになられるのですか？』

「シェーロでいいよ。親しい人はみんなそう呼ぶしね」

さらりと無理難題を吹つかけて、シェーロラスティ陛下はについつ笑つた。

「まあね。たまにどうしても本家でやらなきやいけない会議があるときなんかは。ただ、いちいち大陸に渡るのは面倒だから、必要がなければ寄らない」

この世界は、ドーナツ型をした大陸の中央に内海があり、内海の中央に島がぽつんと存在する。ファンティライストはこの島にある街だ。エファイン本家は、大陸の北西、山脈の広がる場所にあるらしい。海を渡り、港からも程遠い場所のため、一日で行き帰りするのは不可能だ。大概是転移装置を使うらしく、今日もエファイン家行きの転移装置が設置されている小さな祠に向かつていた。神都から出したことのないアルカナは、窓から見える広大な森にも驚くばかりだった。

「まあ、ファンティライスト島には森くらいしかないが。世界中を見て回ればもっと面白いものがたくさんあるよ。東のインテレディアは平原にあるし、北のシェイルは冬になると雪が積もって一面真っ白。南のラトメには確か砂漠があつたかな？あそこで、南西の湿原は観光にはおすすめしない。暑いしね。あと西のクライディアにある遺跡群は一度見ておくといい。あれは一生の思い出に残る。まあ、そこで寝こけている彼に休暇がとれた時にも連れて行つても

らいなさい」

「ピアキイ様は旅行なんて興味ないでしようけど」
アルカナはくすりと笑った。ショーロラスディも苦笑いを浮かべて
いる。

「わがエフAIN家は山岳の中ほどにあってね。外海がよく見えて
絶景なんだ。集会のあとにでも、特に景色のいい場所を教えてあげ
よう」「う

「集会って、何をするのですか？」

ウーンとショーロラスディは唸つた。

「大概は本家の爺さん婆さんがわめいたり、どこぞのお偉方が腹の
探りあいをしたりとか。面白いものでもない。ただ、不老不死四家
が集まるし、私の知人も来るから、是非アルカナを紹介したいと思
つてね。ピアキイをせつづいたというわけだ」

アルカナは思わず單語に頭を上げた。世界王陛下はニコリと笑う。
口の動きだけで「アンノ」と言つた。チラリとピアキイをいたが、
彼は身じろぎひとつせずに眠つている。寝顔はますます童顔だった。

「私はわりとね、君を買つてるんだ」

「え？」

「引いては君の家を、かな。ハイネント家は君がピアキイの嫁にな
つてからも権力に固執しないし、話によると周囲の風当たりにもま
るで頓着していない。それに、アルカナはこのピアキイに随分気に
入られているようだしね」

「そ、そんなまさか」

アルカナは首を横に振つた。お世辞にしてもやりすぎだ。

「ただ今の生活に慣れてきただけですわ。ピアキイ様は私なんて氣
にも留めていらっしゃらないみたいですし」

「ふふ。まあ君は知らないだろうけどね。私の知る限り、ピアキイ
の”使い捨て”じゃない女性なんて君ひとりだよ」

「使い捨て、なんて」

ひどい言い草だが、婚前のピアキイの様子を知つてゐるので笑うこともできない。頬を引きつらせたアルカナに、ショーロラスディは満足そうだった。

「今日の集会では、ピアキイを小さい頃から知つてゐる者が何人もいる。まあ、妻として、夫の弱味をひとつふたつ握つておくのもいいだらう?」

転移した先は城の中のようだつた。灰色の石造りの部屋を見回していると、ピアキイがあぐびをしながらアルカナの腰に手を回した。

「伯父上、俺達は隅のほうにいるから」

「まったく、ピアキイ。君は私の護衛も兼ねていたと思うんだが」

「だつて俺よりも伯父上のほうが強いし。流石にこの場で世界王陛下を暗殺して得する奴なんていないよ」

苦く笑うショーロラスディを置いてピアキイはスタッタ歩き始めた。鎧に身を包んだ番兵が扉を開き、二人は広間へと足を踏み入れた。まばゆい光の溢れるシャンデリアの下にたくさんの人人がひしめいていた。社交パーティにもほとんど来たことのないアルカナでは、すぐには酔つてしまいそうだ。

きらびやかな人びとがこちらに注目した。やはりここでもピアキイは目立つらしい。アルカナはすぐにピアキイから離れたくなつたが、彼はますますアルカナに身を寄せてきた。

不老不死の方々は胡乱げにこちらを見ていた。ひそひそと聞こえよがしに声が飛んでくる。

「あれが世界王の懐刀の…」

「隣にいるのが」

「やだ、あの子が妻?」

「縁を身にまとうなんておこがましい」

確實に、下級貴族のアルカナにいい感情は持たれていないだろうとは思っていたが、それにしても厳しい視線だ。震えが走った。アル

カナは縮こまつた。すると、隣のピアキイがはっと嘲笑する。

「相変わらずヒトを見下すしかできない腐った連中だ」

「ピアキイ様？」

ピアキイは口端を上げた。彼は堂々と立っていた。むしろ、ひしめく不老不死などより、緑の髪も瞳も持たない自分が偉いとでも言いたげに。その佇まいに、アルカナは思わず魅入った。

アルカナの視線に気づいたピアキイは不敵に微笑んだ。

「なに？」

「……いえ」

惚れ直したなんて、絶対に言えない。アルカナはふいとそっぽを向いた。

壁際の、人のいないあたりに一人で立つて、アルカナはようやくひと心地ついた。ちょうどアルカナ達のうしろからシェーロラスディ陛下が現れたこともあり、視線の矛先はすぐに移った。ひとつ溜息について、アルカナはピアキイを見上げた。彼は人々に目もくれず、アルカナの髪についた花が曲がっているのを直している。アルカナも夫のコートに手を伸ばした。

「ピアキイ様、襟が曲がっています」

「ん」

実につまらなさそうになすがままにされているピアキイが借りてきた猫のような態度なので、アルカナはくすりと笑つた。そこで、人ごみの中から声をかけられた。

「ピアキイ」

向かつてきた男よりも、ピアキイの反応にアルカナは気を取られた。ぴんと背筋が伸びて、ぴりりと張り詰めたような空気が流れた。

彼の眠たげだつたみかん色の瞳が見開かれ、彼はゆっくりと振り返つた。アルカナはそこでようやく声の主を見て、あつと声を上げそうになつた。

緑の髪がさらりと流れた。瞳も深めの緑。けれど体格はピアキイそつくりの長身だった。顔はあまり似ていらない。ピアキイのほうが美しいと思うのは妻の欲目だらうか。彼は感情の読めない表情でピアキイだけを見ている。

ピアキイは恐れるような視線を彼に向けた。それだけ見れば、すぐには彼が何者なのか分かるというもの。ピアキイがこんなに動じている姿を、アルカナは初めて見た。あえぐようにピアキイがつぶやいた。

「父上……」

王弟殿下・ケルトは、憂えるような顔をしてわらつた。

act・11　かみさまの死んだ日（後書き）

転移装置は装置につき行き先が決まっています。力のある魔術師なんかは自分で転移呪文をつかつて自由にテレポートすることも可能ですが、大概街や不老不死の住処なんかには転移呪文での侵入を防ぐ結界が張られていて直接街に入ることができなかつたり、また大人数を運ぶことが難しいことから、呪文でテレポートする人はありません。

「結婚したそعدだな」

そう言つて、ケルトはちらりとアルカナを見た。アルカナが慌てて礼の形を取つた隣で、ピアキイはそつけなく声を上げた。不機嫌なときの声音だ…アルカナははらはらした。

「何の用」

「用がなければ声をかけてはならないか」

「まあね」

ピリピリとした空氣。アルカナは、いつピアキイの暴挙が現れてもいいように身構えた。が、しかし、不意にピアキイはつまらなさそうに息をついた。彼らしくもなく。低い声で言つ。

「結婚？したよ。お偉方がうるさいから。それがなに」

「お前は…」ケルトもうんざりとした聲音だ。「私に何も言わずに…しかも、こんな人間の小娘を」

ぎくりとした。ピアキイの顔色をそつとうかがうと、彼は氣味が悪いくらいに無表情だった。アルカナの困惑した視線に気づいて、ようやく少しばかり表情を崩す。細くて長い髪が、礼を取つたまま固まっているアルカナの髪の毛先をいじくつた。

「人間？」

ピアキイは嘲笑した。

「俺の記憶違いでなければ、我が親愛なる父上殿も、どことも知れぬ平民の女を娶つたと思つたけど」

「ああ。そして離縁した」ケルトは苛々しているようだ。

「いいか、ピアキイ。人間は姑息だ。その女も、おとなしそうな顔をしていつ仕掛けてくるか」

これが本人を目の前にして言つ台詞だろうか。アルカナは怒りを通り越して呆れ返つた。勿論アルカナに、ケルトが案じているようや野心などかけらもない。アンノから聞いた彼の経歴からすれば、ケ

ルトの女性不信も仕方のない話かもしれないが、アルカナは、もとよりこんな縁のない世界、望んで来たわけでもないのに、この言わ
れようは心外だった。むつとする感情を必死で押し込めないと、隣にいるピアキイが出しあげに噴出した。

「あはは！姑息だつてさ。アルカナ、お前、そんなに権力とか好きだつける？」

「私の父にもう少し野心があつたら、そのように育つっていたかもしれませんわ」

アルカナは慎重に答えた。とはいへ、何を言つたところでケルトは信じないだろうと分かつていた。

正直なところ、アルカナにとつてこのケルト・エファインなる人物はあまり好かない部類の男だった。いかなる理由があれ、ピアキイを、息子をないがしろにするなんて間違つている。責任感のない人間は嫌いだ。

だからケルトにどう思われようともアルカナは痛くも痒くもなかつたが、夫にその咎が回つてくるのは勘弁願いたい。出来る限り不快な気分を表に出さないように努めていたが、アルカナのともすれば挑発的な台詞が、その夫はたいそうお気に召したようだ。

「へえ。じゃあアルカナは、これから俺が失脚してスラムに身を寄せることになつたとしても、ついてきてくれるわけだ？」

「ええ。夫の行くところどこまでもお供いたします。それが妻の役目です。…せめて衣食住が揃つていたほうが、望ましいとは思いますが」

「ふうん。だそだよ、父上。良かつたね、息子が妙な女に引っかからなくて？」

「口では何とでも言える」

その台詞に、アルカナはカチンときた。憎々しげな視線でこちらを射抜くケルトを見返してやる。そうだ、いくら義父とはいえ、ピアキイと彼の縁はほとんど切れているのだし、夫は明らかにケルトを

煙たがつていい。夫の敵は妻の敵。アルカナはそう言い訳して、王弟殿下を不躾にまっすぐ見据えた。

「ケルト殿下。」無礼を承知で申し上げます。あなた様が私をどう思われようと、私が貴族の末端出身の小娘だということは事実ですし、それについては返すお言葉もございません。けれど私はピアキイ様の妻として、恥すべき行動をしないよう、誠心誠意夫にお仕えしているつもりですし、分をわきまえぬ行いをするつもりもございません。確かに私は身分も低い、殿下からしてみれば人間の小娘ごときと思われるかもしれません。ピアキイ様に相応しい女だとも考えられませんが、こうして選ばれた以上、私はピアキイ様の御名を汚すような真似はいたしません」

アルカナは深く息を吸つて言い切った。「誓つて」

我ながら随分と大胆なことをしてしまった。隣にいるピアキイが息を呑んだ。ケルトはきつい目つきで、この場をわきまえない小娘を睨めつけている。アルカナは拳を握りこんだ。誰がなんと言おうと、自分はピアキイの妻なのだ。どんなに分不相応でも、女官たちに嫌われても。このピアキイ閣下を後ろで支える役目が、アルカナの仕事だ。ならば、ケルトにそれを見下されるいわれはなかつた。

しかし、この空気はなんともいたたまれない。何か言ってくれと隣のピアキイに祈るように願うと、意外にも反応は別のところからやってきた。

ケルトの背後からぱちぱちと、控えめな拍手が飛んできた。見ると、黒髪の青年が、銀髪に瑠璃の瞳の、目も覚めるような美少女を脇に引き連れ、満面の笑みでアルカナを見ていた。

「いやあ、楽しい演説をありがとう。ピアはなかなかいいお嫁さんを捕まえたようだ」

「リズ兄さん」

隣のピアキイがぽつりと言つた。青年の隣に佇む美少女がくすりと笑う。

「ケルト、認めて差し上げてもよろしいのではないですか?」
「ケルト、認めて差し上げてもよろしいのではないのですか?」
「も素敵なお嬢様だと思いますわ」

乱入者たちはにこにことアルカナを見ていて、アルカナは思わず一歩下がつた。ケルトのように明らかに嫌つてくる者はともかく、このように意味深に微笑まれるのもまた不気味である。すると、「リズ兄さん」と呼ばれた男がケルトを押しのけて、アルカナの前に立つと優雅に一礼した。洗練された動きだつた。

「お初にお目にかかります、勇氣ある奥方。俺はそこにいるケルトの古い友人でね。リズセム・シエルテミナと申します。これが俺の妻のナシャ。あいにくと妻以外の女性には触れないと心に決めてるんで、握手はご勘弁願いたい」

「は、はあ」

なんだか個性的な男だな、スカートの端をつまんで礼を返した。一眼見ただけでも、このリズセムとやらが愛妻家なのは明らかだつた。男はやたら妻にひつについてベタベタしているし、清純そうな妻のほうもそんな夫に慣れた様子で、何も言わずニコニコしている。目を白黒させてピアキイを見ると、彼はついとアルカナに顔を寄せて耳打ちした。

「リズ兄さんはシェイルの旧皇帝位に就いてる」

「えつ!?

ちょうど妻のこめかみにキスを落としていたリズセムがにっこり笑つた。アルカナは目を見張つた。つくづく不老不死とは恐ろしい。ケルトにしろリズセムにしろ、国の上層部にいる連中はみなこんなに見目が若いのだろうか。シェイル王は確か、シェーロラスディ陛下とそう変わらない年頃のはずだつた。目の前の青年はピアキイと同じか、下手をすると彼より年下にしか見えない。アルカナは慌てて夫の一歩うしろまで下がり、深々と礼をし直した。

「も、申し訳ございません、大変失礼をいたしまして」

「あーあ、いいよいよ。格式ばつたのは好きじゃないし、元々俺は庶子だから敬われるような身分でもないしね」

リズセムはひらひら手を振つて頬を緩めた。対するアルカナはくつろぐなんてもつてのほか、この男の食えない態度に固まつた。へらへらと笑つて妻といちゃついている軽薄な男に見えるが、しかしそうではないのだろう。彼の口調は砕けているものの理知に富んでいるし、なにより隣のピアキイがおなじみの嘲笑を浮かべていない。少なからず、「リズ兄さん」と呼ぶこの青年に一目置いているのは確かだ。「

一方でケルトは相変わらずアルカナを睨んで歯軋りしている。

「私は認めない」

「ケルト、往生際が悪いですわよ。婚儀はもうお済みなのですから。ああ、どうしてわたくしたちも呼んでもらなかつたの? わたくしもリズも、あなたの花婿姿をとても楽しみにしていましたのに」「…そこの父上が、シェイルに」「滞在だと小耳に挟んだので」

ピアキイが誰かに敬語を使うといふなど初めて見た。アルカナは面食らつてまじまじと美少女を観察してしまつた。彼女は柔らかに微笑む。

「どうぞお気軽にナシヤと呼んでくださいませね。わたくしもアルカナと呼ばせていただきますから。ふふ、わたくしもね、リズの目に留まるまではたんなる村娘だったのです。だからどうか気負わないで、仲良くしてくださいな」

「まあナシヤは、村娘だろうと王妃だろうとこいつだって誰より美しいけどね」

「あら、リズつたら」

ケルトは、リズセムとナシヤにすっかり話の運びを持つていかれ舌打ちした。その様子をじっと見ながら冷静になってきたアルカナは思う。…この男は、ピアキイが嫌いではなかつたのだろうか? それとも、息子のことを親としてきちんと愛しているのだろうか。

アルカナのすべてが気に入らんと言わんばかりのこの男に、アルカナは首をかしげた。どこからどう見ても、息子に寄り付く悪い虫を追い払わんとする父親の図だ。その虫役であるアルカナとしてはいい気はしないけれど。

考えにふけっていたその時のことだ。

「ショロー！」

突然シェーロラスティの愛称を怒号のように叫ぶ女性の声が聞こえて、アルカナとピアキイは立ち止まつた。リズセムとナシヤがくすぐすと笑い出し、ケルトが深い溜息をついた。

「またか」

「懲りないねエ、あの二人も」

「な、何事ですか？ シェーロラスティ陛下のお名前が聞こえましたけど」

もし世界王になにがあつたら、その責任は、一応護衛としてついてきたピアキイに降りかかるのではないか。思わず夫の顔を見上げると、しかし彼は平然としていた。不安げなアルカナの表情に気がついて、ふと口端を上げた。

「どうせまた、伯父上がフェルマータにちよつかいでもかけてるんだろう」「フェルマータ？」

どこかで聞いた名だ。首をひねつていると、ピアキイはくつと喉の奥で笑つた。

「ラトメの”神の子”」

「……ああ」

そういうえば、南のラトメティアの最高権力者がそんな名前だつたかもしれない。シェーロラスティが顔合わせの時に言つていた、女官泣かせの権力者だ。ここにいるということは、”神の子”の一族も不老不死ということか。人ごみからシェーロラスティ陛下と、噂のフェルマータが見えやしないかとのぞいてみるが、あいにくと人

の隙間から、ショーロラスティの緑の髪がチラリと見えただけだった。ケルトが「なんどぶしつけな」とでも言いたげな顔をしたので、アルカナはすこすこと姿勢を正した。

リズセムがにっこり笑つてアルカナに教えた。

「ショロの趣味なんだよ。フェルの奴、打てば響くつていうか、ちよつとからかつただけですぐ怒るからさ」

「ショロ！ わたくしをからかうのもいい加減にして！」

相次ぐフェルマータの怒鳴り声に、リズセムは「おお恐い」と言ってナシヤを引き寄せた。ケルトが心底嫌そうな顔をした。こう言うとピアキイは怒るだろうが、この表情は父息子よく似ている。

「…行つてくる」

「ハイハイ。兄弟水入らずでじっくり話しておいでよ」

ケルトは最後に一度ギロリとアルカナを見やると、騒ぎの中心へと小走りで駆けて行つた。みるとうちに隣のピアキイから緊張が解けていく。まったくもってギスギスした親子関係だ。アルカナがチラリと夫を見ると、彼のほうもこちらを見ていた。しかし、ピアキイはアルカナと目が合つなりぷいとそっぽを向いてしまつた。一体なんだというのだ。

「アルカナ、行こう」

父のいないうちに逃げる算段らしい。はやくこの場から立ち去ろうと、アルカナの腰をぐいぐい引っ張るピアキイに逆らつて、アルカナはどうにかこうにか踏ん張つて、やつとこリズセムとナシヤに一礼した。

「申し訳ありません、リズセム様、ナシヤ様。私たちも失礼いたします」

「ああ、そうだね。あの口ひるせい奴が帰つてこないうちに退散しちゃいな」

「また今度ファナティライストにもお伺いいたしますわ。どうぞその時はお茶などにお付き合いくださいませね」

快く手を振つて応じるリズセムとナシャに、アルカナはもう一度頭を下げようとするが、その前にピアキイに急かされてその場から引き離された。よほど彼はここにいたくないらしい。

人のいないテラスまで来て、ようやくピアキイは足を止めた。デザインの凝ったベンチにどつかりと座り込むと、ピアキイはアルカナの腕を引いて隣に座らせた。それきり黙りこんだ夫に、アルカナは困り果てた。父のことをなにかフォローすべきだらうか。そわそわするアルカナに、ピアキイは自嘲するように言つた。

「…俺には、あの人がわからない」

ぽつりとした声だった。アルカナはなにを言おうか迷つたが、結局声にならずに口を閉ざした。

「父親ってのは、みんなあんなモンなのかな。今までぜんぜん相手にもしなかつたくせに、俺が結婚したとたんにアレだ。あの人に、親としての自覚なんてないくせに」

「ピアキイ様…」

アルカナは眉尻を下げた。あのケルトは何を考えて、ピアキイから離れたのだろう？彼は本当にピアキイを愛してはいらないのだろうか？わけがわからない。わけがわからないが、とにかくもケルトは、世間一般の父親とは少し違うということだ。ピアキイが、アルカナのすきなひどが、彼のせいで傷ついているといふことだ。

アルカナの心は決まった。

「ピアキイ様、私の家にいらっしゃいませんか？」
「ん？」

怪訝そうなピアキイに、アルカナは慌てた。

「あ、あの、ピアキイ様のような方では、うちのようには低俗な場はお嫌いかもしませんが…ほら、私の父だって、ピアキイ様にとつ

ては一応、義父にあたるわけですし…うちの父親は能天氣でお人よしで、情けない人ですが、その、ケルト様だけが父親ではないですし、ね？あの…」

ただ、知つてもらいたいのだ。ちゃんと子供を真正面から愛してくれる父親もいるのだということ。トロットはのんきな男だが、そうであるからこそ、ピアキイに気負わずに付き合つてくれるだろう。それこそ家名を売るとか、そういう損得勘定を抜きにして。

けれどピアキイのほうはそうは思わなかつたかもしれない。権力を得ようと、ピアキイを家に取り込もうとする汚い女に見えたかも。アルカナは真っ赤になつてうつむいた。

「す、すいません。忘れてください。」迷惑ですよね、ピアキイ様はお忙しいのに、こんな」「行く」

アルカナは目を瞬いた。ピアキイはこちらを見ていなかつた。生い茂る草花をまつすぐ見ていた。探るように彼の大きな手が動いて、アルカナのそれをぎゅっと握つた。彼は少し口を尖らせていた。耳が赤かつた。アルカナはドキドキした。

「行く」

「…はい」

夢見るような心地だつた。アルカナの想いが通じたのかと思つた。それからピアキイは、馬車に乗つたときと同じくアルカナの肩に頭を預けて、ゆっくりと目を伏せた。ピアキイの金髪が、アルカナの頬をくすぐつた。アルカナの声が掠れた。

「ピアキイ様？」

「…寝る」

「は、はい」

風は穏やかだつた。このまま時が止まつてしまえばいいのに。アルカナもまた目を閉じた。吐息さえ響く中で、アルカナは確かにこ

の時、この瞬間、限りない幸福を噛み締めていた。

二人の姿を上階の渡り廊下から眺めながら、黒髪の青年がにやにやと笑っていた。

「あーあー、見せ付けてくれちゃって。俺も帰つたらナシヤといちやいちゃしたい」

「お前らは年中いちやついてるだろ」

くす、とシエーロラスディは微笑んだ。リズセムは手すりにもたれかかつたままで、上目遣いにかの世界王を伺つた。

「ショロもさあ、いい加減解放してやればいいのに。ピアがいつまでもファナティライストにいちや、この馬鹿のせつかくの決意も無駄になつちゃうじやん」

「さてね」シエーロラスディは肩をすくめた。

「ケルトもだよ。ホントは息子が可愛くて仕方ない癖になにやつてんの。素直になつてりや、ピアだつてああもおびえたりしないだろうに」

「俺は父親に向かない」

ケルトはきつぱりと言い放つた。それでも、未練がましく視線はピアキイに注がれている。

「あの子は、不老不死に染まりあがつた私が育てていい子ではない」

リズセムは溜息をついた。

「アンノにピアを預けたときのこと、俺、覚えてるよ。自分の従者に土下座までしてさ。ピアキイを頼むつて何度も言つし。この親馬鹿が、ホントに息子と離れられんのかよつて思つたね」

ケルトは何も言わなかつた。その代わりに、彼の兄が、クックと笑う。

「ケルト、決めたのか？」

「はい」

ケルトはようやく息子から視線を外した。兄をまっすぐに見たその
緑の瞳には、決然とした光がはつきりとあらわれていた。

「ピアキイをどうかお願ひします、兄上」

「それは言つ相手が違うんじやないかな」

ゆつたりとショーロラスティイは言つた。穏やかに、自身の甥とその
新妻を見つめて、それから弟に向かつて笑いかけた。

「今ピアキイの一番そばにいるのはあそこにいるアルカナ嬢だ。あ
の子はきっと、ピアキイの大きな支えになるだろう」

「……」

「きつとね」

ショーロラスティイはにこやかに言つた。対称的な弟は、悔しげに、
眠る夫婦を見下ろした。

act・12 王弟殿下の心底（後書き）

旧皇帝位：現在この世界は、かつてはバラバラだった各国を統合してひとつの国になり、各国の首都是国の主要都市となつて成り立っています。「旧皇帝位」というのは、シェイルがまだ帝国だったときの皇帝位のことで、今ではシェイルの都市代表のようなものです。本作の本文では解説されないためこちらにて失礼いたします。

act・13 それはあたかもぬれ濡のよつな（前書き）

序盤で数行アハンなシーンが入ります。かなりぽかしてありますが苦手な方は「」注意ください。

act・13 それはあたかもぬるま湯のよづな

夢を見ていた。白い世界の中だ。

赤いソファーに座っている。ピアキイは幼い子供だった。ぶらぶらと浮いた足を降つて、右隣に座つていた母がすすり泣いているのに気づいた。ピアキイと同じ金髪を振り乱して、両手で顔を覆つてうつむき肩を震わせてくる。ピアキイは無性に母が心配になつて、彼女の袖を引いた。

”ははうえ？”

母はこたえない。すると、左隣の父が急に立ち上がり、ピアキイと母を置いて歩き始めた。一いつを振り返ることもなく、まっすぐ。

”ちちうえ”

ピアキイは呼びかけた。父の背中は遠くなる。ピアキイは悲しくなつたけれど、どうして悲しいのかもわからなかつた。

ピアキイはうつむいた。すると、のっぺらぼうのように顔の見えない全裸の女が田に入った。二つの間にか場面が変わり、ピアキイは青年の姿で、赤いベッドの上で、女を組み敷いていた。女は何かわめきながら身悶えているのに、ピアキイの心は冷え切つたまま。なんの熱も感じじることなく、ピアキイは女を征服していた。

上からぽたりぽたりと何かが降つてくる。見上げれば雨。ピアキイはその場に立ち尽くしていた。金髪はこぐら濡れても縁にはならない。なぜだろう、身にまとつ黒い服は、水を吸つて更に深い闇色に染まつていくのに。

”あら”

何も感じないピアキイに、誰かが手を伸ばし、ピアキイの首元に手を伸ばした。

”リボンが曲がっていますよ、ピアキイ様”

そう言ってピアキイのリボンを結びなおした白い服の少女は、びしょぬれの姿に頬着もしないで立つていた。彼女はピアキイの胸元し

か見ていない。ピアキイはほんやりと思つた。この少女に自分を見て欲しいな、と。いつの間にか手にしていた白い百合の花を、彼女にそっと差し出すと、少女はにっこり笑つた。笑つて、そしてピアキイの顔を見上げた。

ピアキイは柄にもなくドキリとした。この少女が欲しくなつた。ピアキイは、彼女の名前を呼ばうと口を開いたが、なぜか少女の名前が出てこない。どうして? こんなにそばにいるのに、何度も呼んだ名前なのに、どうして、どうして? みるみるうちに少女の姿が霞んでいく。見えるのは最初にあった白い世界だ。待つて、思い出すから、俺を置いていかないで!

「ピアキイ様?」

アルカナは振り返つて声を発した。黒いコートの裾をくいと引っ張つてきたピアキイは、薄くみかん色の瞳を開いて、眠たげに何度も瞬きを繰り返した。

「……う?」まだ半分夢見心地のようだ。アルカナはくすりと笑つた。

「お目覚めですか?」

「ん…」

目をこすりながら起き上がつたピアキイは、しかしますます強くアルカナのコートを握つた。なんだか随分と甘えん坊だ。こんなに上等な布に、しわをつけてしまうんじゃないかしら。アルカナが考えたところで、ようやく覚醒してたらしいピアキイが問うてきた。いつもより少し低い声だ。

「どこ行くの」

「え? ……あの、すみません。ちょっとお化粧直しに」

「…ああ、うん。そ、う」

確かめるなりピアキイはあっさりアルカナから手を離した。あんま

りにもあつけないものだから、少し物足りない気分でアルカナは歩を進めた。テラスから大広間に戻る途中で、こっそりピアキイを振り返ると、彼はじつとアルカナを見ていた。

今日のピアキイはなにかにつけてアルカナにひつついでくる、気がする。元々スキンシップの激しい性質だったとは思うが、それでも今日はピアキイが片時も離れまいとして、必ずにかしらアルカナに触っていた。アルカナは自分の手を見下ろした。（手なんて繋いだの、初めてじゃないかしら）

結婚の式典で儀礼的に手を取られたときくらいだろうか。ピアキイにとつてはなんでもないことかもしれないが、男性との付き合いなんてほぼ皆無だつたあるかなには、ひどく特別なことのように感じられた。アルカナは頬の緊張が緩むのを押さえながら、そそくさと化粧室に向かつた。

その時だ。

「ああ、いたいた。アルカナ？」

「ショーロラスディ陛下」

「ショロでいいって言つてるのに」

そんなわけには参りませんとモゴモゴ言つていると、ショーロラスディは仕方ないとばかりに苦笑した。

「ピアキイは？」

「お庭にいらっしゃいますよ。今出てきたばかりなので、多分お一人だと思いますが」

「あ、いや、別にピアキイに用というわけじゃないんだ。アルカナに、例の景色を見せてあげようかと思つて」

「まあ、よろしいのですか？」

「きつとアルカナも気に入ると思つよ」

「あ、でも私、ピアキイ様に何も言わずに行くわけには……」

「じゃあ君の『主人に了解を取りに行くとしようか』

ショーロラスディはにつこり笑つてアルカナに腕を差し出した。どうすべきか迷つたが、男性のエスコートを断るだなんて礼を失すことだ。アルカナは溜息をつきそうになるのをこらえて、ショーロラスディの腕に手を置いた。

「先ほどケルトに会つたらしいね」

突然ショーロラスディが切り出してきてアルカナは息を呑んだが、彼にはそれで十分だつたらしい。

兄弟の顔はあまり似ていない。兄は柔和だが弟は鋭い印象なのだと感じた。しかし少し薄いくちびると、すつきりと細い首はそつくりだつた。ショーロラスディは淡く微笑んだ。

「一応自分の弟だから言つとね…ケルトも、あれで父親として思うところは色々あるらしい。ああ見えて奴はけつこう親馬鹿なんだ。たまに届く手紙には九割ピアキイのことしか書いてない」

「え」

アルカナは目を瞠つた。しかし、そう言わなければ納得できることもある。

「まあ、確かに、ピアキイ様のことを考えていらっしゃる節は…だけど、アンノ様は、ケルト様が、ピアキイ様を愛すことができなかつたと仰つてましたよ?」

「あいつはそんなことを言つたのかい?」

ショーロラスディ陛下はくすくす笑つた。

「そうだな。アンノは理解できないだろう。あいつはピアキイが父を憎むのを、ずっと側で見てきたのだから」

「どういうことですか?」

「ケルトはね、エファインを、ひいてはファナティライストを捨てるらしい。一人の平凡な男として生きていいくことを決めたそうだ」アルカナは目を瞬いた。国を捨てる?ということは、王位継承権も放棄するということだ。ショーロラスディ陛下には今子供がないから、彼の弟であるケルトが今は王位継承権を持つている。彼がい

なくなれば…

「まさか、ピアキイ様が？」

「いや、ピアキイは平民の子供だし、もうアンノの家に籍を移している。ケルトも対外的には息子として認めていない。まあ、上の連中はうるさいだろうが、不老不死一門の反発が強いからあいつが世界王になるのはほほ無理だ。まず本人が嫌がってるしね。そろそろ私も奥さんを宛がわれる頃ってことかな」

アルカナは口をつぐんだ。ショーロラスティの言いたいことがなんとなく分かったからだ。ケルトの不器用な愛に感づいて、アルカナは眉をひそめた。

「そりや、ピアキイ様の元に嫁いだのが私、ということは、ピアキイ様に王位を継ぐ気はないのだと、そう思いますけど」

「むしろピアキイはさつさと国を離れて隠居生活でも送りたいみたいだな。アルカナには悪いが、私は当分彼をこき使つつもりだよ。ケルトの小言がうるさいけどね…おや？」

ショーロラスティは立ち止まって前方をじっと見た。彼の視線を追うと、ベンチに優雅に腰掛けたピアキイを、幾人ものお嬢さんが取り囲んでいる。血などにとらわれることなく、ピアキイの美しさは不老不死をも魅了させるらしい。きらびやかな女性に臆することなく薄つすらと微笑む夫の姿に、アルカナは拳を握り締めた。

血なんて。きっと、親族の威光も、特殊な出生も、そんなものがなくて、たとえアルカナと同じくらい、いや、いつも奴隸の身分だったとしても、ピアキイの姿はいつだって輝くのだろう。彼のあの美しさとか、奔放な性格、人を惹きつける力を、きっと誰かが見つける。彼は誰かの輪の中心にこそ生きるべき人だ。部屋に閉じこもつて、窓の外ばかり見ていた、陰気な自分とは違つて。

近づいたなんて、そんなのは嘘だ。ピアキイの名前を汚さない、だなんて。アルカナの存在が、自分の知らないところで、ピアキイ

を苛んでいるのかもしないのに。

ピアキイを囮う女性の中で、幾人が彼に焦がれているのだろう。彼らの上に立っている自信などこれっぽっちもなかつた。想いも身分も自信も、きっと誰にも勝つていない。ケルトに大見得を切つたつて、アルカナがただの小娘であることに変わりはないのだ。

「私、少しだけレイン様の気持ちが、わかつた気がします」

ちらりとショーロラスディイがこちらを見た気配がした。アルカナは微笑んだ。権力なんて、老いない体なんて、そんなものに興味はない。それでも、自分がピアキイの側にいてもいいのだと、そんな証が欲しくなつた。こんな何のとりえもない娘ではなくて、ひとつでもいいから。ピアキイに釣り合つためのものなら、なんでもいいから。

ショーロラスディイがくすりと笑つた。

「…レインも昔は君のよくな娘だつたよ」

彼を見ると目が合つた。ショーロラスディイは、そつと目を伏せて、思い出すよつにつぶやく。

「働き者で、優しくて。だがしかし、君はやはりレインとは違う。孤児で、その身ひとつで神殿にやつてきたレインは、ケルト以外に頼れる者もいなかつたけれど、君には家族もすぐ側にいる」

それから彼はお茶目にウインクした。「もちろん私もね」

「そんな…恐れ多いことです」

アルカナは困り果てた。ショーロラスディイは、アルカナがレインのようになるとでも思つているのだろうか？アルカナには、女官を呼び捨てにする度胸さえもないのに？ショーロラスディイはケタケタ笑つた。

「そうだ、アルカナ。君、仕事をするのに興味があるかい？君の淹れるお茶はおいしいってピアキイから聞いてさ。是非僕の世話係にでもなつてくれないかなあ」

「え？」

「なに勝手に甥の嫁を口説いてるの」

ぐいと引っ張られて、アルカナはたたらを踏んだ。見上げると、ピアキイが不機嫌な顔で伯父を睨んでいた。シェーロラスディは瞬く間にアルカナの手から腕を外して一步後ろに下がった。そして白々しくもにつこり笑う。

「いいじゃないか。別に、常に夫婦一緒であれってわけじゃないし」

「駄目」

アルカナはピアキイの脇から、彼を囲んでいた女性たちを見た。誰も彼も不快そうな顔でじとりとこちらを見据えている。アルカナはぎくりとしてピアキイから離れようと、彼の胸を押した。

「ひ、ピアキイ様？あの、離して…」

アルカナは閉口した。ピアキイが苛々といちらを見下ろしたからだ。

「…なんでもありません」

ピアキイは鼻を鳴らして、アルカナの肩をいつそう強く抱きこんだ。シェーロラスディがニヤニヤ笑つた。

「まったく、嫉妬深い夫を持つと苦労するね、アルカナ？」

「そ、そんな」

一体どうしたのだろう？アルカナはチラチラとピアキイを見ながら困惑した。ピアキイはこんなにアルカナに対してもつたりだっただろうか。どうせアルカナなんて、彼の数多くいるであろう女性の中の一人であるだろうに。嫉妬？何故そんな感情が沸き起るというのだ。

父君にあつて人肌恋しくなったのかしら。アルカナは苦笑して夫に尋ねた。

「ピアキイ様、私、先ほどシェーロラスディ陛下に、このお城を案内していただきことになったのですが」

自分で言つて不安になつてきた。かの世界王陛下を、私なんかがこき使うなんて許されるはずがない。

するとピアキイは不機嫌に言い放つた。

「やだ」

「別にピアキイは来ないでいいよ。邪魔だし」

ショーロラスティはあつさりと返した。それからじつじつとアルカナに笑いかける。

「ね？」

「え、えっと」

アルカナは戸惑った。ショーロラスティは企み顔だし、ピアキイは凶悪な目つきだ。震え上がりそうになるのをどうにかしらえて、アルカナは精一杯愛想良く夫に言った。

「あ、あの…ピアキイ様、一緒に参りませんか？」

「……」

ジリヤラ夫は妻の申し出がお気に召さなかつたらしい。むつりしながら、ようやくアルカナの拘束を解くと、不貞腐れたようすで広間への道を歩き出した。

アルカナは慌てて声をかけた。

「あ、あの、ピアキイ様？」

「…リズ兄さんたちのところにいるから、用が済んだら声かけて」

「え？でも、リズセム様がたのところには、ケルト様が…」

行つてしまつた。まさか、自分から苦手とする父の元に行くなんて、大丈夫なのだろうか。慌ててピアキイを引き止めようと一步前へ出るが、ショーロラスティが穏やかに言った。

「放つておきなさい」

「で、ですが陛下」

「あれも、君の氣をひきたくてわざとやう言つたんだらう。実際はそのあたりをぶらついているだけだ。そもそもリズ達、もつ帰つたしね」

「でも…」

名残惜しいような気持ちでピアキイの背を見送つていると、先ほどの令嬢たちがピアキイに声をかけていた。愛想良くそれになにやら返しているピアキイに、アルカナは唇を引き結んだ。

アルカナはぐつたりとベンチに崩れ落ちた。ショーロラスティが五十代なんて嘘だ。あれから散々連れまわされたアルカナは、小一時間ほど経つて、彼を「シェロ」と呼ぶことを条件にようやくと解放された。國主のくせに奔放な人である。きっとアルカナに渾名で呼ばせるために仕組んだのだろう。

もともと引きこもりで、体力に乏しいアルカナは、ようやくひと心地ついて溜息をもらした。ああ、でもいけない。ここはまだ外なのだから、気を抜くわけにはいかない。ショーロラスティはピアキイを探すと言つてふらふらと消えてしまつたし、その間だけた姿を晒しているわけにもいくまい。アルカナは背筋を伸ばした。

本来ならば自分がピアキイを探さなければならないのに。悶々としているところ、ふと頭上に影が落ちた。真っ赤なハイヒールが目に入る。見上げると、一人の女性が、その豊満な胸を見せ付けるように腕を組み、優雅に、しかしじろじろとアルカナを見据えていた。

苛烈な人だ。アルカナは一目見ただけでそう思った。

赤銅色の髪ではあるものの、その瞳は鮮やかな緑で、彼女もまたエフAINの血筋であることが伺える。黒いマーメイドラインのドレスは彼女の身体の線を緩やかに強調し、開いた胸元には下品にならないようエメラルドをあしらつた細いネックレスがありてこる。ショートヘアには金のリボンが編みこんであり、セクシーだと可愛らしさが相まって、同性のアルカナから見ても妙な色香を感じた。つんと香る柑橘系の香り。香水の趣味も悪くない。

女性は紅を引いた唇を引き上げた。

「お久しぶりね。こうしてお会いするのは二度目かしら」

彼女の言葉にアルカナは首をかしげた。どこかで会つただろうか。記憶を探っていると、女性は嘲るように吐き捨てた。

「あなたとピアキイ閣下の顔合わせの時にお伺いしたと思つただけれど」

「え？」

じつと女性を見て、アルカナはようやく合点がいった。

「もしかして、お茶を淹れてくださった」

「ええ、そうよ。覚えていてくださって光榮ね」

アルカナには指摘する度胸などなかつたが、ファナティライスト神殿の女官が、仕えるべき立場のアルカナにこうも見下すような目線を投げかけるのは許されるのだろうか。あのミュウでさえ、最初は敬語だったのに。アルカナは立ち上がって、スカートの裾を軽く上げた。

「あ、あの…アルカナです」

「そう、アルカナ・”ハイネント”」

含み笑いを浮かべて女性は言つた。どうもアルカナは嫌われているらしい。呼ばれた名前には修正せずに、アルカナは愛想笑いを浮かべた。

「エフAIN家の方なのですね。ピアキイ様とは、『親戚でいらっしゃるのですか？』

「さあ？」

女性はアルカナの代わりにベンチのど真ん中に座ると、あでやかな笑みのまま首をかしげた。

「私はリーゼル。あなたにはお世話になつてゐるから、一度ご挨拶をしておかなきやつて思つてたの」

「お世話、ですか？」

なんだか嫌な感じだ。女性はアルカナを下から見下している。上目遣いなのに、見下されている。この先を聞きたくはないが、アルカナは眉をひそめたままその場に立ち尽くした。袖の裾を握り締めているのに気づいたのか、リーゼルと名乗った女性は実に愉快そうだった。

「私のためにピアキイ様と結婚してくださつたのだもの。お礼のひ

とつべらこは、ねえ？」

「…どうじこと？」

顔を強張らせるアルカナを見て、リーゼルは満足げだ。アルカナを手招きしてくる。怪訝に思い顔を寄せると、アルカナの耳元でリーゼルがささやいた。

「だって、私とピアキイ様は愛し合っているのですもの」

いつまでそうして呆けていたのだろう、ベンチに一人座り込んでいたアルカナは、頭上から声をかけられてようやく我に返った。

「アルカナ」

金髪にみかん色の瞳の青年は、いつもどおり涼やかな表情でこちらを見ていた。数拍置いてアルカナは、そういえばショーロラスディが迎えに行つたのだと思い出した。

「ああ」

アルカナは呆然としたまま立ち上がった。

「ショーロラスディ様は？」

「入り口で待つてる。行こう」

当たり前のように腕を差し出してきたピアキイに、アルカナは途方に暮れた。その腕を取つてもいいものか不安になつたのだ。

じつと腕を見つめたまま動かないアルカナにしびれを切らしたのか、ピアキイは不機嫌に眉を寄せると、ぐいと腰をつかんで、アルカナを引きずるように歩き出した。たらを踏んで、アルカナは思わずピアキイのコートにしがみついた。彼の肩に耳をぶつけると、ふと爽やかな柑橘類の香りが鼻をかすめた。

「……どちらに、いらしていたんですか？」

「ん？」

チラリと視線を向けられて、アルカナはたちまち意氣消沈してうつむいた。

「いえ……」

ピアキイはまた何を考えているのか分からぬ表情で、しばらく辺りに視線をさまよわせていたが、ふと意地悪な微笑を浮かべるなり、立ち止まってアルカナの頬に空いた片手を滑らせた。

「なに、さびしかった？」

「そつ、そ、そんなことは！」

真っ赤になつて思わず抗議しようとするが、不意に先ほどの胸糞悪い女を思い出し、アルカナはむつとしたままピアキイから視線を逸らすと、頭についた白い花弁を指先で弄つた。

「…そうです、寂しいというか、…心細いというか」
ぼそぼそとアルカナは白状した。

「私にとつてここは初めて来る場所で、それに私、あんまり良く思われてないみたいだし…ピ、ピアキイ様がいてくれなきや、私…」
みなまで言うのも恥ずかしい。尻すぼみになつてごにょごにょと声にならない声を上げていると、やがてピアキイがくすくすと笑い出した。するりとアルカナの首に腕を回すと、アルカナのこめかみに額を寄せてくる。嫌になるくらい自然な動きだつた。

「”私”、なに?」

「……」

「言つてよ」

「…もうつ、からかわないでください…」

無理矢理彼を引っ張がすが、ピアキイはすっかり上機嫌でアルカナの手を握ると、スタスタ歩き出した。またもアルカナは引きずられる形になつたが、先を行くピアキイの金髪と、繋がれた手を何度か見比べて、なんだか笑い出したい気持ちになると、ピアキイに小走りで追いついた。

正直に言おう。リーゼル・エファインはアルカナにとつて、激しく気に食わない女だつた。

アルカナだつて誰にでも愛想良く穏やかに、万人を嫌わずにいられる聖女様なんてものではないのだ。ミュウに対しても柔らかな物腰でいられたのは、単純に彼女を敵に回せば生活に支障をきたすと思つたからだ。今でこそ彼女とうまくやつてているからいいものの、ピアキイの制裁がなければ間違いなくもつと冷え冷えとした関係になつていただろう。

リーゼルは戸惑うアルカナにこう言った。

「私とピアキイ様はどんなに愛し合つても一緒ににはなれないの。私は貴族だけど、エファインの人間からすれば、平民の子であるピアキイ様と一緒にになるなんて無理なんですもの。私とピアキイ様に接点があるつてことも、お父様には論外つてわけ。とはいえ、ピアキイ様の立場は難しいでしょう？ 結婚しないわけにはいかなかつたんですね。じゃあ、隠れ蓑を立てるしかないじゃない？」

「…隠れ蓑、というのが私、ですか」

「ええそうよ。あなたはたいした身分でもないし、ピアキイ様の興味にも合いそうにない。だから私が推薦したの。あなたなら、ピアキイ様を取られる心配もないでしょ？」

アルカナは閉口した。言い返せないというよりも、むしろ不老不死というのはここまで非常識なのかと感心さえしていた。まじまじとリーゼルを見ていると、彼女はくすくす笑つた。せつかくの美女なのに、悪役じみた笑顔が勿体無い。

しかし、リーゼルがそう思う気持ちを分からぬでもない。アルカナは別段なんの取り得もない平凡な女だし、対してピアキイが婚前連れていた女性といえば、いつも目を瞠るような美女ばかりだつた。確かにピアキイの好みから、アルカナは大きく外れているだろう。自分で認めるのは癪な話だが。

アルカナは腸が煮えくり返る思いでにじつと笑つた。

「それはそうでしょうね」

「あり、案外物分りがいいのね」

「ピアキイ様が私のことをビビリとも思つていらっしゃらないのは確かですもの」

これをこんな女の目の前で吐露しなければならないなんて屈辱だ。拳を握り締めながら、温かな振りをしてリーゼルを迎撃つ。リーゼルは悠然と佇んでいた。

「そう。ならいいのよ。隠れ蓑は隠れ蓑らしくおとなしくしていれば。それだけは言つておこうと思つて。それじゃあね」

気分が晴れた様子で立ち去りつとするリーゼルの背中に、アルカナは穏やかに声をかけた。

「リーゼルさん」

「なあに？」

「私とピアキイ様の顔合わせから奥入れまでの間に、ピアキイ様とお会いになられました？」

「……いいえ。だってピアキイ様はお忙しい方ですもの」

「そうですか」

アルカナは笑みを濃くした。少なくとも、この女に一泡吹かせてやることはできそうだ。案の定、アルカナの意味深な台詞に、リーゼルは怪訝そうに振り返つた。

「なんだつていうの？」

「いえ……ピアキイ様とそんなに深い仲でいらっしゃるのなら、私がわざわざ申し上げる必要などないのでしょうが……」

リーゼルが苛々している。アルカナは内心でほくそ笑んでやつた。

「毎日私の見えるところでピアキイ様が堂々と浮氣していらっしゃるのを見ておりましたけど、その割にあなたをお見かけしなかつたなと思いまして」

今度はリーゼルが真っ赤になる番だつた。憤然と去つていったリーゼルの背中を今度こそ見送つて、アルカナはぼんやりと思考にふけ

つた。

分かつてはいたことだが、窓越しの世界と直接対面するのでは、随分と違うものだな。アルカナはまずそう思つた。分かつてはいる。ピアキイにはアルカナなどいなくとも、いくらでも素敵なお相手は選べるし、そしてきっと彼に恋焦がれる女性など、掃いて捨てるほどいるのだと。

リーゼルだつて、彼女がどう考へてゐるかは知らないが、ピアキイにとつては取るに足らない女性のひとりに過ぎないのだろう。「使い捨て」。そう、そんな感じ。

アルカナだつて同じだ。これまでの生活で、アルカナとピアキイはそれなりに親密になつたとは思つが、けれど、それだけだ。アルカナが今ここでピアキイに離縁を申し出たところで、彼はたいした感慨もなくアルカナを手放すのだろう。妻に選ばれたのは、ただ、自分がピアキイにとつて都合がよかつただけだ、自惚れるな。アルカナは自身に言い聞かせた。

(だけど)

アルカナはぽつりと考えた。

(私は、そもそも…ピアキイ様に、好きになつてもらいたいのかしら)

今まで考えたこともなかつた。ピアキイはまるで雲の上の人だつたし、結婚してからも、夢の中でもどろんでいるようだ。日まぐるしく日々が過ぎていくばかりで、ピアキイとの関係を、少しでもマシな夫婦になりたいとは思つていたけれど、でも。

(私は、ピアキイ様と、”恋愛”がしたいのかしら)
人は不相応だと笑うかもしけないが。考え出せば止まらなかつた。

あのみかん色の瞳でじつとこちらを見つめてほしい。あの金髪に指を通したい。彼に抱きしめられたい。一緒にどこかへ行ってみた

いし、田が覚めたとき隣にいてほしい。他愛もない話をたくさんしたい。…あのくちびるから、私を好きだと言つことばがほしい。いつの間にこんなに欲深くなってしまったのだろう。アルカナは口元を押された。ほんの淡い憧れだったはずだ。一時期は彼を最低だと思ったはずだ。なのに、どうしてこんなにも、彼に焦がれているのだろう。何があつたわけでもないのに。

アルカナは自分の途方もない願い事に愕然とした。こんな平凡で、貴族らしくもない、ただの小娘が、あのピアキイの唯一になれるわけもないのに。ピアキイに声をかけられるまで、アルカナはそうやつて、呆然とその場に佇むしか術がなかつた。

act・14 朗報となるかは君次第（後書き）

やつとまともなライバルが出てきました。

エフアイン家から帰ったアルカナが、次の日から劇的におしゃれに目覚めたことに、ミュウは今更かと呆れ溜息をついた。今までの質素ななりから一転して、ピアキイから贈られた白い衣装に身を包み、ハンドケアにこだわり、入浴時間が少しばかり延びた。化粧も華美すぎない、かわいらしいものに変わっている。

「どうしたっていうの」

目を白黒させて問うたが、実のところ答えはもうわかつていた。彼女をこんなに…認めるのは癪だが…可愛くする男は、ミュウの知る限り一人しかいない。

アルカナははにかんだ。

「私、ピアキイ様に少しでもアピールしようと思つて」

今更だ。本当に今更。アピールもなにも、ピアキイのほうも鎮魂日に本家から帰ってきたとき様子がおかしかった。妙にそわそわして、アルカナになにかといふと構つて。本当にわずかな差だつたし、その次の日からピアキイは執務室に詰み上がつているらしい仕事で部屋に戻つてこないものだから、アルカナには分からぬかもしれないが、それでも、ピアキイが以前にも増してアルカナを気にかけているのは見るも明らかだった。

ミュウが考え込んでいると、アルカナは何を思つたかあわて始めた。

「あつあの、わかつてます。分不相応ですよね。私も、きっと振り向いてもらえないだらうつて思つてて…でも…」

「本当、わかつてないわね」

「そうですよね」

しゅんとしたアルカナに、ミュウは笑いかけた。

出会いはともかく、今は、この主のことは、そんなに嫌いではな

いのだ。

「そんなにあからさまにしないで、もつとまへめりなきがちがひ」

「ねーね、アルカナ、なんか今日いいにおいがする」

今日のファレイアはアルカナのスカートの裾にべったり張り付いている。ミコウにそそのかされて、「最初は香水を変えるくらいでいいのよ」と言われたアルカナはドキリとした。

「わかりますか?」

「ん」

そうしてぎゅっと抱きついてくるといふことせ、この香りはファレイアのお氣に呑じていただけたことだらう。アルカナはにっこりした。

「ママのこおいに似てる」

「ファレイア様のお母様ですか?」

ファレイアの口から、病で寝込んでいたといふ母の話を聞くのは珍しい。アルカナは問い合わせると、少女は目を輝かせた。どうやら今日の彼女はご機嫌らしい。

「あのねつあのねつ、ママはまほつつかいなのよつ」

「魔法使い…ですか?」

魔術を使える人のことは時々魔術師と言つたりするけれど、アルカナが目を瞬くと、ファレイアは上機嫌に言つた。

「パパがよく言つてゐるよ!パパはね、ママのまほつにかけられたんだつて!』『いのまほつ』つていつてた!』

「…ああ、そういうこと

アルカナは苦笑した。いかにもアンノラッシー言い草である。

「それでね、ピアさまもね、そつなんだよ」

「え?」

「パパがね、ピアさまも、まほうにかけられたんだって。ピアさまのところに、まほうつかいがやってきて、ピアさまにまほうをかけたんだって」

心臓がバクバク鳴った。淡い期待が首をもたげる。ミュウがちらりとこちらを見る気配がした。先のリーゼルの言葉より、ほんの子供であるファレイアの台詞のほうがよっぽどアルカナには効果があった。

アルカナは声を潜めた。

「それで、その魔法使いは誰なんですか？」

「それがね……」

むふふと笑うファレイアが手招きするので、アルカナは彼女に耳を寄せた……すると。

「あーら、相変わらず下賤な部屋です」と――

居丈高な声が飛んできて、一同は呆けた顔を上げた。ミュウが盛大な溜息をつくのが聞こえる。見ると、入口の扉にもたれて、リーゼルがフフンと鼻で笑つた。

アルカナはべたりと笑みを貼り付けた。

「ここにちは、リーゼルさん。本日はどうなさいました？」

愛想良くなつてやると、リーゼルは気分を害したようだつた。

最近、よくこうやってリーゼルが部屋にやつてくる。なんと彼女はピアキイの仕事場での世話係を務めているらしく、仕事の合間に縫つてこちらに来ては、アルカナにちくりとものを言つのだ。ついでにあてつけのように、ピアキイからの仕事をひけらかす。

「ピアキイ閣下が万年筆をお忘れのようなの。持つてきていただける?」

「ああ、今度は万年筆ですか」

机から安物のペンをひとつ取り上げて、アルカナはにこにことリー

ゼルに渡した。

「最近ピアキイ様は忘れ物が多いのですね」

何も知らない小娘の振りをしてアルカナは首をかしげた。それを見たリーゼルがまた機嫌よろしくアルカナを嘲笑った。万年筆の良し悪しもわからないのか。アルカナは眉尻を下げて微笑んだ。それさえもリーゼルは気づかない。

「妻があなたのような人間なのだから、ピアキイ様も気苦労が多いのでしょう。子守りもままならないのだし…」

リーゼルはちらとファレイアに不羨な視線を向けた。

「だからこそ、私がお支えする必要があるの。ミュウもこんな主を持つて大変ね。それじゃあ、失礼」

言つが早いか、リーゼルは身を翻して颯爽と去つていった。どこからあんな自信が溢れるのか不可思議だったが、彼女の胸を張るさまは尊敬すら呼び起こした。

「フィー、あのおんな、きらーい」

「ファレイア様、そんなことを言つてはいけませんよ」

ファレイアはアルカナ以上に、リーゼルが気に食わないらしかった。ライバルとして張り合つ氣すら起こらないらしい。アルカナはちょっとした優越感で胸が熱くなつた。ファレイアは積み木を持ち出してきながら言う。

「パパがあのおんなのことおこつてたのよ。ピアさまが困つてつていつてたもん」

「アンノ様が？」

あの明朗で温和な男が怒るとは、リーゼルは相当唯我独尊らしい。アルカナは目を丸くした。

「うん、フィーもね、あのおんなきらい！」

きつぱり言つて、積み木に興じるファレイアを見ながら、アルカナはどうにも釈然としなかつた。

あの女が、エファン家の生まれを誇りに思い、自分が美しいこ

とをよくわかつていいる氣位の高い女性であることは見るも明らかだ。ピアキイに侍つていた女たちが、そういう同性からの反感を買いやすい人間だということはアルカナも知つてゐる。けれど、実際に結婚してみて、ピアキイが馬鹿でも考へなしでもないはずなのに、そうしてあんな女ばかり傍に置いていたのは不思議でならなかつた。

やつぱりいくらやり手のピアキイ閣下といえども、女の趣味は悪いことかしら。いつぞやか浮かんだ考へをもう一度思つてアルカナは首をひねつた。ピアキイ様つて面白いなのね。

物思いにふけりながら、花瓶に生けてある青いエソルを見るともなしに見ていると、ミユウがこっそりと尋ねてきた。

「ねえ、万年筆、あの女に渡してよかつたの？」

「ピアキイ様のペンをお渡しするわけないじゃないですか。私の持つている父からのお下がりです。」

どこに持ち出されるのかわかつたものではない。おとなしく夫の持ち物を渡すほどアルカナは愚かではなかつた。どうせピアキイは自分が持つものに頼着しないし、無事万年筆が彼に渡つたとして彼が気にするとも思えない。

ミユウはアルカナのしてやつたりな笑みに溜息をついた。

「…アンタつて案外強かよね」

「だつて、納得いかないんです。あの方がピアキイ様のホントに好きな人だつて」

第一、それならピアキイはなぜアルカナにそれを隠しているのだろう。婚約当初は散々彼にひどい扱いを受けていたのだから、本命がいるなら、その話はアルカナにダメージを与える絶好のネタだつたはず。そもそも、ピアキイに隠し事自体似合わない。

「最初に、ピアキイ様に本命の方がいらっしゃるつてお聞きしたときはびっくりしましたけど」

「あり、アンタその噂知つてたの」

ミユウも知つてゐる話らしい。ファンティライスト神殿の女官の話

題だから、彼女にとつては身近なものだらう。ましてあのリーゼルはやたらと目立つ。アルカナはにつこり笑つた。

「まあ、実物を見て、根も葉もない噂だと思ってスッキリしました」「アンタ、よつぽどリーゼルのこと嫌いなのね」

「大嫌いです」

人のことを隠れ蓑呼ばわりするし、無駄にえらそうだし（事実アルカナなどよりもよほどいい家柄なのだが）ああいう鼻持ちならない女はアルカナとは馬が合わなかつた。どうせ向こうからも嫌われているのだし、ピアキイはエファイン家とあまり係わり合いになりたくないようだしで、アルカナとしても彼女に媚を売る必要もない。一応そつなく追い返しているが、アルカナの内心は穏やかではなかつた。なにせ、奴が引き止めているのか知らないが、ここ最近アルカナはピアキイと会えていないのだから。

いくら好きだつて、本人に会えなきや意味ないじゃない…むつりしながら、ファレイアの襟が折れているのを直してやると、突然部屋の扉が開いた。女三人そろつて飛び上がつた。噂をすれば影。ピアキイがうんざりした様子でやつてきた。

アルカナはあわてて立ち上がつた。

「お帰りなさいませ、ピアキイ様…わあつ」

スカートのすそを足で踏んづけてよろけると、すくい上げるようにピアキイに腰をつかまれた。久々に彼の端正な顔立ちを間近で見たものだから、アルカナはぎょっとした。ピアキイはお構いなしだ。アルカナをソファに座らせると、その膝に頭を据えてごろりと横になる。彼の長い脚は一人掛けのソファでは物足りずに、すつと突き出でている。

「ピアキイ様！？」

いつものことながら、アルカナはピアキイの唐突な挙動に思考まで真っ赤になつた。彼は駄々をこねるがごとく「んー」と声を上げて寝返りを打つた。

沸騰寸前のアルカナとは打って変わつてファレイアは大喜びだ。

「ピアさま、ピアさま、フィーといつしょにあそぼ！」

「つるさい、疲れてんだ、ガキ、どつかいけ」

ピアキイは端的にファレイアを罵つた。田を開きすらしない。ファレイアが口を尖らせた。

「ガキじゃないもん、パパはフィーの」と、『可愛いレディ』^{イテルブ・イダール}つて言つてくれるもん」

「『お子様レディ』、頼むから消えてくれ」

払いのけるように手を振つたピアキイは本当にお疲れのようだ。足でブーツを脱ぎ落とすと、「むう」と間抜けな声を上げて眉を寄せた。そういえばついさつき万年筆をリーゼルに渡したばかりだが、あればどうなつたのか。尋ねたいけれどできないものかしさにあちこち視線を飛ばしていると、ピアキイが出し抜けに、ミュウに向けて手を振つた。

「おまえ、荷物整理しといて」

「……は？」

「明日、俺とアルカナは出かけるから。お前は休み」

アルカナとミュウははと顔を見合せた。そんな話は聞いていい。

「またエフAINの」本家ですか？」

「はあ？」

心底うざつたそうにピアキイは薄つすら目を開いた。みかん色の瞳が弱弱しくアルカナを射抜く。

「お前が言つたんだる、ハイメント家に来いつて」

「……それって」

「ハイメント家にはもう連絡してあるから。…もうね…集会から帰ってきてから仕事が終わらなくてろくに寝てないんだよ」

アルカナはむくむくと自分で自分の中で気分が高揚していくのを感じた

…ピアキイはやつぱりリーゼルと逢瀬を楽しんでいるわけではなかった。そればかりか、彼は自分との時間を作るために、こんなにへとへとになるまで仕事をがんばってくれたといつ。どうやら香水には気づいてもらえたが、アルカナは大満足だった。

にんまりするアルカナとは対照的に、ファレイアがわめいた。

「えー！…フリーもいつしょに行きたいよう…」

ファレイアには散々駄々をこねられた。いつたいどういう心境の変化か知らないが、香水はピアキイではなくファレイアのほうに劇的な効果をもたらしたらしい。その晩、アンノが迎えに来たにもかかわらず、アルカナのスカートから離れようとしない彼女に、ピアキイは心底迷惑そうな顔をした。

「邪魔だからさつさと帰れよ」

「やだやだっ！フリー、アルカナといつしょにいるー！」

「駄目だよフリーちゃん、アルカナ嬢にご迷惑がかかるから」

「ホントだよ」

唾でも吐きそうな態度でそう言つピアキイに苦笑して、アンノは身をかがめてファレイアを抱きかかえた。立ち上がるときに彼はすんとひとつ鼻を鳴らした。

「アレ、アルカナ嬢、香水変えました？」

「え？ええ。わかりました？」

「いいですねエ。ウチの女房の使つてるものに似てるかな。フリーもそれで甘えん坊になっちゃったのかな？」

「ふふ、お世話になつてゐる女官の見立てなんです」
さらりと言つたところで、アルカナは隣のピアキイの機嫌が急降下していることに気づいて口をつぐんだ。ピアキイの脚がふらりと動く。アルカナははらはらした。

アンノはそれに気づいているのかいないのか、にこにこ笑いなが

ら続けた。

「そういえばお一人とも、明日はアルカナ嬢の」実家に帰られるとか

「は、はい。そなんです。ピアキイ様がわざわざお休みを取つてくださつて…」

「まあ、近頃の閣下、鬼のように働いてましたからねえ。ピアキイ付の女官がずいぶん拗ねてましたよ」

アンノはどこまで知つているのだろう。アルカナは目を瞬いた。わざわざアルカナの前で彼女の話題を振るということは、リーゼルが最近、何かにつけてアルカナを嘲りに足繁くやつてくるのも伝わつていいのかもしれない。

「いい加減にしろよ、アンノ。蹴るぞ」

そう言いつつピアキイは既にアンノの向こう脛を蹴つていた。アンノがうめいた。

「まつたくモオ。そうやって閣下がアルカナ嬢を囮つて出でないから、あることないこと噂が立っちゃうんですよ」

噂？アルカナは尋ねようとしたが、その前にピアキイがむつりと言ひ放つた。

「つるさい。調子に乗るな。口が軽いんだよ。おせつかい」「都合悪くなるとすぐ暴言吐くんですから。アルカナ嬢に嫌われちゃいますよ。ねエアルカナ嬢」

「えつ、いえ、そんなことは…」

またピアキイの脚がゆらめいているのを見てアルカナはあたふたした。どうやら確信犯らしい。アンノはケタケタ笑つた。

「まあ、明日はどうぞ楽しんできくださいね！じゃあ今日はこれで。フリー、アルカナ嬢とピア様にばいばいは？」

「むー」ファレイアはまだしかめつ面だ。「アルカナ、ピアさま、ばいばい」「

アズラーノ親子が帰るなり、ピアキイは勢いよく扉を閉めた。よ

ほどアンノの言動がお気に召さなかつたらしい。辟易した様子でソファにうつぶせに倒れこむと、「うー」と声にならない声を上げている。その背中がなんだかかわいらしくて、アルカナはくすりと笑つた。

「わらうな

くぐもつた顔でピアキイが言った。アルカナは口元に手を当てて神妙な顔を取り繕うと、『まかすように積み木を片付け始めた。ピアキイの機嫌を損ねて明日の帰宅が叶わなくなつたら大変だ。』ユウはもう帰してしまつたし、どこかいたたまれない気持ちで片付けをしていると、やがてピアキイが口を開いた。

「アルカナ」

「はい？」

振り返ると、ぼーっとした様子でピアキイはこちらを見ていた。アルカナは思わず笑つてしまつた。

「ピアキイ様、眠いのでしたら、寝室に行かれたらいかがですか？」

「ん」

ふらふらとピアキイは立ち上がつた。午後一杯寝倒したのにまだ足りないらしい。寝ぼけ眼でふらりとすると、彼はなぜかこちらに寄つてきて、ぎゅうとアルカナを抱き込んだ。

「！？」

アルカナは寿命が縮まるかと思った。ピアキイは何も言わずにアルカナを抱きしめて、そして、満足がいったとばかりにあくびをしながらするつと寝室へと歩いていった。

いつたいなんだというのか。

積み木を取り落としたことにも気づかずアルカナは呆けた。頬が熱くて仕方ない。眼下の問題は、彼の眠つているだろう夫婦共用のベッドに自分が潜り込めるか。アルカナはまったく自信がなかつた。

act・15 恋する者（後編）

ピア様は香水に気づかなかつたんじやなくて、むしろちやんと最初帰つてきたときに気づいてたけどあまりに眠くて言いそびれて、いつ言おうかタイミングを見計らつてたのにアンノに先を越されたとかだとかわいい。

act · 16 ハイネントの館（前書き）

更新滞りまして申し訳ありません。

アルカナは寝不足だった。朝からピアキイの寝顔を間近で拝むと、いう心臓に悪い思いを久々にしたアルカナは、うつらうつらしながら白いワンピースと厚手の深緑のカーディガンに袖を通して、香水に手を伸ばしたところでようやくバチリと目が覚めた。香水の瓶を持った手をピアキイにつかまれたのだ。

「な、なんですか？」

「その香水はやめる」

ドクリと心臓が鳴った。アルカナは恐る恐る尋ねた。

「お嫌いでしたか？」

「…べつに」

口を尖らせてピアキイはそっぽ向いた。このところアルカナが習得していたピアキイの表情録によると、これは恥ずかしがっているときの彼の拳動だつたはずだが、どうして彼が恥じらう必要があるのかまるで分からず、アルカナは首を傾げた。思い当たる節といえば、昨晩のアンノとのやりとりくらいである。

…もしかして、私の香水が変わったことに気づけなかつたからつて、拗ねてるのかしら。

まさかねえ、アルカナは自分の予想を打ち消して、これまでと同じ香水を手に取つた。今度はピアキイも文句はないようだつた。

ハイネント家は、ファナティリスト神殿から随分離れているため、寝不足のアルカナはひいこら言いながらピアキイのあとをついていった。もともと引きこもりのアルカナには、坂道の多いファナティリストの街を歩くのも一苦労である。容赦なくアルカナを置いていこうとするピアキイに、「待ってください」とへろへろ叫んだ

回数が二回に上るつかという頃、ようやくピアキイは呆れたように振り返った。

「お前、そんな運動不足でよく神殿まで来られたな」

「お輿入れのときは馬車だったし、家から神殿に向かう道は下り坂なので…」

ピアキイはため息をついた。彼の長い脚は疲れ知らずらしい。考えても見れば彼は毎日のように神殿からあの宿屋まで行き来していたのだ。まったく尊敬する。

肩で息をするアルカナに、ピアキイは目を眇めて、それから不意にアルカナの手を取つた。ぎゅっと握られる。エファン本家の時よりも温かい手だった。するりと指を絡められて、アルカナは思わずピアキイを見上げた。彼はぐいぐいアルカナの手を引っ張つて歩き出した。彼の歩幅は広くて、アルカナは少し小走りにならなければいけなかつたが、すっかり仰天してしまつて疲れも吹つ飛んでいた。

「機嫌のアルカナに気づいているのかいないのか、ピアキイはさつさと歩を進めていく。貴族街は人通りもなく静かなものだが、時折通りがかる小貴族然とした青年が、物珍しげな目でチラリと見る所以、アルカナはうつむいた。ピアキイ・ケルト・エファンという男は、同性の目から見ても格好いいのかしら。アルカナと並んでいる姿が不釣合いだと思われたら悲しいものだ。

「ほら」
物思いにふけつていると、ピアキイが空いた左手で指差した。「あれだろ」

望郷の思いとは大体こんなものだろうか。不思議な心地でアルカナは我が家を見つめた。随分長いこと帰つていなかつたはずだが、家の外觀は記憶と何一つ食い違ひもなく、精々庭先の樹が実を付けてくらいで、妙な違和感とともにアルカナはほつと息をついた。変わつていなことが奇妙に思えるというのもまた奇妙な話だ。一年

も離れていたのに。思つたとこりでピアキイがぽつりと言つた。

「五ヶ月ぶり?」

「そんなところです

屋敷の向かいの宿屋がざわめいている。いつもピアキイが立つていたのはちょうどこのあたりだらうか。カラントベルを鳴らして開いた扉から、簾を持った宿の従業員が顔を出す。手をつないだままのピアキイとアルカナに気づいて、一瞬おやと目を見開いたものの、すぐににこやかに会釈して掃除をはじめた。いたたまれなくなつて手を離そうとしたが、直後ピアキイから強く引っ張られてアルカナはたたらを踏んだ。

「わつ」

「さつあと行くぞ」

ピアキイについて早足になりながら振り返ると、ぱちりと従業員と目が合つた。まだ若いその青年はお茶田にワインクして、「こ武運を」とでも言いたげに一礼してみせた。

小さな門を越えると申し訳程度にささやかな庭があり、その先に両開きの扉が鎮座している。ピアキイはためらいもなくノックを鳴らした。アルカナは訳もなくどぎまぎした。しばらくの沈黙のあと、軋んだ音を立てて扉が開いた。ひょっこりとあどけない顔が突き出す。

「はいー、どちら様ですか?…ひやあ」

トリノはピアキイの顔を見るなりパカリと口を開いた。ピアキイの輝くオーラに当てられたらしい。

アルカナはため息をついた。

「トリノ、ただいま」

「わ、お帰りなさいませ、アルカナお嬢様!ピピッ、ピアキイ様もよつこそいで下さいました!」

勢いよく両開きの扉を開くと、その勢いそのままにトリノは絨毯に

かかとを取られてすっ転んだ。アルカナには使用人とは思えないほど生意気なくせに、ピアキイを目にした途端これだ。アルカナは気まずい緊張を開けるために言った。

「…うちの使用人のトリノです」

「知ってる。お前が一度寄越した奴だろ」

それからピアキイは愛想笑いを浮かべて、トリノに近寄つていった。初めてアルカナと面会したときもこんな顔をしていたが、今見れば彼の外行きの顔だとすぐに分かつた。

「大丈夫か？」

「あ、あわわ、大丈夫ですウ…」

トリノがピアキイの手を取りうとしたことに、ピアキイの眉がぴくりと動いたので、アルカナは思わず口出ししていた。

「ピアキイ様、どうぞお気になさらないでください。トリノ、ピアキイ様のお手を煩わせてはいけないわ」

トリノがはつとして手を引つ込めたので、アルカナはぐいと彼の腕を引っ張つて立たせた。いつの間にピアキイ様と手を放したのかしら。トリノの腕を掴んでいる左腕をじつと見てアルカナは目を瞬いた。

「もう、ちゃんとしなさいよ。まだそんなにドジなのね」

「まだお嬢様が家を出されてから半年じゃないですか」

相変わらずアルカナにはふてぶてしい使用人だ。しかし、アルカナとのやりとりの間に冷静さを取り戻したらしいトリノは、ようやく彼の本分を思い出したらしかつた。

「旦那様を呼んできます！」

そうしてわたわたと走り去つていったトリノを見送つてから、アルカナはピアキイを振り返つた。

「客間に参りましょう。すみません、うちの使用人の躾がなつていなくて」

本来なら客人を部屋に通してから主人を呼ぶのが筋だろうに。アルカナは苦笑した。トリノは変わらずそそかしいようだ。ピアキイ

はあまり氣にしていないという風に肩をすくめた。

「まつたく失礼いたしました」

しかしアルカナが弁解するより先に、階段を下りる音にあわせて青年の声が朗々と響いた。一人して見上げると、薫色の髪をなでつながら、おつとりとした薄目の男が微笑んでいた。

「ピアキイ・ケルト・エファイン閣下なんて雲の上のお方が我が家に来たものだから、彼も緊張しているのでしょう。…申し遅れました。ツヴァルク・ハイネントと申します。この家の婿で、アルカナの義兄でございます。アルカナがお世話になつております」

「…どうも」

ピアキイはまた愛想笑いを浮かべた。「雲の上」という言い方が気に食わなかつたらしい。アルカナは慌てて言った。

「ピアキイ様、この家にいる間は、どうぞここを我が家と思つてくつろいでくださいね。この家の者も家族として接してくださいんですからね」

「アルカナ、そんな失礼な…」

アルカナはツヴァルクの足を踏んづけた。彼は鈍感だから、アルカナがどうやってピアキイを誘つたかなんて気づきもしないだろう。ピアキイはようやく表情を和らげた。アルカナの襟元に手を伸ばしてリボンを弄つてくる。アルカナはにつこり笑つた。

「うちの父などは身分に頓着しない人ですから、ご無礼があるかもしけませんが、どうぞお許しくださいね」

ピアキイは答えなかつたが、氣を悪くしてはいないらしい。アルカナはツヴァルクを見上げた。

「客間に参りましょう」

案の定と言つべきか、アルカナの父、トロット・ハイネントは、

かの世界王の甥にもまつたく氣負うことなくにこやかに迎えた。

「じ無沙汰しております、ピアキイ閣下。アルカナはいい子でやっていますか？」

「ええ、アルカナはとても氣立てがよくて頼りになります」にこやかに答えたピアキイに、どうだか、とアルカナは心の中だけでつぶやいた。普段のピアキイに慣れてしまつたからか、こうして猫をかぶつた彼はなんだか奇異に見えた。

トロットはうんうんうなずいた。

「そうでしょうそうでしょう。うちの子は家事ならなんでもできますからお役に立てることもあるでしょう」

「あなた！ その失礼な口を閉じてくださいな！」

母のミリアナが真つ青になつてわめいた。相変わらずの我が家である。アルカナはちらりとピアキイを伺い見た。すると彼はなにやらくすくすと笑つている。おなじみの嘲笑や繕つた笑みではない、紛うことなくピアキイの笑みだ。アルカナはびっくりした。

「なんですか？」

「おまえって母親似だろ」

ピアキイの台詞にアルカナはきょとんとした。

「皆は父似だと思いますけど」

「さつきの母親の台詞、おまえにそっくりだった」

ひそひそ内緒話をするみたいに囁かれ、アルカナはあたふたした。苦し紛れに「や、やだ、そんなことありません」と言つのが精一杯だ。

アルカナとピアキイ夫婦を見ていたツヴァルクが笑つた。

「何はともあれ、元気そうでなによりだ、アルカナ。君ときたら、僕のいない間に閣下との顔合わせを済ませてしまつて、僕が直接お祝いを言う暇もくれないんだから」

「急な話でしたから仕方ありませんわ」

姉のハノンがさらりと言つ。アルカナは曖昧に笑つた。

輿入れが決まったとき、このツヴァルクは父の代わりに大陸のほうへ使いに出でていたのだ。そんなに長い出張ではなかつたが、戻ってきたのはアルカナとピアキイの顔合わせより後のことだつたから、アルカナは男性と会うことが許されておらず、ツヴァルクからの祝いも姉伝に聞いたのだ。

ハノンとツヴァルクは相変わらず夫のほうが妻にたじたじらしい。アルカナは家族を見回した。

「お父様がたはお元気でしたか？」

「何事もなかつたわ。まったくあなたは、手紙のひとつも寄越さないんだから…」

「まあまあ、ミリアナ。便りがないのは元気な証だよ」

父が母をなだめた。そういうえば父からもらつた万年筆をなくしたことを言うべきかしら、アルカナがぼんやり考えながら、紅茶にジャムを入れてかき混ぜていると、またもピアキイが囁いてきた。

「夫婦つて本当に違うんだな」

「はい？」

「リズ兄さんとナシヤ姉さんとちがう

「そりやあ、リズセム様とナシヤ様は…いろいろ規格外ですよ」

妻にべたべたしていたリズセムの姿は強烈だった。新婚だつての二人には敵うまい。少なくともアルカナとピアキイでは天地がひっくり返つても彼らのようにはなれないだろう。ただ、彼が少年時代世話になつていたアズラーノ夫妻も仲むつまじいと聞いているし、ピアキイにとつての夫婦の理想とはそういう仲のよいものなのかもしれない。

結婚してから突然ピアキイが丸くなつたのもそういうことかしら？アルカナは紅茶を飲みながら考えた。うちの使用人よりもピアキイ様のほうが紅茶の淹れ方がうまいわね、関係のない話だけど。

そもそも、自分とピアキイは、半年も結婚生活を続けてきたのに、お互い夫婦という意識がいまいち薄い、そんな気がする。アルカナ

にとつてピアキイは、夫ではあるけれどそれ以前に憧れの青年であり、向こうも妻であるアルカナにきっと気を許してくれているのだろうが、それが伴侶に対する気安さかと問われれば、どこか違う気がした。友達では決してないし、家族というにはどこか一線を引いていて、恋人ではない。言葉では表しがたい不思議な関係だ。同じ部屋に住む他人、そんなあたりが一番近いだろうか。

ピアキイはアルカナとの関係をいつたいどんな風にしたいのだろう、アルカナは知りたいけれど知りたくない心地で、紡ごうとした言葉を紅茶で押し流した。ピアキイが自分との夫婦仲を、リズセムやナシヤのようにする気がほんのちょっとでもあればよいのだが。

会話が途切れたところで、ハノンがアルカナに声をかけた。

「それにしても、アルカナ。あなたいつの間に髪を染めたの？」

「え？」

アルカナは眉をひそめた。「なんのこと？」

隣のピアキイがクッキーを取ろうとしてやめたのを横田に聞き返すと、困惑したようにハノンは首を傾げた。

「気のせいかしら…あなたの髪、ちょっと緑がかっているような、そんな気がして」

そんな馬鹿な。私は髪なんて染めませんよ。その場では一笑したが、その晩ふと気になつてアルカナは自室の鏡を覗き込んだ。言われてみれば、自分の平凡な茶髪に、うつすら緑が混ざつていて、な気がしなくもない。けれど、元からこんな色だったような木もあるし、少し違和感を覚えるものの、アルカナは首をひねるばかりだった。髪の色が変わるなんて、そんなことは成長とともににまあることだし、気にすることでもないだろう。アルカナは納得した。

「それにしても緑なんて、まるでエヴァインの血族みたいね」

自分で言いつつ噴出した。ありえない。実は遠い先祖がエフAINの一族だつたりして。「冗談にもならないことを考えながら、アルカナは久々に自分の部屋を眺め回した。懐かしい部屋だ。嫁入りに必要最低限のものしか持つていかなかつたから、箪笥の中の地味な衣装も、机の中の小物もそのまま。アルカナは引き出しを開けた。顔合わせのあと、ピアキイからもらつた野花の数々が、ボブリや押し花になつて入つていて。

そういえば、連日見かけたピアキイのお相手たちはどうしているのだろう。リーゼルの様子を見るに、ピアキイが結婚にともない片端から女性を切るなんて殊勝なまねをしているとはとても思えない。そのうち私、後ろから刺されるんじゃないかしら。それこそ「冗談ではない。

花の入つた箱と、その下にあつた日記帳を取り出すと、アルカナはそれを持つて窓際の定位置についた。向かいの宿は、まだ入り口にライトがついていて、夜はことさら繁盛しているらしかった。

アルカナは机の小さな明かりをつけて、ぱらりと日記帳を開いた。日記をつけるのは苦手だ。続いたところで一日に一行書けばいいほうだし、この日記帳も最後まで使い切らずにあきらめてしまった。最後のほうは、ピアキイの連日のお相手について一言添えるだけになつている。ピアキイに淡い恋心を抱いたあの雨の日から、日記帳を開くのが億劫になつてしまつたから。不思議なものだ。彼の妻となつて、かつての自分の日記を読むなんて。

なんだか開いてはいけない過去を垣間見てしまつた気がして、アルカナが日記帳を閉じたところで、部屋の扉がノックされた。アルカナは呆けた。部屋にやつてくる人といえばハノンかトリノくらいのものだが、一人のノックの音とは違う気がしたから。

「はい」

そそくさと箱の蓋を閉めて日記帳をその下へ追いやると、返事もな

しに扉が開かれた。ひょっこりと金髪が覗く。夜の中でも彼の髪は輝いているのだから不思議だ。

「ピアキイ様！どうされたのですか、こんな夜分に」

夫婦とはいえ、妻の実家だ。実家帰りしている中で夫婦が共に一夜を過ごすのは、あまりいい顔をされないし、部屋を訪ねるのもまた然りだつた。アルカナはぎよつとして立ち上がつたが、ピアキイはさして気にするでもなく部屋に乗り込んできた。

「へえ」

ぐるりと部屋を見回して、ピアキイは声を上げた。

「ここがアルカナの部屋か」

「そうですけど…あの、あまり見ないでください」

夫に独身の頃の部屋を見られるなんて恥ずかしい。そういう気持ちを言外に込めてみたのだが、ピアキイはひとつくりと笑つただけだつた。ずんずん窓際のアルカナの元まで歩み寄ると、皿を丸くするアルカナに構いもしないで、彼はアルカナを囮うように窓枠に手をかけた。身をかがめて顔を寄せてくる。

「ピアキイ様！？」

熱に浮かされた様子のピアキイにアルカナは混乱した。酔っているのだろうか？日々の様子を見るに、彼は酒好きというわけでもないが弱くはないはずだし、夕食でもほんのたしなむ程度ワインに口を付けるくらいだつた。

しかしアルカナの予想は幸か不幸か外れた。彼は額をこつりとアルカナのそれとあわせると、覗き込むようにアルカナの瞳をじっと見つめた。彼のみかん色の瞳に、アルカナは落ち着かなかつた。

「あ、あの？」

ピアキイはそして悠然と微笑んだ。艶やかな笑みだ。どこか満足そうな色さえ感じてアルカナは戸惑つた。一体全体、彼は何をしたいのだろう？

「アルカナ」

そしてピアキイはアルカナの名を呼んだ。

「お前という奴は、本当に俺の期待を裏切らないね」「はい？」アルカナは目を瞬いた。

ピアキイは、両手でアルカナの頭を抱えて、くしゃりと髪の毛をゆるく握った。そういえば、部屋に入ったときに結っていた髪を下ろしたのだ。夫の前だというのに…アルカナは途端に恥ずかしくなつて視線をさまよわせた。

「私、ピアキイ様になにかしましたか？」

「さあ？」

くすくす笑つてピアキイはアルカナの髪を弄つた。

「ハイネント卿に釘を刺されたよ」

「お父様に？」

「俺に娘は差し上げたから、俺がお前をどう扱おうと何も言うわけにはいかないが、できれば幸せにしてやつてくれる嬉しいってさ」

「父がそんなことを？」

能天気な父だと思っていたが、たまには父親らしいことも言うではないか。アルカナは眉尻を下げた。娘としては嬉しい言葉だけれど、父もまた肝の据わったことをする。本来なら、世界王の甥だなんて身分違いもいいところ、アルカナがどう扱われようと文句のひとつも言ひ術などないというのに。

幸せねえ、アルカナは首を傾げた。自分はピアキイの元に嫁いで、幸せになれるのだろうか。存外穏やかな日々を送つていたから忘れそうになるけれど、ピアキイがアルカナを幸せにしてくれる人間だとは思えなかつた。ピアキイのことは好きだが、そつ、もちろん恋しているが、それは危険なものに身を焦がしてしまつような、ある意味抜け出せない火遊びにも似ている。どうあがいてもいい結果にはならないくせに、それでも抗いきれずに首を突っ込んでしまうのだ。

アルカナの心中などお見通しだとでも言うように、ピアキイはくすりと笑うとアルカナの髪に口付けた。彼の麗しいみかん色の瞳が、上目遣いにいたずらっぽくアルカナを射抜く。彼の瞳にはなにか魔術でもかかっているのではないかろうか。アルカナは怯えすら感じながら思つた。まるでいとしいものでも見るよううつとりとアルカナに流し目を送るものだから、勘違いしてしまいそうだ。

「お前は俺のものだよ、アルカナ。この髪の毛一本でさえもね」甘い甘い蜜を注ぐみたいに、ピアキイはアルカナの耳元でささやいた。恥ずかしすぎてピアキイの言葉などまるで意味を成していなかつた。

やつぱりこの男は危険だ。

アルカナは目の前の夫に魅せられながら思つた。このお綺麗な姿の内側には、どす黒い何かが潜んでいるのだ。彼の両親のことも、不老不死のこともその一端なのだろう。このピアキイ・ケルト・エファインという男は、まだまだアルカナには計り知れないにかを隠し持つてゐるに違ひない。

くらくらしているアルカナに追い討ちをかけるように、ピアキイはアルカナの口を自分のそれでふさいだ。しかしアルカナがぎくりとして抵抗するより先に、あつと言う間すら与えられずに彼はくちびるを離すと、ちらりと箱の下から覗いている日記帳を見て去つていつた。先ほどまでの艶めいた表情などどこへやら、去り際は涼やかな夫を嘸然として見送つて、アルカナは椅子に崩れ落ちた。

「な、なんのよお」

アルカナは情けない声を上げて机に突つ伏した。とにかく分かるのは…もともと彼には尋常でないにかがあるけれど…それを差し引いても、最近の彼はどこかおかしいということだ。

act・16 ハイネントの館（後書き）

この世界では一年間は365日ですが10ヶ月しかありません（一ヶ月が40日くらい）。ので、アルカナが結婚してから大体半年ぐらい経っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5287o/>

しらゆり

2011年8月7日04時41分発行